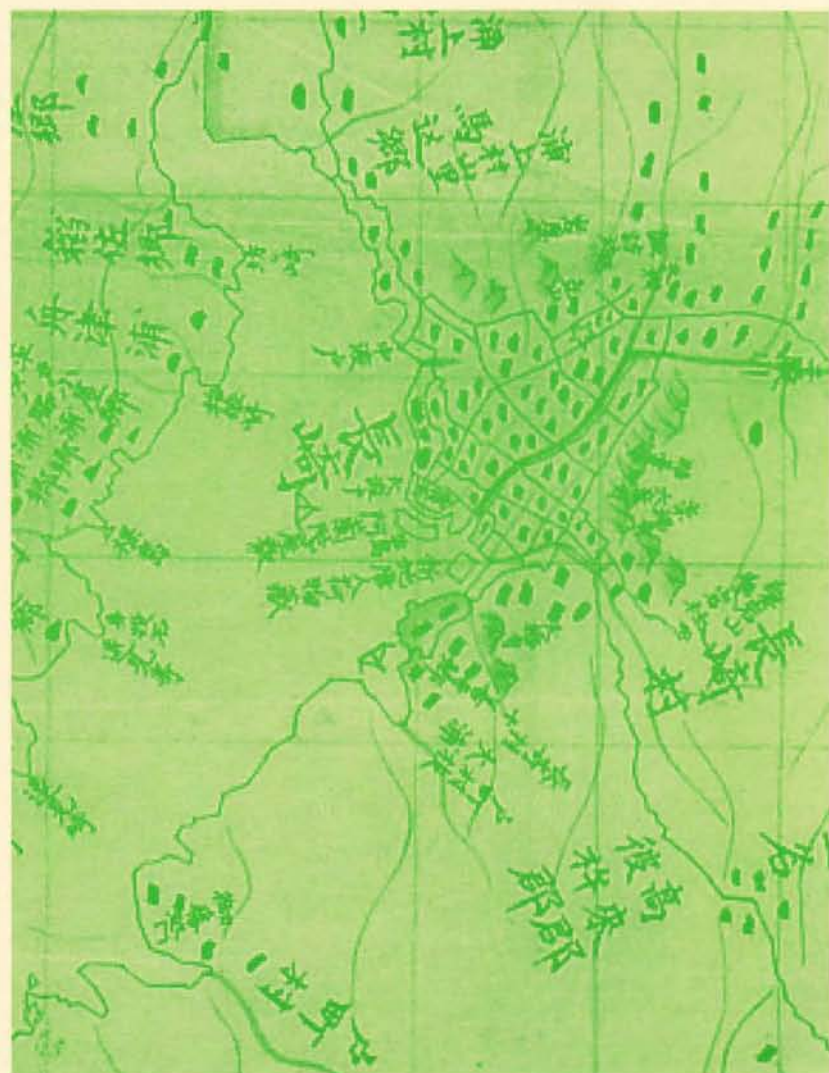


史料と伊能図

伊能忠敬

研究



二〇〇六年 第四五号

伊能忠敬研究会

表紙図解説

米国議会図書館蔵

伊能大図二〇二号部分「長崎市」付近

長崎は九州の南西端、肥前国現在の長崎県野母半島の西側付根のリアス式入江の奥にある良港である。長崎は、古く元亀元年（一五七〇）ポルトガル船に対しての開港にはじまる。寛永一八年（一六四一）オランダ人が初めて出島に入っている。中国船も多く出入りしていた。江戸時代を通じて唯一のヨーロッパに向って門戸の開かれた土地であった。

本図は長崎周辺で、市内を縦横に測線が通っており、幕命による伊能忠敬測量隊の第八次測量の文化九年（一八一二）十一月に二日ほど更に一〇年八・九月にかけて長崎市域には一日ほど滞在していた。五島列島測量中に殉職した坂部貞兵衛の供養もあったのか、あるいは休養や長崎見物の意味もあったろう。周辺の神社仏閣が詳細であり、出島も描かれている。

先号の平戸の所でも記したが、本図は、陸地測量部（国土地理院の前身）が、国土の地形図類作製のための計画・設計用に原図から必要最小限の要素を写し取ったと考えられる。骨格図というか素図のように海岸線、交通路（測線）を描き、集落は黒描で位置を示し、山岳等は省略されている。大図のこれらの写図がわが国の近代以降の地図作製に果たした役割は大きく、近代測量過程での未測地域はこれらの図に拠った部分が少なくない。

（題字は伊能忠敬の筆跡）

（清水 靖夫）

目次 45号

話題 背文を越えた五葉の松・屋久島再訪

伊能 洋 一

「世田谷伊能家伝存伊能忠敬関係文書目録」発刊

編集部 二

浅野祐氏小島一仁氏の歴史証言

伊能 陽子 四

坂部貞兵衛の新案内板が完成

佐久間達夫 五

佐原村用水と用水樋

馬場 良平 二二

豊後街道と太閤道伝説を歩く・九州支部報告

編集部 五三

話題散歩「伊能忠敬研究の回顧と省察」

編集部 五三

特集 長崎旅行

忠敬先生思い出の地 平戸・長崎

前田 幸子 八

旅のスナップ・平戸長崎さるくから

福田 弘行 一四

平戸藩と山鹿素行

杉浦 守邦 一八

新史料研究から

「文化の開拓者 伊能忠敬翁」(二)

宮内 敏 二四

伊能測量隊員 柴山傳左衛門について (二)

安永 純子 二九

伊能図にみる朝鮮の山々 その二

辻本 元博 三八

新地域史料

越後岩船測量―与惣左衛門覚書より (三)

風間 広吉 四六

研究ノート

続々三浦半島に忠敬の足跡を歩く

白根 貞夫 五四

良助の次男 榎本武揚 (四)

伊藤 栄子 五九

伊能測量隊 子午線一度の長さの測定 (二)

佐久間達夫 六六

忠敬談話室だより

編集余話

編集部 五八

近世事典と大計測

山本 公之 七一

東海道の伊能下図

加藤 忠三 七一

伊能図に再会

奥永 渚 七二

日々の話題・お知らせ

七二

表紙図解説 清水靖夫

編集協力 前田幸子

忠敬史跡

背丈を越えた五葉の松



屋久島・忠敬記念碑再訪 伊能 洋

六年前に伊能ウオークで屋久島の魅力に取りつかれた面々が、再訪を熱望し、ついに実現することになった。私たちも「伊能の碑」と、私が植樹したヤクタネ五葉の松が健在であるかどうかを確かめたいと、メンバーに加わり総勢九名となる。

「伊能の碑」は緑に囲まれてすっかり落ち着き、私の背をはるかに越えるほど伸びた五葉の松が私たちを迎えてくれた。上屋久町町長を表敬訪問、完成したばかりの「伊能家文書目録」を贈呈する。郷土資料館では山本先生にお目にかかり、伊能測量隊関係のコーナーを見学。坂部貞兵衛様御泊の木札や測量隊受入れの現地資料と並んで「伊能忠敬研究」があり嬉しかった。

今回は念願の島一周を果たし、大川の滝、千尋の滝、白谷雲水峡、ヤクスギランドなど堪能し、ヤクザル、ヤクシカにも会え、その上望外の海亀の産卵も見学出来、さらには天を埋める星に言葉もない最高のツアーとなった。

改めて、二百年前に忠敬先生はどのような思いで、この島を巡っておられただろうかと深く息をついたことだ。

06・6・25

(会報26号32頁で紹介。写真右端が五葉の松) (写真 大庭 功)

「伊能忠敬関係文書目録」 発刊!

浅野祐氏、小島一仁氏の歴史証言

待望の「文書目録」が完成し、六月二日全国の主要図書館、博物館、文書館など文化施設と関係者、香取市小中高校などに四百余冊が寄贈されました。伝存資料には浅野祐氏、小島一仁氏の書簡も入っています。お二方から忠敬研究の貴重な歴史証言を頂戴しました。

伊能家歴代の御厚志 浅野祐氏

五十年以前の拙信のこと、自身忸怩たるを案じ得ませんが、それにしましても、拙信如きまで保存された、故多嘉子夫人の御遺徳、かつて昭和三十年夏来たいへんお世話にあずかった往時偲ばれ感慨あらたに致しております。

往時、旧宅土蔵に秘蔵されし伊能家諸資料、伊能家の御厚意により閲覧整理の機会を得、土蔵の隅々にいたるまで披見におよび、多嘉子夫人と小島一仁先生と三人で、旧宅の一室に搬出し、まずは分類整理に着手しました。忠敬翁関係特に書翰類は、多嘉子夫人と小島先生が丹念に調べられました。その際新たに見出された忠敬翁関係書状類は、のちに文化財保護委により重文指定され公刊（千葉県史料）されていく筈です。

またその際、江戸期佐原村に関する膨大な村方文書類が出てきました。それまで存在すら知られていなかったものにて、まずはそれらを整理し目録にとどめることに着手したのでした。目録カードを提供されたのは、箭内健次教授であったと記憶します。整理につき市教育委員の理解協力を得ましたが、原稿用紙は市教委の提供によるものでした。当時教委の金田章さん島田さんも目録作成に協力してくれました。

余談ながら、土蔵二階の一隅から「此物使途無之候」と墨書された紙包が出てきました。先代三郎右衛門老夫人の手になるものと多嘉子夫人が言われ、それを前に、多嘉子夫人と小島先生と共々破顔して、言い難い感慨を抱いたことを、いま思い起します。

往時まで、忠敬翁測量関係の一部のほか、伊能家文書類は世に知られることなく旧土蔵の奥深くに藏されてありました。当時の御当主夫妻の御好意と英断により、昭和三十年の頃から世に出ることになりました。しかし貴重な史料が発掘され世に出るとき、散佚の危険もまゝあります。そのようなこともなく伊能家史料が護り継がれて、今日公藏されるところとなり、広く研究の資にも供し得るものとなっておりますこと。洵に大慶のいたりであります。

同家文書のうちに「決して他見無用、求められるもその存在を否認せよ」という意の、景利翁の奥書があったのを記憶します。

伊能家文書が今日あるは、そうした家訓のもと「使途無之候」ものにといたるまで厳格丹精に伝存に意を用いられてきた伊能家歴代の御厚志とそれを継承された関係者の方々の真摯な御尽力によるところと感銘を深くしております。

06・3・4

学問的研究への寛容さ 小島一仁氏

一九五〇年代の伊能家史料の「発掘」に関しては、私もこれまで、折にふれて少しづつ話たり書いたりしてきましたが（「伊能忠敬研究」一〇・一一号の「講演」及び「古文書教室」など、また「佐原市史料篇」の「解説」等）記憶に残っていることは、まだいろいろとあります。とりあえず、ここでは浅野さんの手紙に関連して、二、三のことだけ記しておきましょう。

伊能康之助多嘉子御夫妻は、ある事情から一時期伊能家の土蔵の鍵を私にあずけられ、史料の管理を私にまかせられました。このことか

ら私は御夫妻が先祖からの史料を何としてもまもりぬきたいという強固な意志を持っておられ、しかも学問的研究のために、その史料を利用することについては極めて寛容であることを知りました。

史料整備に協力した人として浅野さんは当時市教委にいた金田章（現姓大竹）さん島田七夫さんと箭内健次教授の名をあげていますがそのほかに千葉大学の小笠原長和教授、川村優講師や金沢大学の遠藤元男教授なども協力して下さったと思います。

なお、今回の「世田谷伊能家伝存忠敬資料目録」には、忠敬の妻みちの手紙も入っているようですが、これは佐原の伊能家の土蔵から「発見」されたものです。浅野さんと私が多嘉子さんの御案内で、はじめて土蔵の中に入ったときには、この手紙は見つからなかったのですが、数年後に土蔵が解体修理されることになったとき、土蔵の中のものであらざらぬ整理したときに「発見」したものです。これが早くに「発見」されていたら、おそらく重文に指定されたのではないかと思われるます。

こうして書いてみると、次から次へと思いが浮かんできますが、何しろ五十年以上も前のことなので記憶がいちもあるのではないかと思います。当時のことを知っているのは、今では浅野さんと私だけになってしまったようです。いつか浅野さんとむかしの事を語り合ってみたいような気がします。

06・6・7

資料通番一四七 浅野祐書簡

- 1 昭和三〇年 九月 六日 「伊能康之助・多嘉宛」封書一通
お蔵より史料一箱拝借（付 目録書き落としの分）
- 2 昭和三〇年一〇月一日 「同右宛」封書一通
夏休み中史料一覽願ひ 「測量日記」出版のご希望、
遠藤金沢大学教授お引受けくださる由

3 昭和三一年 四月一二日 「伊能多嘉宛」封書一通

遠藤先生、田山方南氏と相談のおつもり

4 昭和三一年 七月一五日 「伊能康之助・多嘉宛」封書一通

夏休み中史料一覽願ひ 遠藤先生、訪問希望

5 昭和三一年 八月 五日 「伊能多嘉宛」封書一通

東大史料編纂所・千葉大・金沢大各先生御参集

金沢大生五名参集（付 一覽リスト）

6 昭和三一年 八月二九日 「同右宛」封書一通

整理中は他の調査はお断りの方可 調査委員会設立の件も

市との諒解の上進行事等、遠藤先生の御意見

7 昭和三二年 四月二八日 「同右宛」封書一通

金沢大を辞す 田山（方南）先生借用分、返却願うつもり 出

版、一四〇年祭に間に合わず

8 昭和五七年 一月一五日 「同右宛」封書一通

誠文堂新光社より測量日記刊行計画 許可願う

資料通番一五二 小島仁書簡

1 昭和三一年 八月二六日 「伊能康之助・多嘉宛」葉書一枚

二九または三〇日に伺いたし

2 昭和三一年 八月 三日 「同右宛」葉書一枚

小笠原氏一行本日帰業 史料点検、格納

3 昭和三一年一〇月 八日 「同右宛」封書一通

重要文化財指定、重畳 整理のため拝借の書状、

返却方法ご教示請う

4 昭和三二年 七月 八日 「同右宛」葉書一枚

川村・浅野・金沢大の遠藤氏との日程調整

5 昭和三二年 八月 六日 「伊能多嘉宛」葉書一枚

小笠原氏尽力、伊能家史料一部公刊、歓迎

坂部貞兵衛の新案内板が完成



五島市宗念寺にて

五島市福江の的野圭志さんからお手紙と写真をいただきました。
『宗念寺山門の案内板、市の統合で作りました。ローマ字ではサダベエとなっていますので、文化財調査委員会に注意してお願いします。貞兵衛さんのお墓は私の家から直線にして百ばかりの近さです。』

安藤さんご夫妻墓参の時、貞兵衛さん墓前の道に白花タンポポが咲いていました。(五島古来のタンポポは白で、黄色は一本もありませんでした。) 最近は黄色の西洋タンポポに席巻されて市中は黄色のタンポポばかり。これではこれも危ないぞと、四、五本を私の墓に移植しましたが成功。毎年春になると白い花をつけています』

追伸です。『貞兵衛さんのお墓の戒名を見て私はとても心引かれるものがあります。皆さまにも興味を持っていただければと思います。』

「湖月院達譽關山一空居士」

湖月とは静かな湖に映る月、つまり「明鏡止水」ということではないでしょうか。「心に何のわだかまりもなく安らかな境地」と辞書にあります。達は測量の達人ということでしょうか。譽は浄土宗では戒名にはこの一字が必ず入ります。宗念寺は浄土宗のお寺です。

関山は大字典によりますと故郷のこと。一空とは貞兵衛さんの故郷と西の果ての五島とは遠い遠いところのようであるが、同じ一つの空の下ではないか。勿論、私は戒名のことについては何の知識も持たない素人ですが、何か貞兵衛さんをなぐさめているようで、当時の和尚さんの気持ちに迫ります。宗念寺の住職は私の友人で、名前を調べてもらいましたが文化年間のことで不明でした』

伊能ウオークするとき、小雨の中で貞兵衛さんのお墓参りをしました。帰りに頂いた玉之浦椿は、今年もわが家の狭いベランダで沢山花を咲かせました。佐原の忠敬のお墓に植えた玉之浦椿は、しっかり根を張ってきました。今度、福江を訪れるときは白いタンポポが咲いている頃にと、また夢をふくらませています。

伊能 陽子

佐原村用水と用水樋―村民と村役人の協力―

佐久間 達夫

「伊能忠敬研究会会誌」第四号に、『日本音紀行』水が伝える先人の偉業」というタイトルで、千葉県香取市佐原の小野川に架設されている「樋橋（とよばし）」、別称「ジャージャー橋」のことが紹介されていた（『朝日新聞』）。

樋橋は、今は人や自転車も通っているが、もともとは、名のとおり、水を渡すために造られた樋である。

そこで、平成六年に佐原在住の郷土史家香取五郎氏が伊能三郎右衛門家所蔵の「部冊帳」第五巻を基にして纏めた『佐原村用水及び用水樋修葺の事』という冊子を参考にして「佐原村用水と用水樋」について記してみたい。

「部冊帳」は、伊能家六代伊能景利が天正年間から享保十年（一七二五）までの佐原村とその近隣の村々における諸事の覚書を編述したものである。

佐原村用水並びに用水樋の記録の冒頭に、

佐原村用水樋之儀、当武拾八年前に新敷く拵へ候節、入用之儀は御高割に而、組々御地頭様方より下さる之由。

然る所に内々に割合い通りに金子出し申さず組御座候由に付、所々残し置き致し、成就仕らず候故、段々破損仕り候を年々修葺を差加へ候所に、元禄十四巳年に至り修葺に相叶はず候故、五組之名主、組頭相談之上、先規之通り御地頭様方へ願ひ奉り、新たに拵へ申し度き旨相

談相極り、古樋相改め候事。

・古樋之覚（延宝元年架設の樋）

一、長さ 拾三間式尺

一、内法 横四尺五寸 高さ式尺

一、板 厚さ式寸五分 高さ式間

一、ねだ 六本

一、柱 拾貳本（但し 川へ計り立て）

一、舟梁 所々に有り

・已正月新樋仕様注文之事（元禄十四年架設の樋）

一、長さ 拾五間（板厚さ壹尺角三枚割 板長さ三間物、

幅壹尺）

一、樋内法 高さ式尺三寸 横五尺

一、柱 拾四本 川に立候分、但し八寸角 長さ川へ

立込次第 是は両側に而 此の如し

一、ねだ 六寸角 長さ七尺式寸物拾五丁

一、舟梁 釘頭巻き六拾本 但し壹本に付、目三拾匁掛け

（以下省略）

と、記されている。

これによると、「佐原村用水樋」は、元禄十四年から二十八年前の延宝元年（一六七三）に新しく拵えたことがわかる。その時架設された用水樋の大きさは、長さ十三間二尺、樋の内法は、横四尺五寸、高さ二尺のものであった。その当時の伊能三郎右衛門家の当主は、五代景知（二八才）、長沢次郎右衛門家当主は、俊賢（一五才）であった。

元禄十四年に架設された用水樋は、長さ十五間、樋内法高さ二尺三寸、横五尺、柱は八寸角で、三間の物を十四本（片側七本）の規模のもので、佐原村本宿組の船大工仁左衛門が代金三十二両一分で落札し、樋並びに工事代金は、佐原村中の村民から、次のように拠出された。

○ 上宿組

地頭 近藤十兵衛

名主 五郎兵衛 内蔵丞

組頭 次郎兵衛 庄右衛門

市郎右衛門 伝四郎

永六貫貳百拾文五分

金にして六兩と八百四拾貳文

○ 下宿組

地頭 奥津内記

名主 茂左衛門

組頭 長左衛門 治郎兵衛

清助 新左衛門

武右衛門 七左衛門

九郎右衛門

永八貫八百七拾貳文

金にして八兩三分と四百八拾八文

○ 浜宿組

地頭 奥津内記

名主 吉左衛門

組頭 清右衛門 三右衛門

七郎兵衛

源次左衛門 与兵衛

永八貫八百七拾貳文

金にして八兩三分と四百八拾八文

○ 新居宿組 (仁井宿組)

地頭 近藤十兵衛

名主 久左衛門

組頭 左兵衛 平右衛門

永貳貫八拾五文

金にして貳兩と三百六拾文

○ 本宿組

地頭 天方主馬

名主 三郎右衛門

組頭 加兵衛 作右衛門

永六貫貳百拾文五分

元禄14年(1701年)の
佐原村用水樋のイメージ図

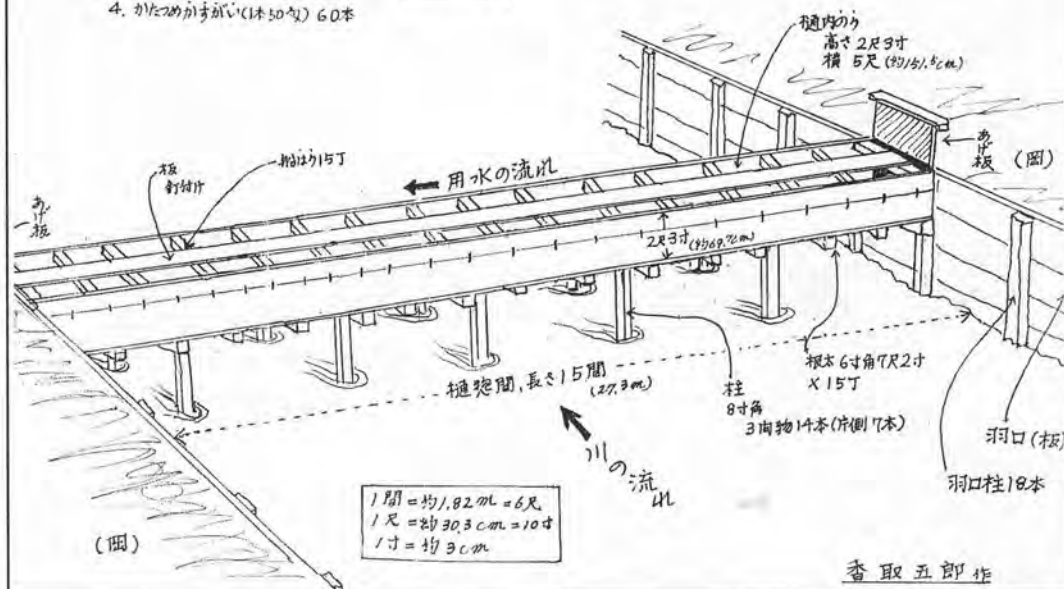
～部冊帳次五巻より～

〔本宿伊能三郎右衛門家側〕

金具

1. おとし釘(1本30匁) 板1両にて7本立て
2. かいおし釘(〃) 同上
3. 船はかり釘(〃) 頭巻60本
4. かためがし釘(1本50匁) 60本

1匁=3.75g



金にして六兩と八百四拾貳文

元禄十四年に新しく拵えた「用水樋」完成までの地頭への願書提出、家老による下見分、工事請負の証文、工事代金の拠出覚などが「部冊帳」に詳細に記述されている。

江戸時代に灌漑用につくられた佐原村用水は、小野川上流の小字関場で二つの水門によって水が堰とめられ、その水は、小野川の主流の北側を川と並行するように流れ、寺宿、田宿と市街地に入ると、現在の伊能忠敬旧宅の裏で左右二手に別かれる。

一つは、佐原町並み交流館（元三菱銀行佐原支店）前で香取街道を横切り、本川岸、浜宿、荒久、仁井宿へと流れ、「本宿淵岸耕地」の田地を潤していた。

もう一つは、伊能忠敬旧宅の屋敷を通り、小野川に架設されている「樋」を渡り、伊能茂左衛門家（現伊能忠敬記念館）の脇を流れ、右折して横川岸、佐原駅（関戸）から岩ヶ崎に達して、「新宿淵岸耕地」の田地に水を潤していた。

（佐原村図並用水路は、『伊能忠敬研究』第四一十頁参照）

現在では、新宿耕地は埋め立てられ、住宅地や商店街となり、用水路は舗装道路の下に下水溝となり、埋没しその面影は見られない。「本宿耕地」の灌漑用の水は、現在では利根川から引かれ、当時の用水路はJR成田線脇に、所々その姿を見させているが使われていない。

先人の多大な努力と協力によって完成させた「佐原村用水と用水樋」は、今は観光用として、伊能忠敬宅の敷地内の用水路に小野川の水を揚水機で汲み入れ、時刻をきめて放水している。「樋」から流れ落ちる水の音は、環境庁が平成八年七月一日に選定した「日本の音風景一〇〇選」の一つにも選定されている。

「日本の音風景一〇〇」に選ばれた所在地を見ると、伊能忠敬が二百年前の全国測量の時に見聞きしたであろうと思われる秋田県能代市の「風の松原」、茨城県北茨城市「五浦海岸の波音」、静岡県遠州灘「遠州灘の海鳴り」、愛知県田原市「伊良湖岬恋路ヶ浜の潮騒」、京都府京丹後市「琴引浜の鳴き砂」、徳島県鳴門市「鳴門の渦潮」、島根県大田市「琴ヶ浜海岸の鳴き砂」、山口県下関市「関門海峡の潮騒」など、波の音、砂の音、水の音が選ばれている。

これも伊能三郎右衛門忠敬家の先祖の令（礼）徳が、そうさせたかもしれない。伊能忠敬は「人間の一生で、いろいろなことに遭遇するのは天命であり、先祖からの令徳によるものである」といつている。

（さくまたつお・伊能忠敬研究家）

伊能忠敬旧宅の屋敷内を通っている用水路



忠敬先生思い出の地 平戸・長崎

前田 幸子

憧れの地 今年の研修旅行は「忠敬先生思い出の地探訪」と題して平戸・長崎を訪ねることになった。平戸は以前からの憧れの地。南蛮・カビタン・ビードロ・ギヤマン・と異国情緒への憧憬と妄想が果てしなく広がった。ことに長崎は江戸時代における日本の西洋文化特区であり蘭学の発祥地。忠敬先生にとっても平戸・長崎は憧れの地だったはずで、全国のどの土地とも違う興味をもって測量したに違いない。私たちの研修旅行は忠敬先生の第八次測量から約二〇〇年の時を隔てて、その足跡を辿る旅となった。

島の館 五月二十一日(日)朝、私たち東京出発組二十四名は羽田から福岡へ飛んだ。忠敬先生が二か月間かけて到達した筑紫の地にわずか二時間で到着。現地集合組七名と合流し空港から貸切バスで九州自動車道を一路平戸へと向かった。平戸大橋を渡ってさらに生月大橋を渡って最初の訪問地・生月町博物館「島の館」に着いた。

生月島は捕鯨と隠れキリシタンの島。江戸時代の捕鯨風景ジオラマやキリシタン資料などを見学した。隠れキリシタンの実態を再現した「納戸神」の展示は迫力があつた。表向きの部屋には神棚を祀り、納戸の薄暗い一隅にご神体マリア像の掛軸を飾る。信者達が一心不乱に唱えるオラショ(グレゴリオ聖歌が変化した念仏)の音が鬼気迫る。隠れキリシタンの流れは四百五十年の弾圧に耐えて現在も教会へ行かない宗派「かくれ信仰」として存続し、信者四百人を数えるという。命がけの信仰の迫力に気押されて館外に出ると西海の潮風が吹いてい

た。名物「あご(トビウオ)」料理の昼食の後、平戸の史跡めぐりへ。バスの車内で「旅のしおりー忠敬先生思い出の地探訪・平戸・長崎」が配られた。この二十四頁の小冊子は内容濃厚。おかげでこの旅行の厚みがぐんと増した。著者の皆様と幹事さんに感謝したい。

平戸城 平戸湾を望む小高い丘に建つ平戸城に登る。平戸城は松浦氏六万三千石の居城。松浦氏は松浦党(松浦水軍)を率い貿易で巨利を得ていたため小さな島ながら一つの藩を形成できたのだという。平戸は中国や南蛮との交易で大いに栄えたが、鎖国後はオランダ商館も長崎・出島に移り、さびれていったようである。忠敬先生の平戸測量は鎖国から一七〇年後のこと。測量日記には「大福町、右に阿蘭陀屋敷跡あり。左に船着き場」と、すでに南蛮貿易の夢の跡であつたようだ。

平戸城内の資料室に貼つてあつた日本史年表「一八一二年 伊能忠敬平戸を実測」というところを指さして記念撮影。寺院の瓦屋根と教会の尖塔が立ち並ぶ独特の風景を眺め、「日本の西の果てなので日没が遅いですね」と言いながらお城を後にした。

旗松亭 第一日目の宿は「旗松亭」である。平戸城を真向かいに望み平戸港を眼下に収める絶好の立地。旅館名はこの地が昔、松の下に旗をゆわえて入港、出港の合図をした場所だったことにちなむ。ロビーに佐藤一斎揮毫の「旗松亭」の扁額が掛かる老舗の宿である。夕食時の懇親会では全国から集まった会員がそれぞれ自己紹介をした。お孫さん連れで参加されたのは大津の杉浦さん。自己紹介で「祖父の杖がわりとして参加しました」というお孫さんの挨拶と態度に「立派な杖ですねえ」と満場感嘆。隣室から響いてくるカラオケの喧噪にもかかわらず、伊能忠敬をめぐる清談で格調高く盛り上がった。懇親会の後は部屋に戻って二次会。談論風発のさんざめきが夜更けまで続いた。

平戸観光資料館 旅行二日目。朝食後、出発までの時間を利用して旅館近くの平戸観光資料館を訪れ「じゃがたら文」を見学した。ジャワ更紗の布片に「日本こいしや、こいしや・・」と美しくも切ない文字が綴られた「じゃがたら文」はキシタンの国外追放で日本を追われた混血児たちがジャカルタから日本の母や親族にあてて書いた望郷の手紙である。唐津焼の壺を今と言う段ボールとして詰めて送ってきたのだという。混血児はオランダ商館員の子女らだったため、割合裕福な暮らし向きだったようだ。「明治以降のからゆきさんとは違います。禁教令で追放された人は1万人、のべ十万人が国外に住んでいました」という学芸員の説明に後ろ髪引かれつつ旗松亭に戻った。バスに乗り込み、この旅行第一の主要見学地である「松浦史料博物館」へと向かった。

松浦史料博物館 松浦史料博物館は平戸湾を望む小高い丘の上に行くつも瓦屋根を連ねた壮大な和風建築である。歴史と潮風が染み込んだ長い石段の脇にオランダとイギリスの国旗がたなびいて、いかにも平戸らしい風情を醸し出している。この博物館は伊能図の優品八舗を所蔵していることでつとに有名である。まず別館二階へ案内された。会議室のような部屋の壁に掛けられた伊能図は、一見して非常に保存状態が良く美麗である。見学に先だつてアメリカ伊能図レブリカの贈呈式がとり行われ、長崎新聞、西日本新聞、読売新聞のマスコミ各社のカメラの前で館長の木田氏に伊能夫妻から伊能図が手渡された。平戸測量から一九三年目の交流に、一斉にフラッシュがたかれた。

もうひとつ年月を超えた出会いがあった。忠敬先生の三女・琴さんの子孫である奥永渚さんとご両親が会場にお見えになっていて紹介されたのだ。渚さんは昨年明治大学で開催された例会に参加し、その後

入会。これを契機に忠敬先生の愛娘・琴さんに注目が集まっている。

会場では記者やカメラマン諸氏に混じり、右往左往しながら伊能図を見学した。ここの伊能図は美しいだけでなく、その入手までの経緯を藩主・松浦静山自らが著書「甲子夜話」に記録しているので興味深い。静山は、領内を測量されるのを嫌がって抵抗・妨害する藩が多いなか、「他藩はわけのわからないことをいうので残念である。こんなよい機会に測量してもらわなくては、またと機会はないであろう。平戸領内は特に入念に測量してほしい」と積極的に受け入れ、率先して測量を見学したそうである。そして「地図が出来上がった一本いたきたい」と所望し、数年後に入手したのがこれらの地図である。会場中央のガラスケースに件の「甲子夜話」の稿本が展示されており、現代語訳が活字で添え書きがしてあった。地図の謝礼は金五百疋と「ていら」など。「ていら」はカステイラかと思つたら、実はさらした鯨肉のこと。日持ちしないのではないかと、という心配は無用だった。

優品伊能図を堪能したあとは資料館本館を見学。もとは謁見の間だったという奥床しい室内にオランダ製の地球儀・天球儀や古文書など貴重な品々が展示されている。なかに島原の乱の「原城攻囲陣営城城図」という絵図があった。幕府の要請で参戦したオランダ商館の武装船が沖合から城を攻撃している。浜辺にはさらし首も見え、天草四郎が西欧をも相手にして戦ったという歴史の実像を知って驚いた。

もっと面白い文書もあった。秀吉が発した「キシタン禁制定書」という触書の原本である。

一、日本ハ神國たる処、きりしたん國より邪法を授之儀、太以不可然候事。

二、其國郡之君を近付、門徒になし、神社仏閣を打破之由・・・云々、

これを見たとき、何やらただならぬ気配は感じたものの、「神國日本」というのはどこかで聞いた文句ですねえ、などと周囲の人々と呑気に談笑。この触書のドラマチックな正体は翌日判明することとなる。

展示には平戸出身の武将・鄭成功の關係もあつた。明王朝のために清に抵抗して戦つた褒美に明王室の姓である朱姓を賜り朱成功と名乗つたので「国姓爺」と呼ばれた、というのが名の由来。オランダ商館長や三浦按針も出入りしたという博物館の階段に並んで集合写真を撮り、ザビエルら平戸ゆかりの人々の小像が並ぶ「歴史の道」を下つて平戸港へ着いた。平戸は人口四万人。町も港も小ぢんまりしていて、本当にここにポルトガル船がはるばるやつてきたのだろうかと思ひに思つた。日本人も和船を操つて東シナ海あたりで活躍していたらしいが、地球の裏側からやつてくるのとは訳が違う。大航海時代とは、なんと命知らずの時代だったのかとほとほと感心した。

九十九島 せっかく来たのだから九十九島クルーズをしようということになり、波止場から観光船に乗つて北九十九島の海へ。美しい島影と真珠の養殖筏やウニ採りの海女さんなどの珍しい風景を楽しんだ。想定外ではあつたが、やはりクルーズをしてよかつた。というのは忠敬先生に九十九島を詠んだ歌があるのを見つけたからである。

―文化十年肥前國相神浦にて六十九歳の齡に達したる時―

「七十に近き春にぞあひの浦九十九島をいきの松原」

歌では九十九歳まで生きるぞと意気軒昂であるが、忠敬先生はこの測量に難儀し、予定の二倍も日数がかつたそうである。九十九島

とはいうが、実際には二百以上の島があるとか。これを小舟に揺られてひとつひとつ測るのだから時間がかかるわけである。しかも、今回の研修旅行から帰つたあと、ネットニュースに「九十九島、ミステリー再燃か」という記事が載つた。九十九島の数は従来から諸説あつて地図ごとに異なる数が掲載されていたが、最近の調査でさらに四島増えたということである。現代でもこんな具合なのだから、江戸時代に忠敬先生が苦労したのも無理からぬことであつた。

出島 平戸から佐世保を経由し西海橋という大きなアーチ橋を渡つて長崎に着いた。まずは長崎の数ある名所旧跡中の白眉・出島を見学する。出島は長い間埋立てられて市街地になつていたが、近年復元されて往時の様子が再現された。小さな石橋を渡つて扇形の敷地に入ると、一本の道の両側に建物が十棟あまり。東西約二百、奥行七〇。話には聞いてはいたが、やはり狭い。年一度の江戸参府の時以外はここに押し込められていたというから氣の毒である。復元されたカピタン（商館長）部屋や船頭部屋、神学校などを見学した。

忠敬先生は一八一三年八月に長崎到着。その長崎の町は四年ぶりの蘭船入港で賑わつていた。忠敬先生はオランダ船を見学しオランダ商館を訪問したと日記にあるが、残念ながらオランダ商館側の日誌にはこの訪問の記載は無い。この時のオランダ商館長はヘンドリック・ドウィフである。オランダ商館長を十四年間に勤めた敏腕館長であり有名な日蘭辞書「ゾーフ・ハルマ」の編著者でもある。「ゾーフ・ハルマ」は洋学の発展の基礎となつたし、ラランデ暦書も長崎から入つて来た。長崎はまさに蘭学のメッカ。好奇心旺盛な忠敬先生のこと、興味津々で長崎見物をしたはずである。が、その直前に五島で測量隊の副長・坂部貞兵衛を失つた悲しみのせいか、日記の記述も抑え気味。象見物の記事も「蘭館、象見」とごく簡単に弾んだ気持ちには感じられない。

出島をひととおり見終わった頃、雨粒が落ちてきた。バスに乗って本日の宿「長崎全日空ホテルグランドパール」に向かう。この日の夕食は割烹「浜勝」で長崎名物・卓袱料理を賞味した。豚の角煮にビールで乾杯。ちなみに日本最初のビールは出島でドウーフが作ったものだという。卓袱料理を堪能したあとは雨に濡れる長崎の街を見ながらタクシーに分乗してホテルに帰還。稲佐山からの夜景見物はお流れとなった。

長崎歴史文化博物館 五月二十三日（火）最終日。午前中はこの旅行二つ目の主要見学地「長崎歴史文化博物館」を見学した。ここはもと長崎奉行所があった場所ということで、正面は近代的な博物館、裏門は紫色の幔幕が厳めしい奉行所となっている。長崎奉行は天領長崎の最高責任者。余録も多いが責任重大。かの遠山の金さんの父も長崎奉行だったことがあり、狂歌の太田南畝もここに勤めていたことがあるとか。

見学に先だち、ここでもアメリカ伊能図の贈呈式を執り行う。NBC長崎放送、長崎新聞などプレス各社のフラッシュが光るなか、美しく彩色されたレプリカが大堀館長に手渡された。昨日の平戸の贈呈式の様子が新聞に載ったが、海洋部分に塗られた鮮やかなブルーがじつに印象的である。贈呈式終了後は博物館所蔵の伊能図を見学した。

この館が所蔵する伊能図は、大村藩家臣で渋川景佑の弟子である峰源助が九段の天文台に勤務していたときに借りて写したものである。長崎ボランティアガイドの橋本氏と会員の荻原哲夫氏の解説によると、大村藩は長崎の防衛を担当していた藩で、これは峰家所蔵の秘図である。峰源助の名はあまり知られていないが、一八六二年に幕府の艦船「千歳丸」で高杉晋作と上海まで行った人である。大村藩の代官までなったが、池田の乱で失脚した。この図のもととなった渋川家の原図

は見つかっていないとのこと。

この地図はこれまで見た伊能図のうちでもかなり興味深いものであった。現在とはあきらかに異なる地形が書かれている。何しろ鳥海山がもくもくと噴煙を上げており、象潟はまだ海である。岩手山の名も岩鷲山となっている。ひととき美しい二十四方向の色鮮やかなコンパスローズが書き込んであり、渋川家の九段天文台で借りて写したものという事情を物語るように「此図及日本地図江都九段坂司天官庫所蔵之秘図而素禁他見。峰源助潔謹蔵」と添書きがあるのも興味をそそる。

ひととおり見学したところで鈴木純子理事が解説をした。「この地図は部分を寄せ集めたものである。内容としては第四次測量までの集大成である。琵琶湖付近は渋川景佑が伊能測量隊員高橋善助であった時に自ら測量した地域であり思い入れがあるところである」等々。

この地図は詳細に見れば見るほど面白い。毛筆でよくもこんな細かい字が、と感心するほど緻密な筆遣いである。伊能図では針穴の有無がよく問題になるが、実際に針穴とはどんなものなのかはつきり見たことがなかった。「朱線の曲がり目に針穴があるのよ」という助言に従って顔を近づけてよく見た。すると、あった！想像していたよりはるかに小さなかすかな穴が。しかもその地点（琵琶湖湖北の浅井村辺り）には源助が原図を写すときに既に虫食いがあったらしく、「此間虫喰い朱線不明」と栗（＊米を粟に訂正です）粒のような字で書いてあるではないか。源助の律儀さと地図を大切に思う気持ちが伝わってきた。しかし気になったのは地図の空白の部分に「県立長崎博物館所蔵」という大きな朱印がデンと押してあったことである。この素晴らしい地図を現代の朱印でよごしていいのだろうかと思ひ、元国会図書館地図室・鈴木純子理事に聞いてみた。私「こんなふうにハンコをべったり

押すものですか？」鈴木氏「押すものです。蔵書印は来歴を表すものですから。例えば紅葉山文庫の印が押してあれば、かつて江戸城に所蔵されていたということがわかります」なるほど。この地図はもし百年後にどこかで発見されたときに長崎博物館の所蔵であったという来歴がわかるわけである。朱印は単なる落款ではないのだなあと当たり前のことに気がついたのであった。

地図を広げた小部屋はマスコミ各社と伊能会員が入り交じって行き交うのに苦労するほど。地図を見て、語って、充実した時間が流れた。私たちの見学を辛抱強く見守ってくれた博物館のスタッフにお礼を言っておいて一般展示物の見学へと移った。博物館内は広くて展示室も多く、長崎ならではのユニークで豊富な展示物を急ぎ足で見て回った。

四海楼 研修旅行最後の会食を「元祖長崎ちゃんぽん」の名店「四海楼」でとる。ここは「ちゃんぽんミュージアム」も併設する老舗。豪華版ちゃんぽんと皇太子もおかわりしたという本格皿うどんで満腹した後は一旦解散となり、星埜会長ら早帰り便の方々には空港へ。遅帰り組は長崎市内の史跡めぐり「長崎さるく（まち歩き）」へと出発した。

諏訪神社 まず向かったのは諏訪神社である。大きな石の鳥居がいくつも並んだ石段を登り、社殿前の長いベンチに座って宮司さんのお話を聞いた。宮司さんが語るこの神社の来歴は特異なものだった。「この神社は唐津の修験者青木賢清がキリスト教の攻勢に危機感を抱いて建てたものです。領主・大村氏は領民をキリスト教に改宗させ、教会に土地を寄進するとともに神社を破壊したので、ついに神社はゼロとなりました。それに危機感を抱いた青木がこの神社を建立し、徐々に初詣などを復活させ、また重陽の節句（九月九日）には中国人らが行っていた祭りを盛大に執り行い、九日（くにち）から「くんち」とよば

れるようになりました」。思いがけない話に驚いて「旅のしおり」を読むと、河島悦子氏「長崎街道こぼれ話」に「当時キリシタンは大村が中心地であり長崎は漁村にすぎなかったが、キリシタン大名大村純忠は領民をキリスト教に改宗させ神社仏閣を全廃、長崎をイエズス会に寄進し教会を設立したので大租界地が出現した。島津攻略の帰途、この話を伝え聞いた秀吉は烈火の如く怒り、筑前箱崎において禁教令を出した」とあるではないか。そして、なんとその触書の実物が昨日松浦資料館で見た「日本は神國にして・」の文書だったのである。「秀吉の禁教令」というと教科書では無味乾燥な記述であるが、歴史の現実にはまさに手に汗にぎるドラマではないか。秀吉の怒鳴り声が聞こえてきそうである。「くんち」の日には二千人の人で埋まるという石段を下り、松の森神社を見学してシーボルト記念館へと向かった。

忠敬先生が長崎測量の際に十六日間滞在した大同庵の跡も案内していただいたが、今は殺風景な裏通りで昔日を偲ぶことは困難であった。

シーボルト記念館 シーボルト記念館はかつて鳴滝塾があった場所に数年前に建てられた煉瓦造の洋館。敷地にはシーボルトゆかりの花・あじさいがたくさん植えられていて色とりどりに咲いている。展示を見ようと三階に上がると、たまたま「あじさい祭」の取材で訪れていたNBC長崎放送の記者とプロデューサーが伊能夫妻をつかまえて興奮している。「伊能忠敬をものすごく尊敬しています。運命の出会いです！」と、館長へのインタビューそっちのけで大感激。ここにも熱烈的な伊能ファンがいたようである。

シーボルトが愛妻「お滝さん」の名をとってあじさいに「オタクサ」という学名をつけたことはよく知られた話であるが、九官鳥などに言葉を覚えさせるときに「オタクサン」というのもシーボルトが発生源だという。シーボルトが飼っていたオウムに朝夕「お滝さん」と呼び

かけていたのを弟子たちが真似て世間に流布させたとのこと。名医シーボルト先生も日本語の発音はイマイチだったようだ。記念館を出て、その名の通り音をたてて流れる鳴滝や古い石橋を見ながら坂道を下った。当時、この道を高野長英ら西洋科学への熱い思いを胸にした若者たちが通ったはずである。シーボルトが江戸参府の際に安全祈願所とした桜馬場天満宮の前を通り、シーボルトゆかりの場所をあとにした。

西の果て 旅行も終わりに近づいた。橋本氏の案内でグラバー園近くの高台で町を見下ろしながら長崎ガイドを聞き、大浦天主堂前の繁華な通りを下ってホテルに帰った。かつて坂本龍馬がグラバーのビストロを懐に入れて上り下りしたかもしれない坂道は、カステラ店の黄色い紙袋を下げた修学旅行生でこった返していた。これも歴史の一コマ。

現代はグローバルゼーションの時代といわれるが、思えば16世紀の平戸も、黒船来航の幕末も、やはりグローバルゼーションの時代だったのではないか。「伊能図は外圧が生み出したもの」という安藤さんの名句が脳裏に浮かんた。そうか、忠敬先生に地図を作らせたのはまさに西欧からの圧力だったのだ。グローバル化の波は極東の国・日本まで押し寄せた。そして平戸・長崎は最前線でその荒波をかぶったところだったのだ。今回の研修旅行は、日本の西の果てである平戸・長崎が西欧に最も近い場所であることを再認識した旅であった。

(まえだ こうこ・首都大学東京)

ご参加の皆さん 敬称略 前列左から 荻原哲夫 安藤鉄也 河島悦子 柏木隆雄 星埜由尚 伊能洋 坂本巍 藤岡健夫 中列女性 安藤由紀子 丹羽菊乃 中山翠 中川幸子 伊能陽子 鈴木芳江 鈴木純子 後列 福田弘行 香取福良 松尾紀成 伊藤栄子 野田茂生 石川清一 前田幸子 山本公之 鈴木皓之 矢能彰 後藤啓之 杉浦守邦 今村恵二 成家淑子 大沼晃 荻原一輝 松浦史料博物館にて



伊能大図模写本 レプリカを寄贈

子孫・洋さんが松浦史料博物館に

【平戸】江戸時代の測量家である伊能忠敬の子孫、伊能洋さん（72）＝東京都在住＝が22日、平戸市を訪れ、米国議会図書館で発見された伊能大図模写本のうち平戸市部分のレプリカを松浦史料博物館に寄贈した。



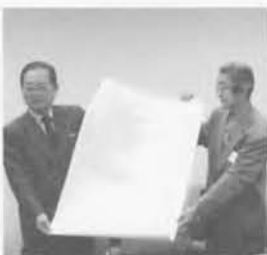
米国で発見

伊能大図、忠敬が測量
をめぐって完成させた事
がき地図、大図二百十
四巻、中図八枚、小図三
枚からなる。測量精度
の高さと美しい彩色で
重宝とされている。

伊能大図のレプリカを寄贈する伊能洋さん（左）
＝平戸市横川町、松浦史料博物館＝

知られるが、原本は火災や大震災による焼失、盗難などによって、国内では大図に属する複製本がほとんど残っていない。伊能忠敬の孫、伊能洋さん（72）＝東京都在住＝が、米国のペンシルベニア州にある「ペンシルベニア大学」で発見された伊能大図模写本のうち平戸市部分のレプリカを、松浦史料博物館に寄贈した。伊能大図は、忠敬が測量をめぐって完成させた事

国境越え伝わる忠敬の功績



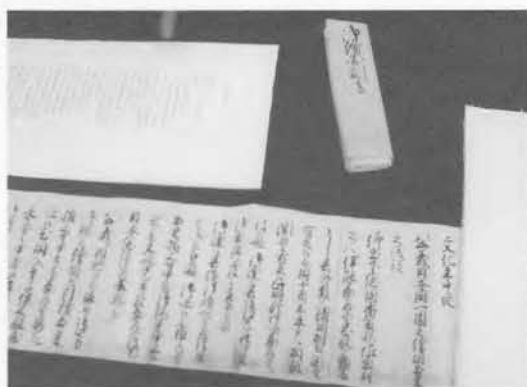
長崎歴史文化博物館に大図長崎版と世田谷伊能家伝存長崎港参考絵図を寄贈 右・長崎新聞5月26日



長崎博訪問がテレビに 長崎放送テレビ「報道センターNBC」5月23日夕方放映



ようこそ渚さん！
先般入会されました忠敬三女琴さんの子孫で忠敬さんの六世孫、奥永さんが平戸を訪れ、松浦史料館で皆様とお会いできました。中央が渚さん、左が五世孫の母上・奥永節子さんと父上・優二さん。姪の珠羅ちゃんも参加。「忠敬さんについてもっと勉強します」と挨拶されました。後方の一団は新聞取材を受ける星桝代表と伊能ご夫妻。



松浦史料博物館は明治26年に松浦氏の住まいとして再建されたもので、そのまま博物館に利用されている。松浦家旧蔵の文政4年西国海路図、大図編集図に甲子夜話稿本など貴重史料が並んだ。



峰源助写図の解明に注ぐまなざし



諏訪の森に蘇る長崎奉行所立山役所

続々と伊能図に検証はしつかり



貴重な出会い 旅行最終日23日午後の出来事でした。緑に包まれた聖地・天満宮松ノ森神社からお諏訪さん諏訪神社へ。松尾さんと橋本さんの案内で今年の話題「長崎さるく」。シーボルト記念館から斜経角度31度の斜めに動くエレベーター「グラパスカイロード」へ向かう途中、新大工町電停でわずか一分足らずの出来事。橋本さんと同級生

の本田貞勝さんにお会いする。61年の時を数えて、長崎から被爆体験と世界平和を発信し続けている「長崎新聞」論説委員長として活躍中の方です。

長崎新聞1面「水と空」 5月29日

東海さんの墓普請のこと。なかなか仕事がかどらないたえとして長崎で使われる言葉だそうだが、それほど長い年月をかけて造られたのが長崎市夫婦川町、春徳寺裏山にある県有形文化財、東海の墓▲唐通事だった二代目東海徳左衛門が父母のために寛文年間から約10年かけて造ったと言われ、入り口の幅は約16¹/₂。奥行き36¹/₂。縦に長い台形状で大きく5段に分かれ、最上段に両親を祀り、下段に子孫の墓が数多く立っている▲獅子頭や石壁、石柱などの見事な彫刻もさることながらその広大さに驚く。狭い敷地にびつりと立つのが当たり前の長崎の墓地では別格。県内でも藩主クラスの墓地を除けば群を抜く広さだ▲長崎さるく博のコースにもなり、先日ゆかりの人がガイドを務める企画として東海家子孫の東海安興さんが登場した。その記事を見てびっくり。私事で恐縮だが、何と高校時代の同級生ではないか▲まさか彼が由緒ある唐通事の子孫だったとは。早速旧交を温めた。前述の墓普請について「仕事がかどらないと否定的に受け取られているが、本当は完成後も約20年、意に沿うよう改修を重ねて

きた結果です」との話。なるほど「丁寧な仕事ぶり」と解釈しよう▲東海さんと別れた帰り道、電停で別の同級生とばったり出会い、洋画家の伊能洋さんを紹介された。江戸時代の測量家で初めて日本地図を作った伊能忠敬さんの子孫だ。不思議な日だった。(貞)

193年前の長崎市測量 佐久間達夫編「測量日記」によれば『文化十年(一八二三)八月十九日朝晴午後曇天七ツ時前より雨五ツ時頃出立石華表楼門前打止 松ノ森天満宮という祭礼十一月二十五日 神主伊奈岩見介 又ノ華表 隨身門打止 長崎町惣鎮守諏訪大明神 御朱印一万坪 神主青木兵庫之介 祭礼九月九日より十一日迄』と記録されている。春徳寺は記されていない。夫婦川町はシーボルト記念館の近くになる。

諏訪神社にて



キリスト教全盛だった戦国時代に焼き払われた長崎中の神社。やがて秀吉、家康による禁教時代を迎えると、今度は市中に点在していた教会堂が焼き払われた。宗教とも密接な関わりを持つ長崎の歴史の中で、現在の松ノ森、諏訪の両神社は古くから現代に至るまで多くの人々に親しまれてきた長崎の信仰の聖地とも呼べる神社である。



鎮西大社諏訪神社 1625年初代宮司青木賢清が再建。秋の神事・長崎くんちは長崎っ子の血をわかせる大祭。本殿へ続く石段はシーボルトや長崎を訪れたほとんどの偉人が歩いた道だという。

松ノ森天満宮 1626年創建。本殿を囲む瑞籬（みずがき）の欄間三十枚に様々な職人の生活風景が彫り込まれた職人尽。1713年奉納の県指定有形文化財。職人尽絵（つくしえ）は日本の産業技術の記録として貴重なもので新たな研究が進められている。伊奈16代宮司から畑田信雄著「長崎の職人尽彫りもの絵」を受贈する。



長崎市指定文化財 古橋
1654年唐通事の林守堅氏の肝入りで架けられたもので、江戸時代に桜馬場（現地）から中川一壺茶屋・一日見峠・矢上一江戸に通ずる旧長崎街道への玄関橋であった。

残された旧長崎街道



天然記念物「松森の大樟」

お世話になりました

松浦史料博物館 木田昌宏館長、久家孝史学芸員。長崎歴史文化博物館 大堀哲館長、原田博二。長崎歴史文化研究所所長、安高、徳永、関さん。長崎新聞、西日本新聞、読売新聞、長崎放送のみなさん。宮田宮司（諏訪神社）伊奈歌子宮司（松ノ森天満宮）土肥原館長（シーボルト記念館）。ボランティアガイドの橋本富太郎さん。旅のコーディネートはPTSの金指さん。

会員では事前原稿を遠藤、河島、松尾紀成さんから、長崎測量情報はホームページで入江さん。現地の解説資料では松尾さん「生月島のかくれキリシタン」安藤さん「相神浦（あいのうら）忠敬和歌由来」荻原哲夫さん「峰源助」。旅行写真はCDROMにして荻原哲夫さんから受贈。皆様のおかげで良い旅になりました。厚くお礼申し上げます。写真提供 伊能洋 荻原哲夫 前田幸子

（福田弘行）



平戸藩と山鹿素行

杉浦 守邦

伊能忠敬研究会の「忠敬思い出の地探訪・初夏の旅」に参加した。

年齢八十五歳、足元がおぼつかないので、杖代わりに孫（大学生）の同行を許してもらった。幹事さん方のきわめて綿密な企画によって、有意義で収穫の多い旅を楽しませてもらいました。感謝に堪えません。お礼を申し上げます。

私にとってもっとも興味があったのは、平戸にある松浦史料博物館であった。ここで二百年來、松浦藩で大事に保管してこられた彩色豊かな伊能図を見た。平戸藩領図（大図）・九州全体図（小図）・長崎周辺図（大図）その外など数点であった。



眺望亭という倉庫風の建物の二階ホールの壁に展示されていた。ここに保存されているいわれは、同時に机上に展示されてあった松浦静山の著「甲子夜話」（巻の二十八・十三）の記述から明らかである。著者静山は松浦家三十四代の藩主、本名清、隠居して静山と号した。伊

能忠敬が九州測量に赴くということを聞いて、一夜伊能を呼んで接待し、測量終了後「領内の地図」を贈るよう求めたという。その後伊能の死にあったが、約束を守って伊能の弟子からこの地図が届けられたことが記されている。

それだけでなく、この裏付けとなる文書が、机のうえに展示されていた。「御絵図副書」という。よくもこういう文書が残っていたものだ。これには制作後藩で受け取るまでのやりとりのことが詳しく書かれている。渡辺一郎氏によるとこれだけ來歴が明白で入手時期まで確認できる伊能図は他にないという。大いに感激した。さらにこの文書には、松浦藩が謝礼として地図作成費用「金五両三分二朱と銀三匁」と西国海路図の特別謝金「金五百疋」それに「ていら五斤」を贈ったということまで記されている。

当時の貨幣単位はきわめて複雑で、一分は一両の四分の一、一朱は一分の四分の一、銀一匁は一両の六十分の一、銭一文は一分の十分の一、一疋は十文に当たる。現在の金額に換算したとき一両は約十万円と見られるから、これから割り出すと、製作費は約六十万円、特別の謝金は約十二万五千円にあたらう。「ていら」というのはカステラのことであろうが、一斤はどれくらいだったのであろうか。

なおこの部屋で引き続き、伊能当家のご夫妻が東京から持参されたアメリカ伝来の大図のデジタル化したものを、当博物館へ贈呈する趣旨のセレモニーが行われた。

贈呈式の後、資料館の本館の方に移って各部屋を回って展示物を拝観した。ここには松浦静山の肖像画のほか、松浦家伝来の宝物が数々展示されていたが、中でも私が興味を持ったのは、松浦家兵学師範であった山鹿素行関係の史料である。山鹿素行の肖像、素行の陣羽織、山鹿流の備え立て図、山鹿流の陣太鼓などが並べられていた。

前日平戸城を見学した時にも、本丸の城門を入ったところに大きな看板があつて、これには「平戸城年表」とあり、松浦家関係の代々の記録が詳細に記述されてあつたが、山鹿家関係の記述も所々に見られ、平戸藩における山鹿素行の位置について多くを知ることが出来た。中でも次のような記述に目が止まった。

一六五一（慶安四）鎮信、江戸で山鹿素行の学問に接し以来親交を重ねる。素行の弟平馬が家臣として平戸に来る。
（のち家老となる）

一七〇四（宝永一）平戸城を山鹿流にて亀岡に築く。（享保三年完工）
一七四六（延享三）山鹿素行の孫 高道が家臣となり、江戸の積徳堂（県指定文化財）を平戸に移す。

一八五〇（嘉永三）吉田松陰平戸を訪れ山鹿・葉山の門に学ぶ。
さらに天守閣の最上階には「山鹿流築城法的一端」なる解説文が貼られていた。

二

私は江戸期文化人の死因の研究をしていて、その一環として伊能忠敬の死因について考察したところを、先に「伊能忠敬研究」第三十五号に「忠敬の持病と妙薫の卵」と題して投稿したことがある。これには忠敬には以前から（四国測量の頃発病か）咳と痰の持病があつて、文化八年からの第二次九州測量には重症化する恐れがあつたので、娘の妙薫が『手あぶり（携帯式火鉢）、持ちこたつ（携帯式やぐらこたつ）、綿子（綿入れチャンチャンコ）、紙子（紙製防寒具）、テンの皮（イタチ科動物の皮）』などを調達して持参させた。これによって危険な冬季にはなんとか寒を凌いだりしたのが幸いして無事測量を終えて帰ることが出来たが、帰府後は病状の悪化のため、病臥の日が多くなり文化

十二年の伊豆測量、翌十三年の府内測量には参加できなかったことを報告した。それと共に、咳痰の治療として彼は卵酒を常用していて、江戸で卵を買うと一個が十六文もするのに、佐原では十二文程度で手に入るの、妙薫に頼んでわざわざ佐原から送ってもらっていたことを、千葉県出版の「伊能忠敬書状」の分析をもとに報告した。そして忠敬の持病は、現代の医学で言えば慢性気管支炎、国際的には慢性閉塞性肺疾患（COPD）といわれるものと見られる。そして直接の死因はこの慢性気管支炎の急性増悪から急性肺炎を引き起こしたことによるものであらうと報告したところである。

三

山鹿素行についても、このたびの旅行とも多少関係があるので、その経歴および死因について調査し考察したところを簡単に報告してみたい。

山鹿素行は、もともと会津若松の出身、名は高祐、通称甚五左衛門、素行は号である。彼が育った時代は徳川の三代家光から四代家綱、五代綱吉の頃、既に戦国は終わり、平和に入って武士の性格が変革をきたしていた。それまでは武士は知行地にあつて武道に励み戦力を養うことが求められたが、このころは城下町に集まって、士農工商のトップとして統治者、行政官としての役割を帯びるようになっていた。教養として戦國法の学である軍学は不要となり、武道、武術より治国平天下の道が求められるようになってきたのである。素行は初めは甲州流の軍学を修めたが、時の変遷を察知して軍学より兵学を唱えて一家を成し、武士道に変わる士道の必要性を説いた。藩主のなかにもこれに共鳴して、素行を招いて藩士の教育に当たらせようとするものがあらわれた。最初素行を招いたのは播州赤穂の藩主浅野長直であった。有名な江戸城松の廊下刃傷事件を起こした内匠頭長矩の祖父で

ある。前述の「甲子夜話」にも長矩と弟大学の素行への兵学入門書の写がのっている。長矩が勅使接待の役を二回もやっていて、一回目は普通どおりこなしているのに二回目の時刃傷事件を起こしたのはどういふ理由か不思議がる人がいるが、素行から受けた士道の精神が賄賂提出を許さなかったのが発端になったと説く人もあるくらいである。

素行が赤穂で藩士に山鹿流の兵学を教え、城の築城に当たり縄張りをしたこともあつて関係が深かったので、後で浪士が吉良邸討ち入りをした時も、山鹿流の戦術を用いたのであろうと見られたり、とくに映画の討ち入り場面などでは大石内蔵助が太鼓を打ち鳴らす場面が絵になるので、この時打ち鳴らしたのも山鹿流の陣太鼓だったに違いないと考えて、内蔵助がかざす太鼓の皮に山鹿流の三ツ巴紋まで入れて、まことしやかに話が作られている。しかしこれは全くの虚構であつて、大石の持ち物に太鼓などはなかったことがわかっている。映画などで見るとこの時の太鼓は胴幅十糎、胴径十五糎程度の手持ちのもので、これを左手に持ち右手の撥で敲く式の物になっているが、本当の山鹿流の陣太鼓は、松浦史料博物館にあるような胴幅三十六・五糎、胴径三十五糎にも及ぶ大きなものであつて、まず大きさが違う。敲く場合も持った人が敲くのではなく、一人が背負い、もう一人が横におつて敲くという二人コンビ形式のものである。主として前進、突撃の合図に鳴らした（停止は鉦）。

素行は赤穂には二年程居つて、江戸に帰つたが、当時幕府の推奨する朱子学が現実にあわないといつて非難したので、処分を受けることとなり、赤穂藩に「お預け」の身分となつた。九年後（延宝三年）許されて江戸に帰り私塾として積徳堂を開いたが、この頃素行の学徳を借しんで自家に招聴しようとした大名が多く出た。中でもこの平戸の藩主松浦鎮信（しげのぶ）と弘前の藩主津軽信政が熱心であつた。

素行は自分が行くことは出来ないとして、自分の子高基を平戸松浦

家に、養子の政実を津軽家に仕えさせたのである。したがつて山鹿素行の子孫には平戸山鹿家と、津軽山鹿家の二系統がある。この二家ともにそれぞれの藩の藩校で素行の創始した兵学を伝授して、幕末にいたつた。素行に関する文書の多くはこの平戸山鹿家と津軽山鹿家に残されている。これら山鹿素行の著書を中心にまとめたものに山鹿素行全集思想編全十六巻（岩波書店）がある。

四

さて素行は貞享二年（一六八五、赤穂浪士討ち入りより十七年前）九月二十六日、六十四歳で没した。

素行の一生を伝記風にまとめたものに、津軽山鹿家の出で、彼の娘の子、つまり孫にあたる津軽耕道が著した『山鹿誌』というのがある。前記の素行全集第十五巻に採録されている。山鹿誌の最後に素行の死没に関する記述があるので、次に摘録してみよう。年次は貞享二年、素行の没した年のものである。また先生とあるのは素行のことである。

「秋、八月壬戌の日十日、先生採薪の憂あり。九月下旬、疾病なり。松浦主・津軽主・本多主・大島某及び門人等、日夜先生の宅に集まり、各々回生の道を謀る。諸侯或いは束を投じ、或いは自ら行きて、尚菓を招き、もつて百菓を施すも、竟に起つべき色なし。此の時に井関玄説、世に天下一の良医と称す。奉書を得ざれば乃ち病家に到らず。松浦主駕を走らし、自ら井関氏の宅に到り、以て招く。玄説菓を施す。終に歿なし。同月丁未の日二十六日、辰の刻、積徳堂に卒す。」

難解の文であるが、「採薪の憂」とは、病氣に罹ることを言う。「疾病なり」は「やまいへいなり」と読み、病氣が重くなることを言う。「松浦主」とは、平戸の藩主松浦鎮信のこと、「津軽主」とは弘前の藩主津軽信政のこと、「大島某」とは出羽守とある。いずれも素行を重く用い、自ら門人の礼を取つていた人たちである。「束を投じ」とは手紙

を送ること、「尚薬」とは薬を司る人、すなわち医師のこと、「井関玄説」は名医といわれた曲直瀬玄朔の弟子で四代將軍家綱の侍医であった。「積徳堂」は浅草田原町にあった素行の家塾をいう。平戸の殿様がわざわざ自ら駕を走らして井関玄説の宅まで行つて往診を頼んだというのである。いかに尊敬親愛していたかがわかる。松浦静山も「甲子夜話」の中でこのことを伝え、自分の四代前の先祖について「其の敬愛の深きこと以て知るべし」といつている。

素行の発病日が八月十日、死亡日が九月二十六日というのは、著者である耕道から見たとき、自分が四歳の時に当たるわけであるが、この文章を書いたときは素行の嫡子であり自己の伯父でもある平戸山鹿家の高基、すなわち直接素行の看護に当たった人達が生存中のことであるから、まず確実と見てよいであろう。

なおここで注目すべきは、素行の死に当たって明瞭に見られた症状に黄疸があることである。

このことは同じ全集十五巻に載っている平戸藩の家老、滝川弥一右衛門の手記『滝川弥一右衛門蔵秘覚書』から明らかである。

彼は、素行の臨終にあたり、主君の命令を受けてその病床に至り、最後の教訓を聴き、また最期を見届けたという。いつ見舞ったか期日ははっきりしないのが残念であるが、まず素行の方から「私儀は重病、日を追つて不快に覚え申し候、……此の節は本復不定に覚え候得ば、日頃の存念残らず申し上げ度く」と息子を通じて申し入れがあった。そこで主君の命を受けて枕元に駆け付けたという。

素行は病床にあつて、藩主への建言として、領主としての心構えを詳しく語り、また多年懇情を受けたことについて感謝の意を述べてから

「……此の節重病追つてさしおもり、身体の色迄変易仕り候。志言の申し上げ納めと存じ奉り、残らず申す儀にて御座候。宜しく御間に

達せらるべく候」

素行自ら、自分の身体の色まで変わったことから再起不能と判断し、これが申し納めである、宜しく伝えてくれと、領主への伝言を述べたという。

手記では此のあと「同年九月二十六日御死去、御病氣は黄痰にて候」という記述で終わっている。

身体の色まで変わったというのは「黄痰」すなわち「黄疸」であったのである。

素行の場合黄疸が八月十日に始まつて、一ヶ月半つづいて終に死去したものである。

彼の病氣は、黄疸を主症状とする病氣、すなわち肝臓病であつたと見て間違ひなからう。

五

山鹿素行の死因を肝臓病とするとき、ではどんな肝臓病か。

主症状が黄疸で、正味一カ月半（六週間）の経過で死に至る病氣としてまず浮かぶのは、劇症肝炎（げきしようかんえん）である。

劇症肝炎の診断基準としては次のように言われる。

「肝炎のうち症状発現後約八週以内に高度の肝機能障害に基づいて、肝性昏睡Ⅱ度以上の脳症をきたし、プロトロンビン時間四〇％以下を示すもの。そのうちには発病後一〇日以内に脳症が発現する急性型と、それ以後に発現する亜急性型がある。」

もう少し具体的に劇症肝炎の臨床像を解説すると、頭痛・発熱・食欲不振など肝炎症状発現後、数日以内に黄疸が高度となり、急速に意識障害を伴つてきて、多くは八週以内に死に至る。生存率は現代医学をもつてしても二〇〜三〇％、確立された治療法はない。原因としては肝炎ウイルスや薬物が考えられるという。

しかしこれを見ても、すぐわかるように劇症肝炎の主徴候には脳症（肝性昏睡という）、すなわち意識障害があげられている。これが不可欠の条件である。

これに対し素行の場合を見ると、この昏睡症状が見られないのである。自分の黄疸症状を見て、自ら再起不能と判断して、最後の上申（遺言とも言えよう）をしたからと言って、使者の来宅を求め、長時間にわたって諄々と自己の所信を述べ、これを主君に伝えてくれと頼んだ末、従容として死んでいっているのである。劇症肝炎の定義に当てはまらないのである。

肝炎といえば、現代の医学ではA型・B型・C型・D型・E型の五種が知られるが、この時代の日本人に見られた肝炎というのはまずA型肝炎と考えてよいだろう。このA型の急性肝炎例のなかに、意識障害がなくて、劇症肝炎の定義に当てはまらない重症型がしばしば経験されるという。

そうとするならば素行の場合もこのA型肝炎の重症型（ないし劇症型）と考えられないか。これが一番びつたりするではないか。

その外黄疸をきたす疾患として慢性的肝炎、或いは肝硬変、肝臓癌、胆嚢癌などもまったく無視することも出来ない。これらにA型肝炎が重複感染した場合、重症化する場合がないとは言えないが、素行の場合はそこまで考える必要はないであろう。

ここでは一応山鹿素行の死因は急性A型肝炎の重症型と診断する次第である。



（すぎうら もりくに

医学博士

山形大学名誉教授）

九州支部報告 豊後街道と太閤道伝説を歩く

馬場 良平

九州支部春季例会は、平成18年6月17日土曜日に福岡市南区の福岡市立南市民センターにおいて開催されました。当日は地元福岡はじめ、佐賀、長崎の会員14名とゲスト出席者（福岡市内の県立高校の校長先生）が加わり始まりました。まず石川支部長から本部、支部関係報告や会員動向、新入会員の紹介等がありました。このなかで本部星塾代表理事からの祝電（激励）メッセージが披露されましたが、会員暦2年目の私には九州支部の継続的な活動が本部でも注目されていることを感じたメッセージでありました。

つづいて、会員による講演が行われました。最初は松尾卓次氏（島原城資料館専門員）の『伊能測量隊を追っかけて「豊後街道を行く」』であった。松尾氏は教員時代に家庭訪問で地域を歩いていたことがきっかけで、島原の町歩きから始まって、島原藩主の参勤の道・島原街道を歩かれ、さらに殿様を追っかけて長崎街道を歩かれて、その体験をもとに「島原街道を行く」「長崎街道を行く」の本を出版されていらつしやる方である。松尾氏は「街道を歩いて必ず出くわすのが伊能忠敬さんだ」と云われている。今回の講演では、実際に踏査された豊後街道（熊本・大分・鶴崎間）についての興味ある話であったが、こ

こでもまた、伊能忠敬の足跡をたどる旅であったと云われている。

豊後街道は加藤清正によって造られ、細川氏によって整備された街道であるが、伊能忠敬は第一次九州測量時に豊後街道を測量している。伊能測量隊は文化7年（1810）12月、極寒の中をひたすらに豊後街道沿いを測っている。伊能忠敬の測量経路を詳しく説明しながらの話であった。松尾氏は最後に豊後街道について、熊本側では現在でも



後列左から 井上辰男、遠藤薫、國重正樹、平川定美、山下浩司、原口光和、
中富道利、馬場良平、前列左から 松尾紀成、穂吉正明、石川清一、
牛嶋英俊、浜本校長、野田茂生のみなさん 敬称略

良く歩かれている道で清正公の足跡をたどる道でもあり、歴史を歩いて感じることもできる道であると云われ、伊能忠敬の測量日記の地名をたどって街道を歩くことも良いことだと結ばれた。

講演の二つ目は井上辰男氏（日本測量協会九州支部専門役）による「長崎街道、直方四ツ辻の位置決定法」についてであった。正直なところ、測量に素人の私には理解できなかった内容であった。ただ、直方四ツ辻の位置決定にかける井上氏の熱意は強く感じられた講演であった。

講演の合間の時間を利用して、5月21日、23日に行われた本部研究旅行「忠敬思い出の地探訪・平戸・長崎の旅」について九州支部から参加された松尾紀成氏（長崎街道研究家）から同行報告があり、一行が立ち寄られた先々で熱烈的な歓迎を受けられたことが窺い知れた。

さて当日のメイン講演は、この春、出版された「太閤道伝説を歩く」の著者・牛嶋英俊氏（福岡県

文化財保護指導委員）の九州の太閤道についてであり、「太閤道伝説を歩く」は新聞各紙が書評にて取り上げ話題の本になっており、的を得た講演である、私はこの講演を大変楽しみにして来ました。なぜならば、私も街道歩きをする中で、太閤が歩いたと云われる唐津から肥前名護屋までの太閤道を立派な歴史遺産として後世に語りついで行かなければならないと思っているものの一人だからです。牛嶋氏は「いま、街道が面白い」と説かれ、古街道を歩く会、地域起しや歴史を「旅する」人々で街道が見直され、近年の街道ブームとなり、伊能忠敬研究などが活発になったと話されている。また、近世の街道は江戸時代を通じて整備され、現代に引き継がれたところも多いと云われている。これに対し、街道成立以前の道は何であったかと云う疑問から、太閤道伝説に足を踏み入れ、各地を彷徨してきたと云われ、太閤道とそれに纏わる伝承が戦国時代・室町時代の交通路研究の手がかりとなると話されている。

太閤道が400年を経た今でもなぜ残っているかという自問には、一つは秀吉の軍事行動の折には大掛かりな道路整備をしていること、二つには国民的ヒーローのロングセラーで歴史上の人物で豊臣秀吉の人氣が高いこと、三つ目には秀吉が自ら出かけたところは多く、日本のほとんどに足跡を留めていることで、多くの日本人にとって秀吉はいわば「ご当地」の話題として、今直、語り継がれていると云う見解を示しておられた。私たちの住む肥前路には、太閤道と伊能忠敬が測量した道が符合するところが多く残っており、この講演を機会に私も太閤道と伊能道についてもう少し勉強したいと思ったものでした。

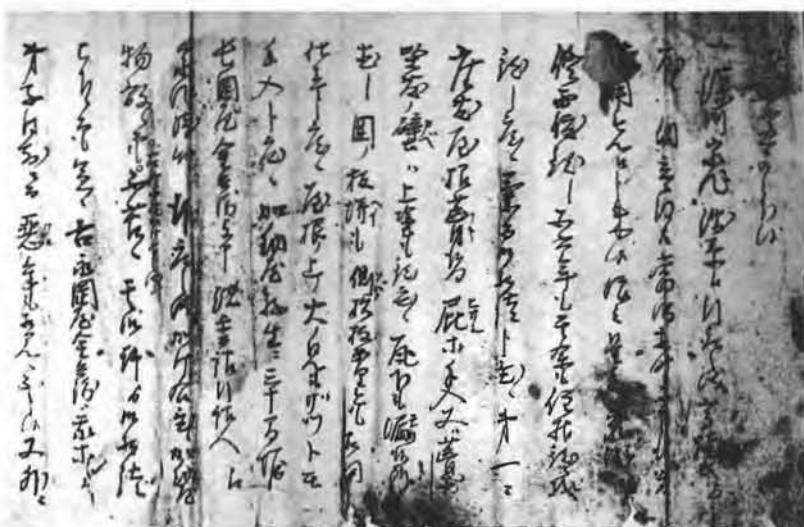
さて、夕方からは場所を替えて懇親会が行われ、昼間の講演会の内容や日頃の伊能探究の成果などについて情報交換がなされ、会員相互の親睦が図られた有意義なひと時を過ごしました。

（ばばりようへい 塚崎・唐津往還を歩く会主宰）

「文化の開拓者 伊能忠敬翁」(二)

宮内 敏

初公開1 伊能忠敬直筆書簡



書簡解説 伊能忠敬記念館(佐原) 学芸員 紺野浩幸氏

御安慮可被下候

一、深川家作浅草江引取之儀、高橋氏より

度々伺立候得共、当時相叶不申候旨

御用先江申来候 依之是迄ノ家作は

修履致し五六年も其余も住居致候様

致し度候 兼而御相談申置候 第一二

座敷屋根葺替^{ヒサシ}庇等手入又ハ葺直し

坐敷ノ壁ハ上塗も致置候 瓦下も漏候所ハ

直し囲ノ板塀も側松板なりとも相用

仕立申度候 屋根ノ上ノ火ノ見もザツトモ

手入申度候 加納屋存生三三間堀

長岡屋金兵衛と申諸普請引請人江

家作浅草江引取之儀かけ合置候 加納屋

物故二而も不苦候 某御許より御相談

被下候而も宜候 右永岡屋金兵衛ハ我等二ハ

弟子同前二而、悪氣も相見へ不申候 又外二

御年寄諸職人実体ナルもの候ハ、

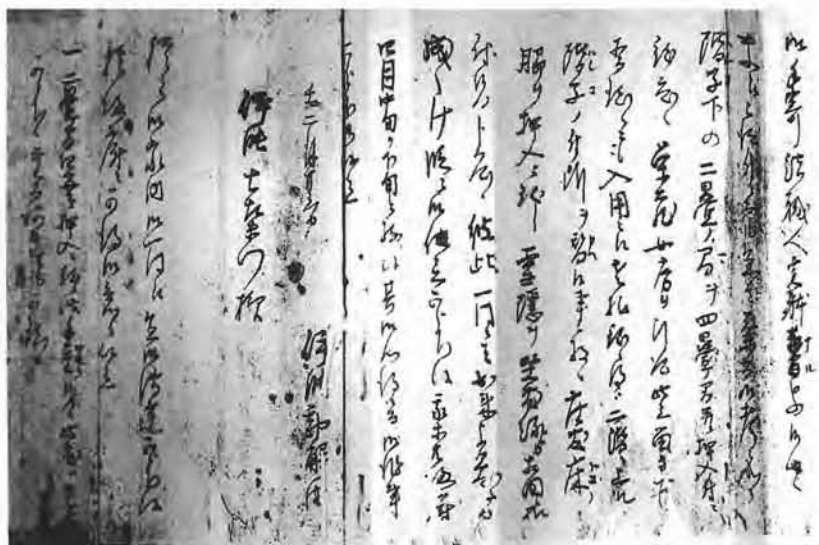
夫江被仰付候而も宜候 兼而御考被成候

階子下の二畳ノ間ヲ四畳ノ間并ニ押入付ニ

致度候 栄藏女房ヲ引取、此上留主で^(キズ)

為致候ニも入用ニ候 左様候致得ハ二階へ上ル

階子ノ付所ヲ替候事と存候 座敷床ノ



脇ヲ押入ニ致し、雪隠ヲ坐敷縁より相回候様
付替申度候 彼此一同ニは出来申間敷候間（ムシ
成たけ段々御仕立可被下候、我等共帰府
四月中旬力下旬と存候 其御心得ニ而御作事

可被下候 以上

閏二月二十三日

伊能勘解由

伊能七左衛門様

猶々御家内御一同江宜御伝達可被下候

猶帰府ニ可得御意候 以上

一 二畳の間押入ニ致候儀手重候ハバ此度ハ御見合

可下候重而何れニも可致候

（一部編集部補読）

書簡についての考察

全国測量のため、江戸深川宅は留守勝ちであつたため、その間の管
理を伊能七左衛門に依頼していたようである。この書簡は伊能忠敬が
分家筋にあたる伊能七左衛門に旅先から出したものである。

書簡の日付は閏二月二三日とあるが状況より、文化八年（一八一二）
閏二月と考えられる。

（近傍の寛政四年閏二月は翁四七歳でまだ隠居していない）

文化八年のこの時期は第七次（九州第一次）測量の帰路に当たる。
文化八年一月一九日小倉を発ち九州より帰路に着く。下関を経て中国
地方の内陸を測量、閏二月二二日新見町着宿、同二二日新見町再宿、
同二二日新見出立、正田村・石蟹村・井倉村を経て乗船、高梁川沿い
に松山城下本町着、止宿平松与七郎。同二三日同所に再宿している。
書簡はこの日に書かれたものと思われる。測量日記によれば「二四日、
朝微雨。同所逗留。松山領割元池上直左衛門、下町年寄定十郎出る。
割元庄屋中島益治も出る。此夜宵大曇、五ツ後に少晴る。測量・江戸
状を出す」とある。

注 新見町（現岡山県新見市）

松山城（備中松山城・現岡山県高梁市）

初公開 2 幻の地図見島

山口県萩市見島 萩より四五キロ沖 周囲二四・三km、南北六km、人口一三〇〇人の小さな島である。萩より高速船で七十分。見島牛で有名だが、自然いっぱい不思議な島と紹介している。(萩市HPより)



右の書は、前述で紹介した書簡や地図と一緒にあったもので、その地図の説明かと思つたら全く異なる地図があつたようだ。

「此地図ハ伊能忠敬翁所作長門国旧見島郡見島村、萩ヲ距ル二十五里現今阿武郡ニ属シ東ハ隱岐ニ向テ西ハ対馬に對シ北ハ韓国金山ニ隣リ南ハ即チ萩ニ面スル一孤島也」とある。誰が書いたかは不明だが、伊能七左衛門成徳氏が祖父の父克太郎と考えられる。

伊能忠敬測量日記一(千葉県史料)によれば、文化三年(一八〇六)五月二七日の記録に「・・・此日坂部・門倉・佐藤・丈助 見嶋測量」とある。



以後は小誌よりいくつかの項目について紹介したい。

忠敬の蝦夷地測量

蝦夷地測量は内地測量と異なり大変困難なものであつたようだ。その様子は、「供の一人は病氣にかこつけ帰つた」「一日の進行距離が内地の二分の一から三分の二(16km〜32km)と短くなっている」等からも分かる。忠敬より少し前に蝦夷地入りした八王子同心隊の記述から推測してみたい。



雲海と武左岳(月田良雄氏)

蝦夷地の警備と八王子同心隊(注①)

十七世紀末頃には、北海道周辺のカムチャツカ・樺太・千島方面に毛皮獣の捕獲を目的としてロシア人が多く往来するようになった。十八世紀に入ると、ロシア南下の情報は識者の間に広まり、幕府も国防の必要から寛政十一年(一七九九)には蝦夷地を直接支配することになった。(注②)

当時、幕府は津軽・南部両藩に蝦夷地の警備を命じ、根室、国後、択捉に勤務所を設け警備にあたる体制をとっていた。派遣の藩士は毎年五百名と両藩にとって大変な負担だった。

一方、幕府は八王子千人同心の頭、原半左衛門(胤敦)から出されていた、「同心の二、三男らを引き連れて蝦夷地の開拓と防衛の任務に当たりたい」との願いを許可した。(原半左衛門は蝦夷地の交易が幕府の直轄になったのを機会に寛政十一年二月に願いを出していた)

寛政十二年(一八〇〇)三月武州八王子郷を出発、四月には第一陣の五十人が半左衛門に率いられ白糠(網走、足寄へ向かう交通の要路)

に着いた。弟、新介も五十人を引き連れ勇弘（苫小牧市）に着いた。

農業をしつつ、南部藩の警備を補うことになったのである。忠敬が蝦夷地測量のため江戸を発つ少し前のことである。八王子同心隊の経路については明らかでないが忠敬と同じ道を北上したのであるうか。

白糠町のホームページは「八王子千人同心隊がこの地に開墾の鉄を入れてから二百年余……開墾の初めは北海道最初の屯田兵村を造った……」と書いている。

一、農業と道路づくり

八王子同心は白糠に滞在中に、道路を開き、択捉島を警備し、阿寒で硫黄を試掘し、尺別川、茶路川、庶路川のほとりで農業を試みた。

「千島志料」によれば、三年目の享和二年には開墾した土地およそ二十町歩（二十ヘクタール）で、大根三万本、芋（ジャガイモ）五斗、菜種一斗ほど、いんげん、ささげ、ねぎなど野菜を少々、大麦二斗余、粟二斗余、そば五斗に稗・大豆があげられている。大麦・粟は嵐のため実入りがなかったと付け加えられている。

道路では、釧路川と斜里川を結ぶ斜里山道（現、釧路標津計根別斜里町）を享和元年（一八〇一）に拓いた。

「斜里町史」によると「斜里から川舟に乗って七里遡り、トンタベツクシ（現上斜里の江蔭川の合流付近）に上陸、新道はここから新しく伐り開かれたもので、……の辺はすでにアイヌの人達の家もない密林の奥であった」

二、多数の犠牲者

勇弘と白糠に移り住んだ者は合せて百三十人。内三十三人が八王子に帰ることなく、蝦夷地で犠牲者となった。白糠での犠牲者は十七人、内十五人が三年目の享和二年（一八〇二）に死んだとされる。

多くの犠牲者をだした背景には、蝦夷地の気候と風土が想像を絶す

るものだったことにある。予定した収穫もなく自給自足も定着できなかったため食糧不足に陥った。幕府も漁場開設の努力に比べると、寒冷地農業の技術や、それを育てる体制もなかった。

文化元年（一八〇四）原半左衛門に、箱館奉行支配調役というポストを与え、同心を「箱館地役雇」というかたちで幕府雇とした。これは開拓のためより警備の一員としての役割を明らかにしたものである。多数の犠牲者を出し、失敗と評価されがちな八王子同心隊だが、菊地新一博士は（彼等の屯田遺制の試みの影響は、安政二年十月、幕府の農業主力の根本経営方針の布告背景となって、本州武士層の後幕時代屯田在住の先駆的役割を果たした意義は大きい」と結論づけている。

三、伊能忠敬と八王子同心

忠敬は七月六日八王子同心頭原半左衛門手附榎本忠兵衛・石川半兵衛・澤田与八の三名とサルルで同宿する。また、二十一日にも尺別（しやくべつ）で再び榎本忠兵衛と同宿する。

二十二日、忠敬は白糠に着くと、八王子同心頭の原半左衛門と同心衆を見舞った。また、八王子同心の吉田元治が忠敬の宿を訪ねている。ふたりは天文を語り、すっかり息が合ったらしい。吉田は自分が作った天球を忠敬に見せた。この天球は渋川春海（注③）の図面をもとに細工して作ったという。忠敬はその出来栄にたいそう感心している。二十三日は、おなじ同心の石坂重治郎、前島新兵衛、八木庄蔵、坂龍右衛門らの見舞いを受け白糠を発っている。

この後、クスリ（釧路）、コンブモイ（昆布森）と旅宿所をかさね、アッケシ（厚岸）、ニシベツ（西別）まで行き、根室と国後の方位を測量する。

その後、帰路についている。八月中頃になって再び通ることになるクスリ（釧路）では「霧深く、暮二甚シ、夜大曇」（寛政十二年八月十四日条）と、霧の季節を向かえた釧路を示している。

注① 八王子同心隊 元は甲斐武田の家臣で、武田氏が滅んだあと、領

主となった家康配下の武士団である。関ヶ原の戦いをひかえた慶長五年には、浪人を募集し文字どおり千人の武士団が成立していた。当初は軍事的な役割が大きかったが天下泰平が訪れるようになると、千人同心の役割も変化し、甲州街道の守備や日光の東照宮の警備・江戸城修築の際の警備などにあたっていた。身分は武士であるが、通常は高持百姓（石高のある百姓）であった。平同心と云えども郷にあつては名主層であつたから、千人同心頭は江戸表では旗本格であつた。原半左衛門は同心頭十人の内の一人で、その中の三人が千人同心取締方肝煎であつたが、原もその一人であつた。

注② 寛政年間（一七八九～一八〇〇）に入ると本多利明や最上徳内や大原左金吾らが著書を世に問い、国防の必要性や蝦夷地の本格的開発や原住民（アイヌ）の教化を説いていた。異口同音に松前藩の非力と秘密主義を批判し、幕府の立ち遅れを指摘。幕府は天明五年（一七八五）に行った蝦夷地の調査から、特に千島へ渡った最上徳内の情報からクナシリ、エトロフ島の島民がロシア人の影響を強く受けていることを知った。しかし、これといった対策も行つてこなかった。そこへ寛政元年のクナシリ島の島民の反乱である。寛政四年（一七九二）の秋にはロシアの使節ラクスマンが来航した。幕府は十年に至つて、大規模な調査団を蝦夷地に派遣し、北方問題が非常に危機的状況にある事を認識した。その年の十二月に蝦夷地の一部を松前藩から召し上げ、幕府直轄地とした。

シリーズ「しらぬか物語」谷本定穂著より抜粋

注③ 渋川春海（しづかわはるみ）（一六三九～一七一五） 幕府幕方安井算哲の子として京都で生まれた。山崎闇斎に朱子学・神道を学び、岡野井玄貞、松田順承に師事、暦理を究めた。天文学者で貞享改暦の功労者。初の国産の暦法である「大和暦」を作った。改暦の功により幕府の初代天文方に就任。主な著書『日本長暦』、『天文瓊統』、『天文分

野之図』等

蝦夷地での宿舎について

伊能忠敬測量日記によれば、蝦夷地の宿舎として番屋、本番屋、仮宿、本宅等の記述が多い。どの様な宿舎であつたのだろうか。忠敬より一年前の寛政十一年に白糠入りした幕府奥詰医師の日記に「久須里（現釧路）の旅館に至る、鮫魚の物置の内を仕切たれば腥臭（なまぐさしゅう）甚だしく堪えがたき所なり」とある。

この時期、幕府の医師であつてこの待遇である。他の会所・番屋当たりではせいぜい詰合（役人）と同宿するぐらいのものであつたろう。幕府は東蝦夷直轄経営に当たつて道路と旅宿所の整備を急いだ但实际上には寛政十二年以降になつてのことである。忠敬の直前に白糠入りした幕府戸川安論と河内政良の随行者吉田有利の東蝦夷日記には「御宿小屋新規屋根かこいトドの皮にて三間に六間也。子丑の方に此間ヨシ桔梗有」とある。

忠敬が東蝦夷入りした頃は宿舎の整備が進行中であつたに違いない。

八王子千人同心関連の参考資料

白糠町役場編 叢書しらぬか第四巻「白糠、八王子千人同心」、

伊能忠敬測量日記 釧路市史料編纂室 web 資料

（北海道歴史探訪、釧路昔ばなし）

<http://www.hokkai.or.jp/history/kusiro-mukasi/2-3.html>

つづく

（みやうち さとし・伊能家縁戚、濱宅宮内家17代当主）

*編集部注 宮内さんの著書「文化開拓者伊能忠敬翁」の頒布について伺ったところ、多少の残部ありとのこと。私家版のため送料込みで実費二千五百円。A5上製404頁カラー多数。事務局ないし宮内さんにお申下さい。

伊能測量隊員柴山伝左衛門について(二)

―『伊能測量隊員旅中日記』を中心として―

安永 純子

三、第六次測量と伝左衛門について

(一)幸運な旅

幕府の測量御用となった第五次測量から、測量隊に幕府の下役人が一名加わっている。この下役人の任期は、一回のみであったので、その後任となる伝左衛門も第六次測量のみに加わることになった。伝左衛門にとって第六次測量に従事することは幸いであった。なぜなら、第五次測量にとくらべて、第六次測量は比較的安定した旅だったからである。

第五次測量では、当初中国地方から九州を経由して四国に入る順で約二年間の測量を予定していた。ところが、予想をはるかに越えて西日本の測量に時間がかかることが途中でわかり、中国地方のみに変更された。

現在の日本社会では、労働基準法があり、一日あたりの労働時間や休日について基準が設けられている。江戸時代には、そのようなものはなかった。雨や風が強くなければ、ほぼ毎日のように昼間には実測、夜間には天体観測が行なわれた。

このような日々が約二年間も続けられたことは、隊員たちにとって精神的にも体力的にも限界を超えることにつながった。その結果として飲酒によって現地住民との間で問題がおこってしまった。この責任をとって忠敬は門人の破門という決断を強いられた。まさに、第五次測量は、苦難の旅だったといえる。

この経験を忠敬をはじめとする隊員達は教訓として学び、第六次測量は、約一年間という期間で終えている。もちろん、忠敬はこの旅にあたって隊員に対して禁酒を徹底するなど、節制につとめさせている。伝左衛門の日記でもその質素儉約の旅の様子はみられる。

さらに幸いなことは、伊予松山藩のように第五次測量に続いて二度目の受け入れとなる地域があったことである。受け入れる側も二度目ということ、準備に関する情報は、四国地方の情報伝達網に乗って各地にもたらされた。第六次測量にあたった諸藩は、そのマニュアルに従って伊能測量隊を受け入れることができた。

受け入れる側もまた、伊能測量に対し非常に協力的だったのも幸運だった。四国地方では、伊能測量隊を幕府の巡検使と同様に扱ったのである。中には、藩主が宿泊する本陣や、藩主や家老を接待する部屋を設けた庄屋敷が宿泊所として提供された。そして、現地の人々は、隊員たちを手厚くもてなした。

その背景には、次のような地元の事情があった。四国地方では、山間部がおよそ七割を占め、平地が少ない地形だった。江戸時代に入ると新田の開発がどんどん進められて、海岸を埋め立てたり、山間部を切り開いたりして田畑の数を増していた。米が中心の江戸時代にとって年貢の徴収にはどうしても正確な地図の作成技術を持つことが必要だった。それぞれの地方では独自の測量方法が用いられ、相当な技術を持っていた。しかしながら、忠敬が行なう天体測量は、これまで行なわれたことがなかったのである。そこで、それぞれの地方の測量家は手をこまねいて忠敬が現地を訪れるのを待っていた。他の地方と同様に昼間の測量を手伝う以外にも天体観測にまで昼間の疲れも忘れて関心を持つ人々が見聞に訪れた。

それほどまでに熱心な人々は、藩の役人であったり、庄屋など村役人の役職についていた。彼らは、伊能測量隊を迎える重要な世話役兼

支援者だった。

そして、その技術者の行動を支えたのは、その地方で生活を送っている農民・漁民だった。彼らは、測量のための道造りや船の提供から隊員たちの食料や測量の手伝い、宿泊の世話にいたるまでのすべてを負担した。地域が一丸となって取り組んだ地方の人々による支援が、測量に与えた影響は非常に大きかった。

伝左衛門が経験した第六次測量は、これらの幸いな点が多く降り積もった最も安定した測量の旅であったといえる。

(2) 伝左衛門の役割

伊能測量は、大きく二つの測量を行なった。ひとつは、昼間に行なう実地測量で、もう一つは、天体測量である。伝左衛門は、双方ともに参加している。

昼間の測量では、忠敬を筆頭として、一つの隊で測量する場合もあったが、時には、二つないし、三つに隊が分けられることもあった。

二つに分かれる場合、主に一つ目の隊を忠敬が率い、二つ目の隊を坂部が率いた。忠敬の測量隊に加わることもあったが、坂部隊に加わっていることが多い。忠敬は、高齢であったため、測量において体力を消耗する難所に相当する部分を坂部が測量している。伝左衛門は、その坂部隊に含まれるほど、若く、体力もあつたとみられる。

特に、四国測量の時には、難所として知られる四国山地を縦断する測量を坂部隊が行なっている。この測量にも伝左衛門は従事しているのである。第六次測量の経路については、これまで伊能忠敬著「測量日記」によって、第六次の測量地点のすべてが明らかにになっている。その一方で、忠敬自身が立ち会っていないため、詳細が不明な地点もあった。それが、坂部隊が行なった四国縦断測量である。現在この地点に添ったように高知県と愛媛県を結ぶ四国縦断の高速道路が走って

いる。坂部隊に加わった伝左衛門はその測量について詳細に記されており、隊員の日記としてだけでなく、測量の様子を詳細に知る上でも貴重なものである。

また、三つに分かれる場合も、二つと同様に、忠敬及び坂部がそれぞれ率い、三つ目は、忠敬の息子秀蔵や下河辺などが率いる場合があった。時には、この三つ目の隊に伝左衛門は加わることもあった。

その反面、伝左衛門が加わらなかった作業がある。途中絵図作成も測量隊は行なっているものの、その作業にだけは加わっていない。

(3) 第六次測量の経路

① 江戸出立から兵庫・淡路島まで

伝左衛門の日記から経路をたどってみると次の通りになる。文化五(一八〇八)年一月二五日の朝に、伝左衛門は小石川の組屋敷を出て、浅草の天文方曆所の御用屋敷に集まり、その他の隊員達とともに出発した。石川彦左衛門ら関係者が、日本橋まで見送りに出ている。この頃遠くに旅に出る友人知人を次の宿場まで見送る慣例があつたためである。その夜、品川宿の湊屋弥三郎の本陣に総勢一六名すべての隊員が揃った。

第六次測量の主な目的は、四国・淡路測量であつたが、その往路では、東海地方や近畿地方の第五次測量までに測量ができなかった場所の測量を行なっている。

一行は、東海道を通って西へ進み、二月四日に浜松宿に着いた。この夜、伝左衛門にとって、現地で初めて最初の天体測量を行い、翌日の浜松宿では最初の実地測量を始めた。浜松宿から坂越街道を通り、三方原に出て、気賀街道を測った。その後、姫(気賀)街道を通り、北金谷村から御油宿まで再び測量を行なった。

二月一六日には岡崎を通り、熱田宿からは、船に乗って七里の渡し

を通過した。途中鈴鹿峠を越えて琵琶湖のほとりの草津に泊まった。二日には、大津に宿泊するが、この日は一日大津から京都にかけて、御所、四条河原、本能寺、祇園、三十三間堂などの名所をめぐる。翌日には、大津から伏見京橋南町まで測量した。伏見から大阪にかけては、石清水八幡宮など名所旧跡を参詣している。

大阪には、役所での手続きや雨天のため、二日から二八日まで四日間宿泊している。初日には、忠敬をはじめとして伝左衛門ら下役人四人が袴を着用して大阪呉服町の会所に挨拶に出た。大阪は、江戸時代において西の台所と呼ばれ、重要な流通の拠点であった。特に西日本においては、年貢米が大阪に集められたため、西日本各地の蔵屋敷が立ち並んでいた。その中には、四国諸藩の蔵屋敷も含まれていた。滞在中には、次の測量地となる淡路国と阿波国の藩役人が挨拶に訪れている。また、大阪の名所の天満天神や四天王寺への参詣も行なっている。四日目には、忠敬と坂部は上下の服装で、大坂の両町の奉行へ出発の挨拶に出た。

大阪を出発した一行は、摂州西成郡北野村網敷天神前から測量を開始した。十三の渡しを通過し、伊丹会所を抜けて、大鹿村まで測量した。その日は昆陽宿に泊まり、翌日には昆陽寺、生田明神、広厳寺を参詣して、それぞれの寺社の什物を記している。伝左衛門は兵庫の脇本陣明石屋惣左衛門宅に宿泊している。

三月三日には、舞子浜から淡路島へ渡ろうとするが、天気が悪いため、一泊待ちをしている。須磨寺に参詣し、平敦盛の墓を描いたり、四軒並びの茶屋のうちそば屋の男共の客の呼び込みのお囃子を丁寧に聞き書きしている。(写真1と2)

兵庫の舞子浜から船に乗って、三月四日淡路島岩屋浦に隊員達は着いた。そして、淡路島を含め周辺の島々の測量を行なっている。淡路島の測量の半分を終えて四国に向かった。

写真1 平敦盛の墓



写真2 楠正成の墓



(4) 四国測量

① 徳島と土佐

四国本土に着いたのは、一八日のことである。阿波国岡崎浦に上陸した一行は、そのまま海岸に沿って北上した。徳島藩には、全国的にも名前を知られた測量家岡崎半蔵がいた。半蔵は、測量技術の向上のため、名前を変えて土佐藩領の測量まで同行している。名前を変え、地元の人々と交じり、縄引きをしていたところで忠敬らにみづかり、すぐさま隊員たちに加えられたというエピソードはあまりにも有名である(2)。

伊能測量に随行した高知藩士奥宮正樹の著「奥宮正樹日記」(3)によれば、徳島の測量では、人足を約四〇〇人要したと記されている。土佐藩では、徳島藩領の測量を終えるのを今か今かと待っていた。測量にあたって遅れが生じることを現地では恐れており、測量隊がいつど

こに着いたか、逐一報告されていた。正樹は、一七日に測量の道で難所となる龍ヶ崎を見分している。その場所は、「今に足わななきなどして心も消えゆるはかり也」と記すほどの難所であった。通行するには、その道しかなかったようで、翌月一四日に同じ場所を通った伝左衛門も同じような心中を日記に記すことになる。

四月一八日には徳島藩領の測量を終え、そのまま海岸線に沿って土佐藩領に入った。同月二八日、伝左衛門は、四国縦断測量を行なう坂部隊に加わり、忠敬らと別れて、駕籠に乗って高知城下に向かった。それは、縦断測量の起点が高知城下の宿泊地であったためである。翌日雨天だったので、翌五月一日に、城下種野崎村立見屋傳右衛門宅前を起点として測量を始めた。

測量の道は、土佐藩主の参勤交代の道でもあった。土佐の太平洋の荒波は、江戸時代当時の帆船では、難破する船が多く、命がけの渡航となっていた。それを避けるために四国山地を縦に貫く土佐街道を通っていたが、千メートル級の山々がそびえる四国山地は、数々の難所があった。その難所のひとつの国見峠の様子を伝左衛門は、道は細く、大木は古い茂り、白昼だというのに闇のような暗さと表現している。

途中、本山村の酒造長瀬順次郎に泊まった。その家は、土佐藩主が参勤交代の時に家老が宿泊するほどの家で、たいへん立派な家造りをしていてと褒めている。この村の家数は、一四八軒あったものの、山中にあるので、物淋しく感じている。ちょうど翌日は端午の節句であるので、民家が屋根に「よむき」を挿しているのを眺めて、「頗る古里の情を思ひ出せし」と記して、江戸をなつかしく思い出している。伊予国境となる立川村では、土佐藩主も宿泊する立川番所に宿泊した。

七日に土佐国立川村と伊予国馬立村の境にたどり着いた。そこには小川が流れており、その場所から一尺ほど北によけて「従伊与国宇摩郡」と記した札を立て、同じように対岸に一尺ほどよけて「従是南土

佐国長岡郡」と記した札を立てた。その真ん中に左右を分ける水流れとして、少しよけて境木を建てた。この時に、伊予国宇摩郡の庄屋が二名出て来て、立ち会っている。ここでようやく測量を終え、翌朝には駕籠に乗って高知城下まで戻り、一〇日には、忠敬率いる本隊と合流した。

一四日には、井ノ尻浦から船に乗って、龍崎に差しかった時、伝左衛門は、土佐の大波のおそろしさを目の当たりにする。地元の人々はこの大波を「土用の波」と呼んでおり、高波が発生する時期でもあった。船は五、六尺ずつ上下に揺れ、あまりの揺れに伝左衛門は船酔いして「甚だ心持悪しく、吐食等いたし」と記している。

この日の測量は、それだけの困難ではなかった。一行は、ツヅラ浦の岸に船を着けると、そのまま山に上った。その地は、先述の奥宮正樹が見分した道である。その斜面は「屏風を建たることく」のような急斜面で、「其所に住馴れぬ木こりさへも不通所なり」とあるように地元の人でさえも通る道でなかった。「木の根落つるなどをた伝へ、漸々にして海岸へ下りたり」とあるように、道と呼べる道でもなかった。伝左衛門は、「別て此日此夏に成、始ての厚さにてたへ難く、誠に此日の難儀一生界不可忘」と記している。

また、時には船から飛び乗って測ることもあった。二〇日の大津崎の測量の時のことだった。船から岩上へ飛び上り、また今度は逆に船に飛び下りる時にあまりの波の高さに船がひっくりかえりそうになった。伝左衛門は、ここでも「運強くして無事二帰宿せし事高運といふべし」と記している。

このように土佐測量は険しい山越えと高波との戦いであったことがうかがえる。翌六月二日には、足摺岬に到着した。昼食を足摺岬でとった後、修験者の難所としても知られる四国八ヶ所のひとつ金剛福寺を参詣している。

②伊予宇和島・松山

土佐藩と伊予宇和島藩境に位置する沖之島を測量後、一行は、二三日、宇和島藩領に入った。この宇和島地方は、入り組んだリアス式海岸になっており、四国では最も長い日数を要した。この時に対応にあつた小川五郎兵衛は、この地方から南九州にかけて父五兵衛とともに測量家として著名な存在であつた。測量中、忠敬と、手分けして測量を行なっている。隊員以外に手分け測量をすることはめつたにないだけに、それだけ忠敬にも認められていたといえる。

七月七日の七夕の日には、雨天のため測量は行なわれず、絵図の担当の隊員をのぞいて午後から休みとなつた。伝左衛門は、八幡浜の裕福な庄屋の屋敷で旅の疲れをとりながら、七夕の祭り見物に出かけた。端午の節句の分も重ねて祝い、すごしている。

七月十四日、佐田岬半島の測量を終えた後、大洲藩領へと測量が引き継がれた。大洲藩の測量家東寛治は五郎兵衛の父五兵衛の門人であつた。宇和島藩の測量中、宇和島城下に滞在した時から寛治は隊員の元を訪れている。大洲藩にとっては、参勤交代時の寄港地であり、領民にとっては隣接する松山藩と境界論争を繰り広げていた中島地方の測量をいかに穏便に済ませられるかという課題があつた。

その一方で測量家でもある寛治は、忠敬の来郷を心待ちにしていた。伊能測量に出席した朝、家族に対して「伊能忠敬に弟子入りして来る」と告げて、喜び勇んで家を出たという話が子孫に伝わっている。伊能測量にまつわる寛治の描いた絵図が、中島及び大洲、伊能忠敬記念館に残っている。

八月一日に、松山城下に着き、一三日には道後温泉で休養をとっている。この滞在中に、松山藩から與居島門田村屋子息堀内五兵衛と新海程太郎が、忠敬を訪れて、暦学の入門を請い、忠敬はこれを許

して、暦学の本を貸している。この時五兵衛は、一七歳であつたが、後に優れた国学者及び歌人として伊予に業績を残している。五兵衛が写した測量本が愛媛大学付属図書館⑥に保存されている。

③伊予今治・川之江・四国縦断測量

同月二一日には、今治を測量し、第五次測量の時に測量しなかつた分の芸予諸島を測量した。二六日、小松領今在家に宿泊していた時、今治領大庄屋青野保屋六蔵から隊員たち銘々へ、今治藩の町絵師山本雲溪の絵を贈ると申し出があつた。伝左衛門は、早速鹿の絵を書いてもらっている。山本雲溪は、町医者だったが、大坂で医学を学ぶ傍ら森祖仙から絵を学んだ。帰郷後も雲溪の絵が今治地方でたいへんな人気だつた。この時の雲溪の年齢を伝左衛門は二七、八才と記している。地元で評判の絵師を紹介すると同時に、まだ若い雲溪の名声を高めるためにも隊員たちとの交流を図つたのだらう。翌九月六日にこの絵が伝左衛門の元に届けられた。伝左衛門は、謝礼として銀二朱を使用者に払っている。

小松藩から西條藩に入り、伊予測量では残りの天領川之江を残すのみとなつたところで、隊員達は夏の瀬戸内海気候の暑さと旅の疲れが出たのか、この頃次々と病にかかっている。諸藩の待遇は良く、隊員達の体調についても、藩医を遣わすなどの心配りもあつた。天領の川之江から再び坂部隊が残りの四国縦断測量を行なうが、それを目前に伝左衛門は体調を崩し、治療を受けた医師に薬代を金一〇〇疋支払っている。

四国縦断測量では、再び伝左衛門は坂部隊に加わることになつていた。九月七日、病を乗り越えて、四国山地に向かった坂部隊を駕籠に乗って追つた。永ヶ峰の峠から測量に加わり、土佐街道の中でも特に難所として知られる馬立村から国境の笹ヶ峰を測量した。

淋しい山中で今度は重用の節句を迎えた伝左衛門はその身に不思議を感じとっている。この日、節句を祝うこともなく、いつも通りの野服で測量に従事した。瀬戸内海ぞいの測量では、暑さとの戦いであつたのに対して四国の険しい山中はとても寒かつた。宿泊所には、火鉢も用意されていないので、綿入りの重手着を出し、寒さをしのいでいる。土佐藩主も休む場所が宿泊にあてがわれ、申し分のない待遇である。しかしながら、四方を険しい山で囲まれた山中は、江戸人伝左衛門にとつてたいへん淋しく感じられる場所で、再び江戸をなつかしく思い出すのである。こうして、再び山中で節句を迎えることを伝左衛門は「不思議之事なり」と記している。

一〇日に土佐側から測量した際に国境に打った杭に縄をつないで四国縦断測量を終えた。土佐と同様に困難を極めた測量であつたといえる。この同じ日一〇日に忠敬率いる本隊も伊予国の海岸部の測量をすべて終えている。

④丸亀・高松測量

馬立村で一泊した伝左衛門たちは、駕籠に乗って翌日讃岐国丸亀藩海岸を測量している忠敬たちに追いついた。合流後、四国沿岸の測量を引き続いて行ない、二二日には丸亀城下に着いた。塩飽諸島の測量を行なつて、一〇月一三日には、直島付近の島々を測量した。

高松城下に着いたのは、十一月二六日のことである。ここには、測量家久米栄左衛門がいた。栄左衛門は、測量のみならず、物理学の分野にも才能を発揮しており、鉄砲などの製作も行なっている。

十一月五日に高松藩領の測量を終え、四国の最初の測量地点である徳島藩領岡崎村には一〇日に着き、四国測量すべてを終えている。

⑤帰路―淡路から大和地方の測量

翌一日には、淡路島に渡つて、残りの測量を行ない、一九日に兵庫に着いた。大阪、河内を経由して、大和に入り、二八日から大和測量を始め、翌一二月三日に郡山城下に着いた。丹波、桜井、吉野を測量して、二八日に松阪に着いた。そして、翌日には、上下に着替えて、伊勢神宮を参拝した。隊員達は、伊勢で年を越し、新しい年を迎えた。この翌日、隊員に自由行動が許されたようで、伝左衛門はひとり朝五時に宿泊先を出て、伊勢神宮の奥の院に向かった。伊勢音頭にも「お伊勢参らば朝熊をかけよ」と歌われるように、伊勢神宮の奥の院ともいわれる朝熊岳金剛證寺へ詣で、その足で六〇町も歩いて二見浦に出ている。そこには、日の出で知られる夫婦岩があり、初日の出を眺めながら一休みし、夕方には再び宿に戻っている。

翌三日には、松阪を出発して、四日市を経て、六日に熱田に着き、熱田神宮を参詣している。そして、新居、袋井、島田を経て、小田原城下町に宿泊した。その夜には、ちょうど松原大明神の祭礼が行なわれており、神輿や鉦囃子屋敷の見物をした。鎌倉を経て江戸に着いたのは一八日のことだった。伝左衛門は、忠敬たちと浅草の暦屋敷に着いた。旅を共にした隊員達に別れを告げて、親方のいる小石川まで報告に行き、伝左衛門の旅はここで終わっている。

(4)領主からの贈り物

四国諸藩から、伝左衛門に贈られた品物については、表1のような内容である。その内容は、それぞれの地域の特産物である。徳島藩では、うどんや寒制飴、鯉節、煙草といった食物や、雁皮紙・半紙、京奥嶋、小紋麻が贈られている(写真3)。土佐では、鯉節、小杉原紙。伊予では、宇和島特産の鯛や内子特産の蠟燭といった目を引くものもある。綿織物や紙産業が盛んだったこともあり、綾布・晒嶋・真綿・晒布・羽綿・羽毛綿・綿のようにさまざまな呼称の綿織物が贈られた。

写真3 領主からの贈り物



また、紙も、中折紙・

鼻紙の種類が大洲藩と小松藩から贈られている。

多度津・丸亀藩では、晒

木綿と鼻紙が贈られている。

これまでの諸藩の傾向を見ると主に紙と綿織

物が贈られていることから、高松藩では、贈り物

の品物についてたいへん

悩み、紙を求めて伊予を

訪れるといったエピソード

がおこった。

贈り物のひとつひとつ

にも四国地方はこまやかな

気配りがされた。

また、紙も、中折紙・

四、柴山伝左衛門の教養と人柄について

(1)生涯に一度の旅の意味

伝左衛門は、江戸の旗本高林弥十郎の同心で、組屋敷を住居としていた。伝左衛門のような幕臣で下級武士の大半は、役職によって組屋敷を点々とする生涯を送っていたが、忠敬との出会いによって、後の半生が大きく変わることになったといえる。

江戸時代において、士農工商の身分のうち、農工商の身分の者たちは、寺社参詣を目的とする場合に旅に出ることを許されていた。ところが、地方の武士は、参勤交代のお供や文武修行の名目で旅に出ることはあったものの、伝左衛門のような幕臣は、主人に万が一の大事が

あった場合に備えて、江戸市中から出ることは許されなかった。

それだけに、伝左衛門に命じられた全国実測測量の旅への参加は、生涯に一度となる江戸以外の日本を体験できる絶好の機会でもあった。

(2)伝左衛門の教養

測量隊が発する前に、測量の経路について、念入りに打ち合わせがあったことはもちろんのことである。第六次測量を成功させることは、隊員のひとり伝左衛門にとって第一の使命であった。

その旅に伝左衛門はもうひとつの大事な使命を持っていた。このことは、正月を伊勢ですこした時、自由行動が許された二日に、ひとりで六〇町も歩いて立見浦まで初日の出を見に行ったことからもうかえる。

伝左衛門にとって、この旅は、地方の文化を学ぶ絶好の機会であった。測量だけでなく、歴史・地理・文学などさまざまな分野において教養を持ち合わせていたといえる。そこで、出発前に測量の準備だけでなく、立ち寄る地方の名所旧跡について、下調べをしていたのである。江戸時代後期には、全国各地の名所旧跡を紹介する地誌が多く出版され、一大ブームとなっていた。そのブームは、現在でいえば、観光ガイドの役割を果たしていたことになる。これらの地誌類や、歴史書などから、これから向かう旅の名所旧跡の所在を事前に調べていた。そして、地方を訪れた時、伝左衛門は、名所・旧跡を訪ねるだけでなく、現地の人々とも積極的に交流した。このことは、三月一日淡路島の隣島沼島で、ここで伝左衛門は宿の主である宮本屋八兵衛から、地元の特産である大鯛の漁や大坂への売買についての話を聞き取っていることなどからも、よくわかる。

このようにして江戸で知られている名所・旧跡だけでなく、自分自身で見聞したものを詳細に記録し、学んでいった。この測量の旅は、

伝左衛門にとって、経験することすべてが学びの旅だった。

(3) 伝左衛門の使命―次の世代へつなげる旅―

近年の江戸ブームでは、江戸の人々は、勤勉で、たいへん信心深く、人情味あふれるイメージ像がある。この日記からも伝左衛門が、人情味あふれる人物だったことが手にとるようにわかる。

伝左衛門は、日記に何を託そうとしたのだろうか。日記の大半は、測量の記録と、立ち寄った各地の名所旧跡見物やそれぞれの土地の特産物を食すといった喜びと楽しみを記している。その反面、旅の困難や病気に遭遇した時の苦しみや楽しみを「此日の難義、後日不忘ため荒増を記し置」と記している。

四国縦断測量では、故郷を思い出すほどの苦しみや哀しみに覆われ、南海の海では命の危険に見舞われた、その一方で八幡浜の裕福な庄屋の家で町見物をしながらゆつくりと疲れを癒すことができる喜びを綴っている。

そこには、喜びと楽しみに出会った時には旅の苦しみや哀しみを忘れて、喜び、楽しむ。そして、苦しみや哀しみに出会った時には、その経験を今後の人生の教訓にしようと言い聞かせる。といったように喜怒哀楽の豊かな伝左衛門の人間像がここに浮かびあがってくる。この旅を知識の泉としてとらえるのではなく、次の世代への宝としてつなぐことを意図しているのである。

おわりに

文政五（一八二二）年、閏正月八日に、伝左衛門は伊能忠敬の孫伊能忠誨の著「伊能忠誨日記（五）」（8）に姿を現した。正月の挨拶の行事が「御抱屋敷」で行なわれた。その屋敷に、高橋景保夫婦と東儀忠誨の伯母（おいねであるうか）は船に乗って向かった。一方伝左衛門

は、景保の息子小太郎と作次郎、下河辺の息子、そして、伝左衛門の息子時次郎を連れて歩いて向かった。どうやら、この日、伝左衛門は子供達のお守の役目だったようである。

この時、伝左衛門は子供達に何を語りながら御抱屋敷に向かったのだろうか。

明治五（一八七二）年に、約三百年にわたって、日本に平和をもたらした江戸時代は終焉を迎える。忠敬たち隊員達が足しげく通った浅草の暦屋敷は、明治政府に払い下げられることになった。その後取り壊される運命をたどることになる。この記録の中に幕末の頃の暦屋敷の絵図がある（9）。その絵図には、伝左衛門の息子伝之助の屋敷が、文台のすぐそばに描かれている。

もしかすると、伝左衛門が第六次測量から帰郷後、景保の元で働いていた時に、伝之助はこの地で生まれ、景保や忠誨たち家族に見守られながら育ったのかもしれない。時次郎の文字を名づけたのは、誰なのだろうか。至時と関係があるのだろうか。ただひとつわかることは、伝之助は、伝左衛門の遺志を継いで、測量に従事する役職につき、文台のすぐそばの屋敷で寝起きしていたことである。

現在、さまざまな経緯を経て、柴山伝左衛門の日記は、故郷江戸から遠く離れた愛媛県で保管されている。その日記を通して、伝左衛門が伝えたかったこと。それは、忠敬をはじめとして、隊員たち、そして、全国の人々の血と汗によって作成された日本全国実測図の真の目的とは、それは、次世代のためであったことではないだろうか。

【謝辞】

この原稿を作成するにあたって、安藤由起子氏、伊能陽子氏、鈴木純子氏、荻原哲夫氏、山本武雄氏、山本英夫氏をはじめとする方々の御協力を得ました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

表1 四国諸藩から伝左衛門と従者への贈り物

藩名	年月日	品名	数量	備考
徳島藩	文化5年 3月2日	鯉節	1箱(30本入り)	
		雁皮紙	半切500枚	
		多葉粉	3包	従者
	3月7日	うどん	1箱	
		寒制飴	1桶	
		半紙	20帖	
		小紋麻	3尺	従者
土佐藩	10月10日	京奥島	1反	
		煙草	5斤	
		鯉節	1箱(80本入り)	
宇和島藩	5月6日	小杉原紙	20束	
		鯉節	5本	従者
		綾布	2反	
	閏6月11日	雨料	金200疋	
		鳥目	300文	従者
		晒嶋	1反	
		錫	1連20枚	
吉田藩	閏6月26日	銀	1両	従者
		真綿	2包	
		賄代金	100疋	
		鳥目	300文	従者
大洲藩	7月26日	綾布	2反	
		中折紙	10束	
		鼻紙	(代銀1両)	従者
新谷藩	7月26日	蠟燭	80挺	
		鼻紙	(銀2両)	従者
松山藩	8月1日	晒布	2反	
		白木綿		従者
小松藩	8月26日	羽綿	2抱	
		中折紙	(代銀1朱)	従者
天領 (今治藩預)	9月6日	晒毛綿	2反	
		煙草	2斤	従者
天領 (松山藩預)	9月7日	綿	2抱	
		煙草	(代銀2両)	従者
多度津藩	9月11日	晒木綿	5反	
		鼻紙	(代銀2両)	従者
丸亀藩	9月18日	晒木綿	3反	
		鼻紙	(代金1分)	従者
高松藩	10月2日	小菊紙	20束	
		小菊(紙)	代金2分	従者
	10月10日	杉原(紙)	2束	
		刻煙草	1抱	従者



(やすなが じゅんこ)
愛媛県歴史文化博物館

西予市

註

(1)

安永純子「伊予における伊能測量について」

『伊能測量隊員旅中日記』を中心として

(2)

(愛媛県歴史文化博物館『研究紀要第九号』二〇〇四年)
大谷亮吉著『伊能忠敬』(岩波書店 一九一七年)

(3)

徳島県立博物館『伊能忠敬の描いた日本』(一九九九年) 他
山本武雄著「奥宮正樹日記」。東北大学付属図書館蔵「狩野文庫」内「奥宮正樹日記」。高知県から流出していたが、近年大久保朝子氏によって発見され、山本武雄氏により全文翻刻された。現在刊行準備中であるが、特別に本稿に一部抜粋させていただいた。

(4)

(3)と同じ。

(5)

山本武雄氏助言による。

(6)

愛媛大学付属図書館保管「堀内文庫」

(7)

香川県文書館保管「楊家文書」より「海岸測量日記」

(8)

伊能忠敬記念館蔵「伊能忠敬日記」(『伊能忠敬研究第三十六号』より「伊能忠敬日記(五)」にて紹介される。

(9)

国立公文書館「順立帳」より「浅草天文台取調 附同所御私下調」中に「浅草天文台絵図」。

なお、天文台については、佐藤利男「江戸浅草天文台の建物配置と設備(1)」(『天界九六三号』)を参考とした。

伊能図にみる朝鮮の山々 その二

― 伊能図の朝鮮の山々の同定と

伊能図の国際測量海図としての意義―

辻本 元博

「伊能中図」の朝鮮9山の山名の三類別による同定

伊能図の朝鮮の山々は韓国道路地図、朝鮮総督府臨時土地調査局五万分の一地形図、海図で照合すると3種に類別される。

A. 周辺の地名等と符号する山名の4山

B. 山名の文字は異なるが韓国語発音で符号する1山

C. 文字及び韓国語発音共全く符号しない4山。

第四四号18頁B図、19頁C図、本号39頁D図、42頁E図参照

A. 周辺の地名等と符号する山名の4山の同定

『山島方位記』記載の方位角から復元した方位線の集合する位置付近の標高の高い山を求め、周辺の地名を探す。

「知世浦山」方位線無し。巨済島東岸の知世浦から南へ約2.5kmの巨済島南部の巨済島最高峰加羅山581m。

「玉浦山」方位線有り。巨済島の長承浦市玉浦洞の南約5kmの玉女峰555m。

「加徳山」方位線有り。巨済島の東約10kmの加徳島最高峰烟台山459m。

「水宮山」方位線有り。釜山広城市海雲台区水宮 北東約3.6kmの葛山634m。葛山には古来葛山族の言い伝えがあり、水宮には漢城（現在のソウル）から見て慶尚道を左右に分け左方向（左道）の朝鮮王朝の

海軍基地「左水宮」が有った。対馬の観測地点からの『山島方位記』記載方位角による再現方位線の収斂位置と、観測地点からこれらの山頂への真方位線との間には、ほぼ同方向に共通する角度のズレが認められた。このズレを地磁気の永年変化による当時の対馬西岸から北端の観測地点での磁針偏角と判断した。（第四四号18頁B図参照）

B. 文字は異なるが韓国語の発音で符号する1山の同定

「九的山」方位線有り。「九徳山」565m 釜山広城市西区。山名は韓国語発音「クツツオクサン」から「クテキサン」に変化し「九的山」と書いたと考える。当時対馬藩の約400人程が駐在勤務した、現在の龍頭山公園から西一帯約十万余の対馬藩釜山倭館（大使館兼商社の様なもの）から約4.5km北西の山で、倭館関係者には比較的馴染みのある山であった。（9）九徳山は影島と韓国本土との間にある狭い水道の西の出入口の目標となる山でもある。伊能図の山名「九的山」は確かに九徳山であるが、再現方位線の収斂位置は次の通り九徳山と乗鶴山496mに分かれる。伊能図に掲載の方位線は伊奈崎亥二分半・棹崎亥初分半・佐須奈戌九分・厚寄戌六分半の4本であり、該当する『山島方位記』記載方位角からの再現方位線は唯一厚寄からのフテキ山のみ九徳山に到達し、伊奈崎からの九的・棹尾崎からの九的・佐須奈からのクテキ山の3本は九徳山の西南西約1.8kmの乗鶴山に到達する。

この他鰐浦からの火立限山全三・大浦山印からのクラキ山・九ノ崎からのフテキ山の3本は九徳山に到達し、鰐浦からの最初の測量時のフテキ山、同じく火立限山、小鳥帽子瀬からのフテキ山の3本が乗鶴山に到達する。収斂位置は山島方位記記載の合計10本の方位線の内4本が九徳山、6本が乗鶴山になる。伊能図では飽くまで九徳山として表現しようとしたが、その再現方位線は4本中3本迄が混同した乗鶴



山島方位記（伊能忠敬記念館蔵）

卷之五
山海方紀
新刊

十五

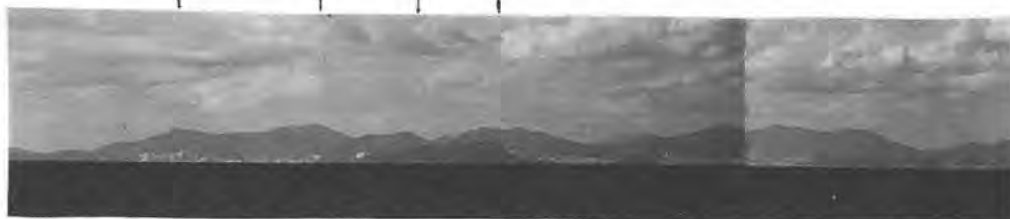
(官藏)

九的山 (伊能図記載分収斂位置)
乘鶴山 496 m

九的山(山名)
九德山 565 m

牧島(絵姿) 影島蓬萊山 395m

牧島(收斂位置)
影島太宗山(手前) 250m



対馬の最北端鰐浦から見える韓国・釜山市の連山

撮影 須川英之氏



伊能中図のカレイ・タルム山588m 大韓民国釜山直轄市機張郡

(対馬から眺めると右側の小ピークは主峰手前になり綺麗な三角の山になる)

展望図の下段右を参照 釜山直轄市機張日光海水浴場から撮影 辻本元博

D 义

山への方位角による方位線を掲載してしまったことを物語る。伊能図の絵姿は九徳山にも乗鶴山にも似ており特定化には至っていない。(従来の拙論は伊能図の九徳山の絵姿を九徳山の姿としたが、写真との詳細再照合では九徳山或いは乗鶴山のいずれとも決定性を欠く為、本論の同定地図、展望図、写真では山名のみ九徳山とし便宜上伊能図記載分の収斂位置は乗鶴山と説明することにした。但し実際に伊能図に描かれた九徳山の山頂(交会点)の位置は44頁を参照)

山島方位記の鰐浦には「水営山・フテキ山」という方位角もあるがこの方位角は前述の水営山(葦山)を通過するので記載時の混同と思われる。尚、火立隈山とはホタテクマヤマと読み、烽火台の山を指す対馬方言である。(10)また山島方位記では小鳥帽子瀬は帽の字が抜け、小鳥子瀬と書いている。

【参考文献】

- (9) 田代和生「倭館」鎖国時代の日本人町 文芸新書2002
(10) 藤井郷石「對馬の地名とその由来 下巻」杉屋書店1998

C. 文字及び韓国語発音共全く符号しない4山の同定

方位線の収斂或いは集合する位置に四四号20頁で記述の当時の対馬北部の磁針偏角約2.5度西偏の補正処理を加えて求めた位置に韓国の登山観光資料等から該当する山を探した。

「盗賊浦山」^{トウジツカイヤマ} 方位線有り。巨済島南部の望山^{マンサン}379m。望山から7km北東の港邑トジャンポ(トジャンケエ)の山の意。山島方位記には「盗賊浦山トウサンカイ」との振仮名付の表記のものが有り、トジャンケエと符号する。日本語読みみの「陶蔵」^{トウゾク} + 「浦」^{カイ} がおそらく「トウゾツカイ」と音便変化、これが「トウゾクカイ」になり本来の「陶蔵浦」とは全く意味の異なる異字語訳の「盗賊浦」となり、鰐浦での豊村の

虎松らの朝鮮地名説明者から説明を受けたものと考えられる。

「伊能図」には『山島方位記』に記載の山名が他の山名であっても望山に収斂する方位角のみを纏めて「盗賊浦山」と表記している。「山島方位記」に記載の御前寄(鷹崎)及びイナ寄(伊奈崎)からの「クツラカイ」と佐須奈からの「アリセン山」という名の方位角は望山に収斂するので「伊能図」では「盗賊浦山」の方位線になっている。「クツラカイ」は望山から12・5km北東の「舊助羅」クジョラに「浦カイ」を付けたと考えられるが、「アリセン」という地名が本来どこを指すのかは未だに不明のままである。逆に『山島方位記』に「盗賊浦山」と書かれた方位角でも望山に収斂しない方位角の方位線は伊能図では盗賊浦山の方位線から除外されている。「盗賊浦」≡陶蔵浦の位置からいえば、本来の陶蔵浦の山は望山より近い陶蔵浦の北西約3.7kmの加羅山(伊能図では知世浦山になっている)とするのが正しいといえる。鰐浦からの「盗賊浦山」の方位線の中には陶蔵浦を通過し、加羅山を通過する二例があり、このうち再測の方が前述の「盗賊浦山」の振仮名入りの表現であり、説明者の中には巨済島南部の加羅山を以って盗賊浦山トウサンカイ(陶蔵浦)の山であると、正確に同定した説明者がいたことを物語る。

「矢筈山」^{ヤハズヤマ}「仮二日矢筈山」^{カニニイワヤハズヤマ} 方位線無し。巨済島南部の老子山^{ノシヤサン}565mの山系の「ピョーヌルパウイ稲叢岩」の北西250m且つ老子山の南約650mの稜線上にあるピークになる。「仮に日矢筈山」という表現からも南側に小岩を伴う二股状の岩峰「ピョーヌルパウイ」の矢筈形(弓の弦を懸ける矢の末端の二股状の刻み)の姿特徴を目印にした付近の稜線上で対馬からの写真での見掛けの最高地点になる小ピークの仮称と考える。(但し、実際に稜線に登って現地確認をする必要がある)「矢筈

山」の方位線6本の内2本が上記ピークに収斂する。1本は南東約1kmの「マヌルパウイ大蒜岩」に突き当たるが、そこにも矢筈形に見える岩がある。残りの3本の内1本は「マヌルパウイ」の南側、2本は前述の「知世浦山(加羅山)」を混同して「矢筈山」としているが、ここにも矢筈形の地形がある。6本中4本の収斂不一致は観測位置の移動の為の混同かと推測する。絵姿は特定化には至っていない。(11)

【参考文献】(11)「夢と浪漫の島 巨濟」 巨濟市文化観光課

(韓国語) 掲載の巨濟十大名山登山コース老子山

「牧島」マキノシマと読む。『山島方位記』では「牧ノ嶋」「牧嶋」とも書く。方位線有り。『山島方位記』の中には棹尾崎で「マキシマ絶影嶋」佐須奈遠見番所脇で「絶景嶋ヲ云牧嶋」という表記もある。「景」は「影」の書き間違えで「絶影嶋」である。現在の釜山湾西岸の島「影島」(釜山広域市影島区)のことである。絵姿は高くてわかりやすく大きく目標になりやすい影島最高峰蓬萊山395m(『山島方位記』では「牧島高」「牧島本高」)であるが、伊能図記載分に該当する『山島方位記』記載方位角の再現方位線の収斂位置は釜山湾への航海の目標点に使い易い影島南東端の「太宗山」250mになる。大韓山岳会李泰洪氏の説明では影島は韓国では永く「絶影嶋」と呼ばれ、その由来は「馬体とその影をも絶ち切るほど早く駆ける」と言われた伝説の名馬を産した朝鮮王朝国営の牧場の島にある。朝鮮総督府臨時土地調査局五万分ノ一地形図1921年では牧嶋(絶影嶋)とある。

「カレイ山」方位線無し。タルム山588m。(釜山広域市機張郡日光面)伊能中図の姿は対馬北端鰐浦から北方向に眺めた端正な鋭峰タルム山の姿である。漢字山名も達陰山、月陰山等があり、旧版図では鷲峰と記載。由来は李泰洪氏によるとタル鷄、ウム鳴くで太古に海が溢

れたときに一羽残って鳴いた鷄が岩になったという伝説によるとのことであり、その他諸説が見られるが本論では省略する。現地東側山麓から見るタルム山の頂上は鶏冠を頂き南東の日本海に向かって鳴く鷄の頭部の様な姿をしているが、南側の日光海岸付近では秀麗な大小の双耳峰になり、遠く対馬から見ると端正な鋭峰になる。(写真・展望図参照)但し、伊能図に記載のカレイ山という山名の根拠は朝鮮の役時に巨濟島を単に「カライシム」(加羅の島)と呼んだ(12)様に単に加羅(朝鮮)の山の意であろうか、或いはタルム山南東の港邑鶴里ハンニの日本語音読みカクリの音便変化か北東の港邑月内ナルネの日本語音読みでガツナイの音便変化か、同様に月陰山によるものか結論に至っていない。大韓山岳会李泰洪氏には同定協力、対馬市の須川英之氏には写真提供を賜った。(D図、E図参照)(13 14 15)

【参考文献】山島方位記

(12) 池内宏「カトカイといふ地名について」東洋学報113

東京大学東洋文化研究所1911

(13) 日本国際地図学会平成17年度定期大会発表論文・資料集

研究発表 論文006『山島方位記』による19世紀初頭の磁針偏

角と伊能図の朝鮮の山々の解析』辻本元博同レジュメ・補足・資料・正誤表

(14) 京都大学大学院理学研究科附属地磁気世界資料解析センター

地磁気センターニュースNo.89 2005・1・24「伊能忠敬の

『山島方位記』から19世紀初頭の磁針偏角を割り出し活用する」

辻本元博 swdcdkugi.kyoto-u.ac.jp/wdc/news/0501.html

(15) 黒田慶一編「韓国の倭城と壬辰倭乱」第二部戦役論

辻本元博『伊能忠敬「山島方位記」に見る「朝鮮の役」』

「伊能図」朝鮮の山々解析から一岩田書院 2004

を書き写し、対馬藩は後日府中（厳原）到着時に白線の写しを一枚、更に追って二枚差出している）（17）

それより前の他の地図の記載内容は距離も方位も全く不正確で釜山倭館と加徳島程度の記載は有るものの朝鮮への渡口である佐須奈或いは鰐浦からの釜山倭館への如何にも頼りなげな推定の航路線のみが描かれている程度であった。（18）

伊能中図及び小図では現地測量をしていない朝鮮の海岸線は一切描かれておらず朝鮮の山々は一見雲が霞に亡羊と浮かぶ模絵風の装飾でもあるかの様に描かれている。（但し、九州周辺が測量未了時点の文化6年に仮に作成された伊能図日本輿地図藁には既成の地図を参考にした朝鮮の海岸線が描かれている）（19）

B. 伊能図の国際海図としての試行要素

① 伝統的な山当て式の航海図の表現を踏襲

対馬海峡西水道の中は対馬鰐浦・韓国影島太宗台間約49kmから対馬伊奈崎・韓国巨濟島南端多浦付近の間の約61km程度である。一四二〇年の日本回礼使宋希環、一七一九年の朝鮮通信使申維翰も早朝出帆夕刻到着の日中航海であった。（20）²¹ 激しい潮流の荒海も順風を得ると周囲の景観から方位を判断する山当て式の帆走航海で乗り切ることができた。

伊能小図、中図には朝鮮への航海上の目標となる朝鮮の主要な山々がその姿、特徴を拡大して描かれている。山名は対馬の地元の朝鮮地理精通者の経験知識に基づき島の名称や周辺の港邑を指す山名として掲載されている。伊能小図、中図の朝鮮の山々は従来からの沿岸航海の実用に馴染んだ山の姿や形で現在位置や方位を知る山当て式の航海図の表現形式を手堅く踏襲しているといえる。

② 画期的に正確な磁針方位角と方位線の距離

当時の朝鮮渡り口（朝鮮への開港地）鰐浦・佐須奈を含み対馬の北端と北西部の主要な浦や岬等の合計7箇所から航海の目印となる朝鮮の山々（小図6山、中図9山）の姿、山名と各山への合計25本の方位線が磁針方位角入りで描かれている。

江戸時代の日本の航海用の羅針盤の目盛りはせいぜい十二支単位（30度）程度迄のレベルであるのに対して伊能小図、中図記載の朝鮮への方位角の表現は伊能図の国内の島嶼間の方位角と同一精度の1.5度であり当時としては正に画期的な精度といえる。朝鮮の山々への方位線及び方位角の主目的は対馬の海岸線の形を正確にすることもさることながら対馬海峡西水道の概略幅と朝鮮南岸の港邑への目印になる山への方位角と距離を兼ねて表したと考えられる。

描かれた朝鮮の山々の山麓の海岸から180度逆の角度を取れば観測地点の対馬の港や岬に到達することになり、対馬或いは朝鮮の双方から対岸の思わぬところへ到達しても対応できることになる。

③ 対馬海峡西水道（朝鮮海峡）の最初の国際測量海図

朝鮮の山々の掲載範囲は既述の通り、対馬から見える南西から北東に慶尚南道南西部の巨濟島・加徳島・釜山・水營・東海岸の日光方面迄の約90km近くに亘っており、方位線は先ず対馬海峡西水道全体の海の概略幅を広範囲に的確に表現しようとしたといえる。

イ、第四四号17頁④で記述の様に、伊能図記載の方位角の通りに方位線が再現されているとすれば対馬海峡西水道の幅は現実よりかなり狭く描かれてしまうことになり、筆者も伊能図の対馬海峡西水道の幅は実際より狭く描かれているものと考え、対馬から朝鮮の山々への方位線の寸法や方位線の収斂位置を確認するには東京国立博物館蔵の伊能中図或いは神戸市立博物館蔵伊能小図等の実物を検証するしかなく、これは叶わぬことと諦めていた。

しかし、後述の方法により解析することでこの考え方は妥当では無

く訂正を要することが判明した。

口、以下の解析により伊能図の対馬海峡西水道の幅はかなり正確に把握され表現されていたという事実が今回判明するに至った。伊能中図及び海上保安庁海図の間で縮尺を換算することで伊能図の朝鮮の山々への方位線収斂位置の海図上での位置確認を試みた。(22 23)

武揚堂刊「伊能図」の中図に掲載の対馬の南端北端間の長さを海上保安庁海図と同じ縮尺1/250000に縮小して海図の上に重ね合わせてみたところ方位線の無い3山も含め9山の内、水宮山、九的山を除く山の絵の山頂の位置(方位線の交会点)は前述の韓国の各山の位置の近くのややわずかに右へ振った位置になった。右ということは東ということになり対馬の観測点での西偏の結果と考えられ、左へ振ると真方位になる。(武揚堂刊「伊能図」の40頁に記載伊能中図の縮尺は1/216000)

伊能中図の朝鮮の山々の山頂の復元位置

- ①盗賊浦山 巨済島の望山の北北東約1000m付近。
- ②知世浦山 巨済島の伽羅山の南東約1200m付近。
- ③矢筈山 巨済島の老子山系のピョヌルパウイの北西250mのピークの位置から約3100m東南東になり、鶴洞海水浴場の約1000m沖付近。

④玉浦山 巨済島の玉女峰の東約2600m付近。

⑤加徳山 加徳島の烟台山の北西約2200m。

⑥九的山 九徳山の北西約11200m釜山廣域市江西区と金海市との境界近くの西洛東江の中沙島を挟んで東側の北亭里付近になる。九的山は乗鶴山或いは九徳山から約11km余も奥の位置となった。山島方位記からの方位線の復元作業の過程で生じた事と考える。

筆者の解析では九的山は乗鶴山・九徳山の二山にわたっており、再

現方位線の描き方によつては、収斂位置はかなり遠方に伸びやすい。

鰐浦からは更に右(東)の山間に僅かに見える金海市の神魚山の山頂は別としてほぼ該当する方角に見えるのは乗鶴山・九徳山である。

完成された地図、海図から逆算して写真等で解析する筆者に対して、未知の世界の中で例えば片側測量でもなんとか測量して地図を作成しようとする伊能の場合は全く参考とすべきものも無く、兩岸測量等による見直しの機会も無かったことが大きな原因と考える。

⑦牧嶋 影島南端の太宗山の南東約2500m(約1800m沖合)

⑧水宮山 蓑山の北北西約2100m付近。

⑨カレイ山 タルム山の北東約3200m付近

C. 対馬海峡西水道(朝鮮海峡)及び対馬海峡東水道の全容を表す

国際測量海図としての伊能図

これらの結果を総合すると伊能図の方位線は『山島方位記』の方位角を元に描いて収斂位置を求め、記載の方位角は国内も同様に詳細を省略した表記にしたと言える。山々は朝鮮の山並みの位置に描かれており、対馬の海岸から眺めると遥かに水平方向に重なり合い横一列にしか見えない朝鮮の連山の中から航海の目印になりやすい主な山を選び、港邑等の目印となる山名を書き、各山の頂上の位置を対馬からの複数の磁針方位線の交会位置に描くことで初めて山の位置を経緯度上の位置に描き個々の山の遠近の距離関係が表現された。長い海峡全域の幅と対馬から朝鮮南岸の各港付近への距離と方位角が伊能図により初めて概ね正確に表現された。言い換えれば日本海の西端の出入り口対馬海峡西水道及び対馬海峡東水道の全容が伊能図により初めて明らかになったといえる。(小図に付いては検証の必要がある)

D. 近代的海図との比較と当時の国際海図としての意義とその後

確かに近代の海図と比較すれば対岸の海岸線は無く水深や海流の強さや磁針偏差の記載も無いが、伊能図は当時の対馬海峡西水道と対馬海峡東水道の画期的な精度の海図を兼ねた地図といえる。(磁針偏差に付いては当初確認すべき問題意識は持ちながらも江戸深川では殆ど偏差が無く全国的にも当時の磁針偏差の値が小さかった為、考慮されず磁針偏差の記載は無い)

伊能図は日本の海防や経済及び行政の自立に比類の無い多大な寄与を為した地図であるが、日朝間に付いては片側測量ながら隣国同士の人々の不便を解消し、具体的な相互利益や航海の安全をもたらす当時としては科学的且つ画期的に正確な実用国際海図としての試みをも兼ねて目指した地図であった。伊能図及び『山島方位記』は将来の朝鮮側の海岸線の測量完成時を以って海峡兩岸の測量図完成へと繋ぐ第一歩の成果であったといえよう。

伊能測量隊の対馬測量実施は長く友好蜜月の関係を象徴した朝鮮通信使のそれまでの江戸に代わる文化8年(1811)の対馬府中(厳原)における易地聘礼の二年後のことであった。(24)

嘗て元禄16年(1703)の朝鮮からの訳官使一行の船が対馬を目前に遭難し、同行の対馬藩士も含め112名全員が死亡した対馬北端鰐浦の北方3.8kmにせり出した南風波瀬の岩礁地帯の測量も地元民の卓越した支援により完遂され伊能図に正確に表された。(25 26)

しかし、1607年の再開以来12回も続けられた交隣誠信外交の朝鮮通信使も上記府中(厳原)易地聘礼を最後に途絶えた。(27)

伊能図は完成後約60年以上も幕府に秘蔵され、両国共に西洋帝国主義勢力の巨大な圧力で揺れ動き、伊能図が一般に公開され、広く使用され始めた19世紀後半には両国の友好関係が著しく変化したことは

実に残念の極みといえる。

〔参考文献〕

- (16) 江戸開府400年記念特別展
「伊能忠敬と日本図」東京国立博物館2003 P107
- (17) 入江正利「伊能忠敬長崎県測量・日記編」
- (18) 古地図コレクション神戸市立博物館
- (財) 神戸市体育協会2000 P303 P37
- (19) 古地図コレクション神戸市立博物館
- (財) 神戸市体育協会2000 P40
- (20) 村井章介校注 宋希環『老松堂日本行録』岩波書店 1987
- (21) 姜在彦訳注 申維翰『海游録 朝鮮通信使の日本紀行』
平凡社 東洋文庫 1974
- (22) 伊能図 武揚堂2002 P174、P194、P195
- (23) 海上保安庁海図
第304号釜山港至巨文島 1999 1/250000
- (24) 入江正利「伊能忠敬長崎県測量・日記編」
- (25) 永留久恵「対馬歴史と観光」1994 P348 P349
- (26) 入江正利「伊能忠敬長崎県測量・日記編」
- (27) 斎藤弘征「宗家文庫史料にみる安政朝鮮通信使対馬易地
聘礼中止の周辺」対馬歴史民俗資料館報二四 2002
(以下次号)

本研究は平成18年度日本学術振興会研究補助金(奨励研究)の一部を使用しています。

(つじもと もとひろ・福助(株)OB、日本国際地図学会会員)

越後国岩船郡内沿海測量について(三)

「測量日記」と「与惣左衛門覚書」より

風間 広吉

27

覚

江戸高橋作左衛門様御役所へ御用状忝封当屋敷便ニ無相違為差登可申、役所元江差出申候、依之請取書奉指上候処、如斯御座候 已上

戊九月廿一日

岩船町年寄

与惣左衛門

伊能勘解由様

御侍中

右者此方様より御飛脚序ニ江戸表へ相届可被下旨、御役所へ申演、右書状可被指上、尤右之趣は兼而従公儀御達も有之義、御出役橋本喜惣太殿へも得御意置候間、是へも可被申演様被仰聞候ニ付、則御案文之通、請取書相認指上申候而、橋本様へ右之段申上候へば、此方より役所へ可差出被御申聞、右御状御請取置被成候

一、九月廿一日夜当町御泊之段、先達而御触書之通りニ付、於拙宅ニ御宿仕候処御出役郡方御見習

橋本喜惣太様 御供人老

御用人町御組衆老

柏尾村御泊より当町江御立越候ニ付、大町茂左衛門方へ御宿申付候、御着後、裏附上下着用ニ而御見舞候処、勘ケ由様袴御着用ニ而御対面被成候、暫御對話ニ而御引取翌朝御出立前猶又御見舞被成候而、御先へ塩谷町へ御立越被成候、且又当御番所幾右衛門殿旅装束ニ而瀬波道明神山下へ御出迎、御出立之節ハ御宿前ニ而人馬世話被致、新町端ニ而御暇被申上、引取被成候

一、御着後、庭之内へ天文測量之器を据込被置、六ツ過より四ツ過迄南北之星を御測リ被成候由、初而致拝見候事、右一向勘弁も無御座候



9月21日恒星の高度を測った伴田家の前庭。中象限儀を据えてこの地が北緯38度11分と推歩(計算)された。

前段は出役郡方御見習橋本喜惣太と忠敬の対面、ならびに、岩船御番所幾右衛門の明神山下での出迎と翌朝の暇乞にふれている。なお「測量日記」では喜惣太は村上藩の勘定方としてある。

後段は、測量隊が伴田家の庭に、天文測量の器具すなわち象限儀を据えつけて、六ッ過ぎ（午後六時）から四ッ過ぎ（午後十時）まで恒星の観測をされたこと。何分にもはじめて見る天測である。邪魔にならぬようにして見学したが、何のお咎もなく快くお許しになられたことを恐縮している態である。（演は述と同義）

28

九月廿一日夕御膳

よねつミ入

御平 甘鯛背切 御汁

あられ冬瓜

葛しやうが

岩たけ

なら漬瓜

手塩皿

茄子塩漬

あらへき身

御壺 しらがこんにやく

御飯

いそがき

夜中測量御手間取被遊、四ッ過ニ相成候ニ付、

取あへすそうめん御夜食ニ差上申候

二十一日夕食の献立である。さすが岩船、海の幸に事欠かない。お平には、蒸甘鯛の背切に葛しやうがを添えた。お壺には、あらへのぎ身にしらがこんにやくと磯がき。汁はつみれにあられ冬瓜に岩たけ。一汁一菜にて馳走がましきことを遠慮されていた客人に、町中で名うての料理人による馳走である。十時すぎまでかかった天測に、心づく

しのそうめんを差し上げている。忠敬を除いては若者である。そうめんをすする姿まで目に浮ぶ。翌二十二日朝食の献立は

二十二日朝

きだけ

甘ミそ

御皿

味噌漬小鯛 御汁 ゆり

大こんあさ漬

手塩

ミそ漬瓜

きんこ糸

金糸たま子

御平

志きしかま鉾 御飯

やワらかふ

舞たけ

きだけ、舞たけ、ゆりと山の幸も差し上げた。やわらかふとは、岩船特産のまんじゅうぶであろうか。

29

廿一日八ッ過御着、翌朝明七ッ半ニ御出立被

成候、随分御機嫌能御懇意之御挨拶ニ而、御

下ともニ御丁寧ニ御座候而、一同大悦いたし候

翌二十二日は早朝の出発である。忠敬は随分と機嫌よく、ご丁寧なご挨拶をなされ、一行も同様であった。年寄与惣左衛門はじめ関係者一同大よろこびであった。

つぎに、接待やら出迎について詳細な記録をとどめている。

一、料理人 岸見寺町新左衛門内

七之助

上野山藤四郎内

手附

藤五郎

大町久四郎事

栄助

同町

又八

水汲老人・小使老人

女奉仕式人

一、御給仕人 ぢんや彦太郎内

駒之助

越前屋元兵衛内

幸松

いつミ屋文蔵内

勇治郎

一、御上湯殿方

上町七兵衛内

常吉

人足老人

一、御下湯殿方

上町 庄兵衛

人足老人

一、掃除方

人足五人つゝ両日

一、詰人足

四人 不寝番

一、世話煎

大組頭

弥平

一、御通行道拵人足拾人

田方より指出ス

但瀬波道五人

牢番 組頭平 吉

塩谷道五人 同断 同 与右衛門

右者十八日ニ掃除いたし候、瀬波道拵残り候
二付、翌十九日七湊より三人為指出繕申候、御
通行前夜大浪ニ而、鍬形不残いたし候故御通
り前、人足三人差出取繕掃除いたし候

一、廿一日当町江御引移之節、御出迎として瀬
波境迄罷出候

年寄 与惣左衛門

立附、道中羽織

帯刀にて

大組頭 惣三郎

与惣兵衛

彦兵衛

忠蔵

各立附、道中

羽織脇指にて

右四人江、供人式人

瀬波御昼休迄道案内組頭

利八

仁太夫

供人足老人

右与頭も引、羽織

無刀

一、間縄引手伝人足七人

右者御出迎之節、瀬波境迄致同道

大組頭惣三郎、組頭仁太夫致御案内、從瀬波

新町端迄、間数御改志るし杭御立置、夫より横新町弥五左衛門小路より御上り、上町又三郎門迄百数間御改被成候

一、大町口張番

組頭 権四郎
組頭 与五衛門

右者、養仙見世ニ番行燈ともし候而人足式人づつ召連、暮六ツより明六ツ迄夜中替りニ相勤申候、組頭 立附火消羽織、人足股引ニ而

一、新町口張番

組頭 茂平次
治郎助

右同断ニ而ふろや十兵衛方ニ相詰申候

一、火廻り役

大組頭 伊右衛門
病氣ニ付代 元治郎

但人足式人召連、火消羽織、立附、脇指ニ而御着後、昼夜三度町中相廻り申候、且人足ハ年寄元駈付人足之内、股引、草鞋にて相勸候
一、御宿玄関江下ケ提灯
一、人足四拾八人

此割

上町八人 大町二人

下町九人

岸見寺町拾人 下浜町三人

上浜町四人

新町拾式人

此訳

七人 廿一日 瀬波境へ同道

七人 廿二日 塩谷境迄同道

八人 御駕籠

式人 御両掛

拾六人 御長持

八人 小もの持

一、馬五匹 添馬出付

内三疋、七湊出作、式匹八日市出作

此訳 式疋御手配ニ而、御昼休迄御先江

御出ヒ成候、御兩人様御乗馬

式匹 阿け荷附馬

老疋

御出役橋本様塩谷迄御乗馬

一、荷物並人馬牢番組頭 直右衛門

弥惣平衛

一、翌廿二日朝御出立之節、為御案内大与頭五

人、内式人は昨日測量留り志るし杭塩谷境

迄、手伝人足七人同道ニ而測量之方江御案内

仕候

測量御案内 大与頭 惣三郎

忠 藏

御駕籠先案内 同 断 与惣兵衛

彦兵衛

御駕籠脇御案内 年寄 与惣左衛門

年寄代 完 平

大組頭 弥 平

右兩人は測量拜見として罷出候

ご通行道こしらえ人夫十人が目につく。北は瀬波へ五人、南は塩谷方面へ五人、距離測量をしやすいように掃除までしている。大浪に洗われたあとのつくろいなど、念のいった準備である。出迎えのいでた

ちは、年寄与惣左衛門はたっつけ袴に道中羽織、そして帯刀。大組頭四名は脇指である。与頭はくみかしらと読む。

つぎに目につくのは間縄引き手伝人夫七名。第三次測量からは、距離測量は鉄くさりを多用している。チェーン測量である。第一次測量は歩測、第二次測量は藤なわなどによったが、精度向上のため、忠敬のアイデアによつて鉄くさりを用いることになった。特筆すべきことである。内法一尺で両端に環をつくつてつなぎ、一間ごとにするしをつけたもので長さは一〇間であつた。有名な量程車も持参したらしいが殊んど用いなかったという。誤差が大きく実用性に乏しかったためである。法線は新町端から横新町、弥五左衛門小路よりのぼつて上町又三郎門までを実測したことを記している。

翌二十二日には測量隊員二名が、手伝人夫七名と前日の最終測点より塩谷境迄測量をつづけた。

31

御尋二付答上候事

- 一、当町家数七百九拾軒、内拾七軒寺院、貳軒杜家
- 一、栗嶋江海上九里、家数百九軒、内貳軒寺、壹軒杜家
- 一、朝日山、月山、飯豊山、大利峠、仁王寺山
- 驚々巢山、光兔山、蔵王山、中条山、右之山
- 々御尋二付、夫々ニ御答申上候
- 一、米沢江廿五里、会津へ三拾五里、新発田へ九里、新潟へ十五里余
- 一、岩船沓里塩谷廿丁餘あら川幅二丁程、桃崎三十丁程、荒井浜廿六丁、笹口十六丁、中村三十丁、村松沓里川あり幅三十間程、藤塚沓里除、次第浜十八丁、網代十六丁斗、亀塚沓

里、太郎太夫沓里程、嶋見四十丁余太夫浜廿丁餘、松ヶ崎三里川二筋有、新潟

但松ヶ崎より海際通り川渡、松崎、榎嶋
右之分里数不知

二十一日のことであろう。与惣左衛門にいろいろと下問されている。岩船町全町の家数。岩船より見通しできる山岳名。これは日中、前方交会法により、図上に正確にプロットするための予備知識としたものであろう。三角測量ではない。なお夜間の天測は象限儀による恒星の高度測定でその他の緯度を求めるもので、この第三次測量は、子午線一度が二八・二里と当時としては驚くべき精度で確定した忠敬のもつとも得意絶頂の測量であつた。また米沢方面、新潟方面への村々の距離も聞き質しておられる。ひとつには予定通りの日程で測量がなし得るかの確証を得るためのものであろう。

32

- 一、伊能様ニは爰元より御駕籠ニ而本通御通行二付、拙者御案内いたし、塩谷境迄参候処、御下乗ヒ成、御町寧に御会釈被成下候、右場所ニ而御暇乞申上、大与頭中一同罷帰申候

二十二日朝、忠敬は年寄伴田家より駕籠に乗り、塩谷へ向け出発された。ご案内は年寄与惣左衛門である。一宿の忠敬ではあつた。懇ろな待遇に、塩谷町境に達するや駕籠よりおりられて、ご丁寧な会釈をされて、以下町の大組頭ともどもお暇乞をし、これからの長の道中の安泰を祈つてお別れしたのであつた。

33

奥羽越の海浜を測量はかるへきよし、公命を奉

りて、天文学生伊能勘解由の主、壬戌の秋九月廿一日茅庵に駕を駐めて庭上に天文測量の器を陳設け、南天に星斗の爛かならんことを待ち玉ふけるに、浮雲の来往して御心を勞し玉ひけれハ

伯 寛

寿きの星を南の空清く雲吹きさらへ秋の小夜風

戌のおへりに斗数越量りきはめ玉ふのよし

本朝図上に石船の郷名の永く伝らんことをおもひて爛かに影見る星ともろ共にこの郷乃名も世々に曇らし

享和二年壬戌秋九月

六月十一日(旧七月一〇日)、村上藩から海辺浦々の測量の達しに接して以来三月、無事に忠敬はじめ測量隊をお見送りした年寄伴田与惣左衛門の感慨は何如ばかりであつたらうか。与惣左衛門は知識人であり文化人であつた。伯寛と号し和歌の道にも造詣が深かつた。何よりも忠敬の沿海測量の意義にも通じていたとみられる。

二十一日の夜は、あいにくの曇天で、雲の去未がはげしかった。雲は恒星をかくす。気が気でなかった。それ以上に忠敬らも雲の晴れ間を待っていた。その御心を煩し給うた様子を、伯寛は

寿きの星を南の空清く雲吹きさらへ秋の小夜風

と、思いのたけを三十一文字に詠みこんだ。

戌のおわり、すなわち午後一〇時近くになり、ようやく雲間に星を捉えることができた。「測量日記」にも「この日度々雨、夜亦曇、雲間

に少し測る」とある。前掲の和歌に「南の空清く」とあり、北は暗かつたのであろう。新暦一〇月一七日同時刻ころ、南天にみられる一二等星は地平線より六〇度の高度にベガス座の二等星。

幸いなことに、測量中、各地で観測した恒星の視高度を江戸黒江町で観測したものと同対照して、その地の緯度を算定した北極高度測量記が数十冊のうちただ一冊、しかも享和二年のそれが伊能忠敬記念館に遺されていた。岩船における観測恒星は十五星で、天津四、瓠瓜一、女宿一、虚宿一、危宿一、危宿二、墳墓二、墳墓四、墳墓一、墳墓三、離宮四、離宮一、離宮二、羽林軍二六、室宿一と列記されている。上欄に恒星名が、中欄は中象限儀による視高度を、下欄には江戸黒江町での視高度との差。そして左にはこれらの数値から算定された岩船町伴田家の測地点の緯度三八度一分〇〇が朱書されている。十五星はいまのベガスとみずがめ座である。

かがやかに影見る星ともろともにこの郷の名も世々に曇らじ

ようやく斗数量りきわめたということで、伯寛の歎きははた目でも大きなものであつた。いよいよ日本の地図上に正確な岩船の位置がプロットされるのだ。わが岩船の町の名は永遠に伝えられてゆく。伯寛、生涯のなかでもそれは大きな喜びであつたに違いない。

34

【別紙その一】

覚

一、御長持

老棹

一、あけ荷

四つ

一、車

三つ

但産包

一、長竹	壺把
但不等口台付	
一、磁石台	式本
一、糸縄	壺巻
一、桐油包	式つ
一、むしろ包	壺つ
一、すき鍬	壺把
一、小椅子	式枚
一、産包	式つ
一、金くさり	壺丸
一、中打下駄	四足
但こうかけ	壺足
一、持げんき	壺つ
一、御用口た	壺つ
外二	
傘	壺本
【裏面】	
一、御桐油	三ツ
内口	壺ツ
一、磁石台	式本
一、糸縄	壺巻
一、鉄くさり	壺丸
一、札付竹	三本
一、かし棒	壺本

長持一棹、公用長持である。あけ荷四つは天測の象限儀や方位盤、

水盛台、垂揺球儀（振子時計）：などを収納したものか。車とは有名な量程車であろう。磁石台は小方位盤（杖先方位盤・わんか羅鍼ともいう）の脚部であろうか。糸縄は藤なわと考えられる。鉄くさりよりも使い勝手よく伸縮も割合少なかったという。二隊に分れることもある測量行に一巻とは解せない。金くさりあるいは鉄くさがりがチェーンであろう。第三次測量より忠敬の発案で使われたものである。持げんきは不明である。御用口たは幕府御用の測量のシンボルであった旗であろう。札つき竹は間棹であろうか。かし棒はぼん天と称するポールであろう。不確かなものに推量はつしまなければならぬ。

35 【別紙その二】

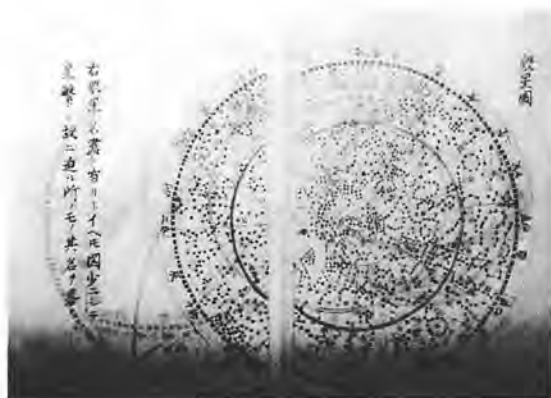
覚

- 伊能勘解由様御通行二付
- 一、御勘定御奉行様御連印
- 御触書御本書 式通千住宿
- 封印之儘
- 一、御請印形帳 壺冊
- 一、御伝馬役馬込平八郎添書
- 式通
- 一、千住宿問屋左衛門殿
- 添書式通
- 一、奥州津輕三馬屋庄屋
- 忠兵衛殿添書壺通
- 一、宿々村々送書 一卷
- 右之通槌ニ受取申候 已上
- 塩谷町 ㊤
- 戌九月十八日

已下刻
岩船町へ

さきの塩谷町への継送文書の受領証である。印は奈良橋とある。

(つづく)



もともと測量に関心の深い家柄であったが、七郎右衛門が使用した天文の図書。幼時に忠敬に接して触発されたことも考えられる。(伴田家所蔵)

(かざま ひろきち・
元新潟県立桜ヶ丘
高等学校教諭)

話題散歩

「伊能忠敬研究の回顧と省察」 室賀信夫著 海野一隆補

洋学13 洋学史学会研究年報2004から

忠敬研究の書といえば大谷亮吉著「伊能忠敬」が特に有名。ほかに佐野常民、保柳睦美、長岡半太郎など著名である。この論考は昭和40年5月に「伊能忠敬測地遺功表」が芝公園に再建された際、それを記念して論文集が企画されたが刊行されなく、ながらく未発表だったもの。執筆時期は同年9月頃という。

内容は①佐野常民と忠敬の顕彰②忠敬の偉人化③学士院の忠敬測地事蹟調査④大谷亮吉の『伊能忠敬』⑤忠敬研究の動向と偉人伝の復活⑥戦後の新風。

明治以来の忠敬研究は教育的ないし偉人顕彰伝記とその業績の科学史的研究という二つの方向で進められてきた。地方史料の検討から忠敬の事蹟に新しい照明は示唆的。忠敬の業績の検討は専門的知識をもつ科学者たちにいつそうの研究の深化を期待。それと並行して単なる科学史の分野にとどまらず、より包括的な歴史的理解のもとに新しい忠敬研究が進められることが望まれると説いている。

なお、先頃刊行された「伊能家伝存・忠敬関係文書目録」によれば地学協会設置伊能忠敬記念碑関係資料として次の五点がある。

- 1 贈正四位伊能忠敬先生測地遺功表去帋式 明治22年12月
- 2 第一回世話人会資料 記念碑に関する年表ほか 昭和36年4月
- 3 記念碑再建資料 世話人名簿ほか
- 4 「伊能忠敬世界に誇る近代日本地図創成の父」東京地理協会「測地遺功表再建主旨」東京地学協会会長細川護立
- 5 付パンフレット 昭和40年5月

(福田弘行)

続々 三浦半島に忠敬の足跡を歩く

白根 貞夫

11月18日(金)晴 自宅を出て衣笠駅からバスに乗り、葉山大道から歩いて、長者ヶ崎に向った。10時43分着。直ちに本日の足跡辿りにとりかかった。出来れば本日中に小坪まで完歩したいとの希望を抱いて始めた。

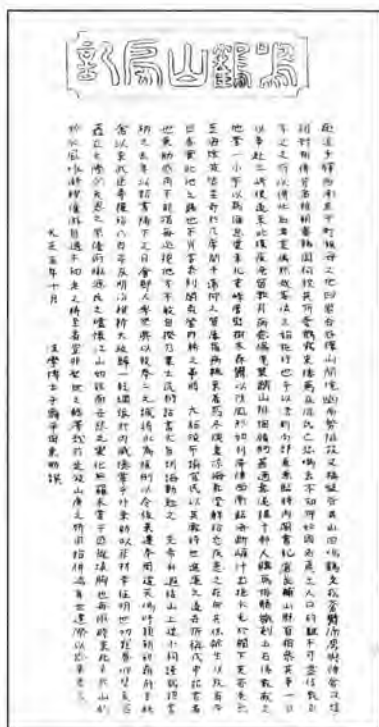
長者ヶ崎南側の磯伝いはどうかと再検討したが駄目。直ちに北側の方へ道路から下りてゆき、開始した。なるべく先端迄行きたいのだが、あまり先の方へは進めず残念。10時53分には引き返し、御用邸の方に進む。御用邸の所は駄目かと思っていたら、海岸は誰でも歩けるようになっていた。但し県警察の見張小屋があつた。御用邸そのものの警護は皇宮警察、それ以外の所は県警察の担当だった。途中で、県警察官に会って聞いたら、このように教えてくれた。2km位歩いた所で、磯が切れ、テトラポットの塊に登り丘の国道へ出る。大変危険だった。

三ツ下海岸バス停の所である。その先は真名瀬港南で護岸がきちんと整備された人工海岸、昔は大きな岩礁で、今の道路が波打ち際だったであろうと推察できる。やがて真名瀬港を通過(11時49分)、再び磯歩きに移る。森戸神社の千貫松まで(12時02分)歩けた。その先は行けず、神社境内に登り道路を少し歩き、すぐ砂浜に出た。(12時15分)

浜を約1km歩くと、葉山マリーナとなり、浜を歩けない。丘の道路をゆき、^{あぶすり}鎧摺山塊の西側を経て、日影茶屋(大正五年、大杉栄が神近市子に刺された所)の北西部に出た。(12時40分)

これから逗子に入る。正面に平田東助伯(明治・大正の政治家、内大臣・内務大臣・農商務大臣等歴任)の鳴鶴山がある。筆者の知人宅に寄り、のち平田伯別荘にある石碑文を写した。(12時50分から14時15分まで)

筆者、碑文を写すのは大好き、特に漢文のがよい。何となれば、文が簡明で、短いながら表現が豊かである。普通八割程度はその場で解読できるので、英文等よりは遥かによく判る。主要点を要約すると次のようになる。



この地を鳴鶴山という。昔源頼朝が鶴岡八幡宮に参詣し、放鶴を行った。のち源氏が亡びると、鶴は鳴いて飛び去っていった。ここがその地であると、土着の人は口伝えにしている。幸いこの地を手に入れたのは偶然ばかりとはいえないであろう。即ち明治31年、山縣内閣で法制局長官に任ぜられたが、三崎に用があり、途中で病を得て、この地に滞在した。土地が気に入ったので、病が癒えてから購入した。冬は暖かく、夏は涼しく、富士を眺め伊豆の山海がけふ



第3図 真名瀬から小坪まで(縮尺 1:30,000)

る。自分は蒲柳の質なので屢々この地で憩いをする。今、余生を楽しむことができるのは、この地のお陰なのである。また日露戦争後、戦勝により個人主義・快樂主義・官能主義を生み、帝は憂え、戊申詔書が明治41年に発布された。自分は内務官僚として各地へ出張しこの詔書の所以を語り傳えた。天皇崩御の後はこの詔書を写して、その主旨に副い奉るよう誠を致し、天恩の弥栄を願っている。

この碑は、大正五年十月の銘が入っているが、このあと、9年程長命を保ち14年4月に永眠となりました（享年77）。

この鳴鶴山は海に面していたが、今は逗子市の浄水管理センターが占拠しており、道もないので、国道を行くと、左手に「鰐摺の不整合（地層）」の説明板がある。これを読み、昔の海岸線を想像し、先へ進むと十字路となる。（14時25分）田越川の橋を渡ると、逗子海岸で、夏なら海水浴の場所。歩きながら昔の中学校の国語読本「相模灘の落日」を思い出した。有名な徳富蘆花の文である。

相模灘の落日

秋冬風全く凜ぎ、天に一片の雲なき夕、立つて伊豆の山に落つる日を望むに、世に斯る平和のまた多かる可しと思はれず。
日の山に落ちかかりてより、其全く沈み終るまで三分時を要す。
初め日の西に傾くや、富士を初め相豆の連山、煙の如く薄し。日は所謂白日、白光爛々として眩しきに、山も眼も細ふせるにや。
日更に傾くや、富士を初め相豆の連山次第に紫になるなり。
日更に傾くや、富士を初め相豆の連山紫の肌に金煙を帯ぶ。

富士を始め相豆の山々が煙るが如く、日は沈む。何とも静かな美しき至福の一時を迎えた。當時も今も悠久として変らず天地は過ぎゆく。歩きながら、そんなゆとりはなかったが、自宅に戻り本を開いて、この浜をこのように味わえる人は幸福だなと感じた。

つづいて、私立逗子開成校の前を通った。この学校は、湘南・鎌倉以南の地における最初の中学校で、明治30年から始まり、36年に正式に逗子開成中学校となった。筆者は横須賀中学校の出身であるが、創立は開成の方が古い。神奈川県下では県立二中（横浜）が明治33年、二中（小田原）34年、三中（厚木）35年、四中（横須賀）41年の創立で開成中の古さ、優秀さがお判りであろう。

悲しい事件は、明治43年1月23日（日）に発生した。関係する諸記録を読むと次のようであり、記念碑が学校の正門脇にある。

当日14時頃に、一人の青年木下三郎が和服姿で二本のオールを抱くようにして七里ヶ浜で小坪の漁船に助けられた。小坪に戻り直ちに人工呼吸など処置が施されたが、効なく絶命した。泳ぎの名人だったと言われ、ではボートを出して遭難したのではないかと大騒ぎになり、全校あげて捜索活動となった。

事の起こりは、その日鳥打ちをして、その獲物を中心に宴会でも催そうと、五年生の徳田勝治の発案になるものだったらしい。徳田家の和舟から、開成中のボート（註参照）へと鞍がえして、学校関係者の許可をとらずに漕ぎ出した。当日は日曜で、開成中の一教師が青森の方へ転勤になると、11時過ぎ多くの同僚教師が逗子駅に見送りに出かけた。ボート置場の鰐摺に番人も居なかったようで、これ幸いと、生徒らが喜んで、逗子から江ノ島目指して進んだ。最初は15人乗込んだが、沈みかけると、3人を降ろした。12人残ったが、ボートの定

員は7人であった。漕ぎ始めた最初は意気揚々であったが、冬の日のことゆえ、風が強くなり、体が冷えてきて、定員超過も因子となつて遂に破綻となつたのであろう。その状況はまさに、後出の「真白き富士の根」の歌詞の通りであつたろうと推察される。

当日午後、全校非常呼集して海岸現場・学校に詰めかけ、必死になつて活動。24日に1人、25日に3人、27日に7人と全員収容できた。特に徳田兄弟は、兄19歳が弟小学生12歳をしつかりと抱きしめ、放そうとしても離れず、関係者に涙をそそり感銘を与えた。海軍は駆逐艦2隻、水雷艇2隻が協力、漁船20隻余、横須賀警察では署長以下多数が懸命の活動を行った。

2月6日(日)には追悼大法会が開成中学の校庭で僧侶140名余の読経で行われ、周布県知事以下四千名の人々の参加があり、最後に有名な「真白き富士の根」の歌が開成の姉妹校鎌倉女学院の生徒によつて歌われ、涙のうちに終了した。

(註) ボート

もと軍艦松島(日清戦争時の旗艦)は明治41年4月末、台湾馬公で爆沈。残つたボートが横須賀鎮守府から開成中に拂下げられた。



鎮魂歌碑 右手前にオールが見える

七里ヶ濱の哀歌

三角錫子作
鎌倉女学院教師

- 一 眞白き富士の根 緑の江の島
仰ぎ見るも 今は涙
歸らぬ十二の 雄々しきみ霊に
捧げまつる 胸と心
- 二 ボートは沈みぬ 千尋の海原
風も浪も 小さき腕に
力もつきはて 呼ぶ名は父母
恨は深し 七里ヶ濱邊
- 三 み雪は咽びぬ 風さへ騒ぎて
月も星も 影をひそめ
み霊よ何処に 迷ひておはすか
歸れ早く 母の胸に
- 四 み空にかがやく朝日のみ光り
暗にしづむ 親の心
黄金も寶も 何しに集めん
神よ早く 我も召せよ
雲間に昇りし 昨日の月影
今は見えぬ 人の姿
- 五 悲しき餘りて 寝られぬ枕に
響く浪の おとも高し
歸らぬ浪路に 友よ千鳥に
我も恋ひし 失せし人よ
- 六 盡きせぬ恨に 泣く音は共々
今日もあすも 斯くて永久に

学校から400m程進むと、岸のすぐそばに、不如帰と書かれた石碑が海中に立っている。徳富蘇峰の筆になり、昭和8年に建てられた。不如帰は、蘇峰の弟蘆花作の小説で、逗子に居住している時作ったもの。武男と浪子として明治31年から新聞小説として連載され、大人気作品となった。女性モデルが大山元帥の娘といわれ、いろいろ噂に上ったのである。

小坪の方へ磯歩きできないかと、目をみはらすが、切り立っており駄目と判断。道路は伊勢山隧道へと進む。入口に看板があり「工事中に付歩行禁止」とあったが、他に代行道路がないので無視して進む。隧道も無事5分で抜け、小坪の浜の方に下りて道なりに行くと、小坪漁港に出た。

葉山 杜戸神社の千貫松



逗子海岸と不如帰(ほととぎす)の碑



左の方に進むと、小坪マリーナがあるが、その付近迄しか歩けない。昔は何とか行けたそうだが、今は道が沈下で駄目になって了ったそうである。15時19分、これが最終地点。この先端は、大崎といふ八大龍王が祀つてあると地図にある。最終地点に近づけないのは誠に残念であるが、小坪は三浦郡の西端であり、これにて終了。

前回述べた所は、三崎の油壺付近。最も地形的に複雑だが、人工化の少ない地域で歩けない所もあったが、歩いて趣きがあった。今回歩いた三浦市和田から逗子市小坪の海岸は、地形は複雑ではなく平凡だが、人工化がどんどん進み、自然砂浜・岩礁が少なかった。伊能時代の足跡を辿ってみたいとの願望には、かなり外れた道を歩いたことになり、何か心に残るものが乏しい。私たちが子供の頃遊んだ海水浴場がどれだけ残っているのだろうか。未来に対し、自然遺産をとりつづけた責任は大きいと言えるであろう。

終

(しらね さだお・三浦半島の文化を考える会代表)

編集余話

皆様の温かいご支援でまた増頁になりました。今号は長崎帰りに早速杉浦さんの山鹿素行から始まり、歴史証言の浅野、小島両先生のお手紙が揃う。若い研究者安永さんの寄稿に感謝です。新しいご研究が楽しみです。風間先生の岩船史料は佳境で与惣左衛門の和歌とペガス座。荻原さんは最新のコンピュータソフトを使い二百年前の忠敏さんが見た星空と同じ天空を再現しました。発表を待ちましょう。古文書勉強の報道と銚子宮内家訪問の模様など次号です。(福田弘行)

良助の次男 榎本武揚(四)

伊藤 栄子

武揚夫人たづのこと



正装の榎本武揚と夫人たづ

私は榎本武揚未公開書簡集を読んでいて、武揚と夫人との手紙の緊密なやりとりで、家族を思い、何事も卒直に相談し合う姿勢に感動した。これが今から百年以上も前の話だからである。夫人は嘉永五年(一八五二)に江戸両国の薬研堀で林洞海の二女として生れた。和漢の書に通じ、詩歌をよくし、武揚がロシアへ全権公使として赴いた時、漢詩を送っている。武揚が開陽丸に乗って、オランダから帰国したのが慶応三年(一八六七)三月、その直後の六月、武揚に望まれて結婚

したという。武揚32才、たづは16才であった。夫人の兄はオランダ留学の武揚の同期生で、医師の林研海、また父君の林洞海は幕末から維新にかけての蘭方医。豊前小倉生まれで、江戸の足立長崎に師事。佐藤泰然(初代順天堂主)と共に薬研堀で開業していたが、佐藤が佐倉の藩主堀田正睦に招かれた為、佐藤の長女と結婚してその後を継ぐ。更に長崎にも遊学し蘭医ニューマンについて学ぶ。その後小倉藩医から、奥医師(幕府の医師)として、法眼の位を得た。維新後は大阪医学校長を務めた人である。まさに名門の出で、これにより榎本家は非常に豊かな人脈を得ることになった。また当研究会理事、伊能洋氏の祖父、伊地知季珍氏(呉鎮守府長官)の二度めの奥様は、たづ夫人の末の妹の鑑^{かん}さんで、血縁はないが伊能家も近代になって、榎本家と親戚になったことがわかる。

そのうち幕末の政情不安定の中、武揚は幕府の海軍奉行となり、幕府が瓦解する迄のわずかの間、幕臣として精いっぱい立ち廻った。戊辰戦争の最後に五稜郭で降伏し、投獄され二年余の後に放免されるまで、夫人は収入の途絶えた家をよく守り、姑にも仕えてきた。獄中へも夫人始め武揚の兄姉等は、苦しい家計の中から小まめに差し入れをして武揚を励ました。獄中からの彼の書簡にも、夫人への感謝を記したものがあつた。武揚は当時の社会には珍しいフェミニストであり、マイホームパパであつた。長い海外生活で、外国での経験が身についたこともあるが、これは武揚の天性ではなからうか。書簡集は、こうした榎本家の生活を具さに伝えている。中でも、明治15年から18年までの清国公使時代は榎本夫妻にとって、外交官として最も輝かしく、武揚も彼の本領を発揮して振る舞った時代であつた。

武揚はオランダ語、フランス語、英語、露語、独語に通じ、明治のこの時代これらの語学に明るい人は稀有な存在であり、夫人も語学の勉強に専念していたことが、書簡からも伝わってくる。もともと夫人の父君は長崎で、オランダ人から学んだ人で、兄は武揚と同期の留学生だから、家庭の中でも横文字に違和感はあまり無かったであろうが、それにしても、幕政時代に教育を受け結婚した夫人に外国語の学習は大変な努力を必要としたことであろう。勿論多忙な中で武揚も力を添えたであろうし、公使館の中の書記官から、フランス語を学んでいたことが書簡からうかがえる。時には、武揚の手紙に、無理して余り勉強しないようにという気遣いの一行さえもある。何しろ現代のように詳細な外国語の辞書はなく、手作りの辞書で勉強した時代であった。

当時他の外国と我が国とは、既に条約が締結されていたが、清国との間では、これからの課題となっていて、東洋での重要な外交上の問題点があった。そのころ北京には各国公使館があり、駐在員も多く滞在していた。外交や社交について、欧州の事情を熟知した武揚だからこそ、夫人も外国語の学習に励み、清国へ一緒に赴任したのである。当時は外交官であっても単身で赴任する人が多かった。

公使在任中も、武揚は多忙で出張や本国への召喚もあった。こうした武揚の留守中、清国で出産を経験した夫人は、出産の介助を英国人医師ジョン氏に頼んだ。イギリス公使の夫人とは特に親しく、令嬢の結婚式にも招かれる程の間柄であった。清国にあつて、医師のいない日本公使館では、病人の出た場合、他国の医師に頼らねばならず、ことに夫人は二人の子供（次男春之助、三男尚方）を養育中で、医師は不可欠であり、子供の病気では英人医師のブッセン氏の名が手紙に出てくる。武揚夫妻は多数の外国の公使と交際していて、人々の評判

を聞いて医師も選んでいたらしい。また夫人の交際は隣家の中国人にまで及び、その人柄の広さを知ることができる。ともかく武揚の留守中、夫人の主催で各国公使を招き、日本へ途中帰国の挨拶の会を開いてその任を果たした。

欧米の社交の場では、妻は夫に従ってニコニコしていればよいというものではない。夫と妻がいつも一緒にいたのでは、人々との交流はできないし、むしろ非礼に当たる。進んで社交に臨まねばならない。とくにヨーロッパでは、古くは歴史的にみて宗教改革の後、少しずつ人間の個性が尊重されるようになり、近世になって産業革命のあと経済的發展に伴い女性の地位も向上してきた。こうしたことから、社交界でも妻は夫の添え者ではなく、一人の人間としてその場の人々と意志の疎通をはかる必要があった。これは情報収集のために欠かせないことで、それには何といっても外国語をたしなむ必要があった。

ところで国内でも、たづ夫人の語学力を、最も頼りにしていたのは、外務郷の井上馨夫人で、「貴方が居ないと心細い、早く帰国して下さい」と手紙に度々記し、また一時帰国した武揚にも「榎本の奥様がいらつしやれば、是迄の様に一人で外国婦人と付き合うような迷惑は無くなるから、早く帰国されるのを、待ちわびています」と伝えている。

井上馨といえば、懸案の不平等条約改正の手段として、先に立つて鹿鳴館を建築した。完成が明治十六年で英国人ジョサイア・コンドル（日本近代建築の父といわれた）の設計による。時代は折しも落成した鹿鳴館で、井上夫人を悩ませた大迷惑の国際的な社交が、始まるうとしていた。しかし、今まで井上馨夫人武子は外国人との交際が皆無ではなかった。明治九年（一八六七）から約一年、夫と共に欧米で暮らした武子夫人は外国にあつて英語を学び、欧米のマナーを身に付

けて帰国した数少ない日本婦人の一人であった。鹿鳴館でもホステス役を務めたこともある。

明治十六年十一月二十八日、鹿鳴館の開館式の夜会に、武揚の姉、観月院が招かれた事がたづ夫人の手紙に出てくる。そのころ、観月院は武揚の長男と東京の留守宅を守っていた。長男は学習院に在学中で、名は金八という。この名の由来は釜次郎の釜を分解してつけたのだという。これも榎本家特有のユーモアであるう。

明治十七年六月十二日から三日間、日本で最初の国際慈善バザーが鹿鳴館で開催された。たづ夫人も名誉委員として名を列ねている。このバザーの会頭は大山巖夫人（捨松）で、彼女は明治四年に初めて我が国から米国へ留学した五人の女子学生の一人であった。その他、伊藤博文夫人、井上馨夫人、森有礼夫人等の名が見える。たづ夫人はこの頃北京にいたので、参加することはできなかった。帰国したのは、明治十八年十月である。当然のことながら帰国によって、家族が取り交わした書簡はここで終わる。そのため、以後の榎本家と夫人の生活の様子は知るよしもないが、夫人は母として三男三女を生み育てた。円満なことで知られた夫妻であったが、夫人は明治二十五年八月二日、武揚より十六年も早く41才でその生涯を閉じた。明治初期、外交官夫人のさきがけとして、夫人の名は特筆されるべきであろう。なお、夫人は「明治閨秀美譚」鈴木光次郎編 盛文館発行、「明治烈婦伝」東京文永堂にも載る程の才媛で、その一生は夫人の生い立ちと共に、華麗な生涯であった。

武揚の扁額



「学後不足」

辛卯冬書

武揚印

（学んで後、足らざるを知る

辛卯の冬書す）

この扁額は現在、網走市の東京農大（生物産業学部）教育研究情報センターの閲覧室にある。榎本隆充氏から頂いた資料によれば、生物産業学部が開設されて間もなく、北海道関係の基本的書籍の収集に努めるうち、古書店のカatalogで偶然、この書を発見されたそうである。その後東京へ送り、筆跡鑑定をして購入されたという経緯があった。

この一文は「礼記」からの引用という。

これを武揚が書いた年は辛卯明治24年で、□の字は読みにくいが卯の異体字である。干支は十干と十二支

を組み合わせたものであるから、60年に一度しか同じ干支は廻つてこない。従つて何年と書かなくても、干支だけで凡その年の見当がつくのである。

この年武揚は56才、武揚が農大の前身、育英寮を設立した年であつた。奇しくも因縁を感じないわけにはいかない。やはり縁があつて帰るべき所に戻つてきたのではなからうか。学問の場にふさわしい書の内容である。

* (異体字について) 異体字の定義は大変むずかしい。昔から使われてきた字であるが、辞書にはなく、古文書や古典では時々出てくる。

異体字を無視して読むことはできない。一般的には、現在の正しい楷書と認められている字体や、康熙字典、当用漢字表に出ている正字に對して、それ以外の古字、本字、俗字、略字なども含まれる。と異体字辞典にはあるが、むずかしい理屈を言つても理解しにくい。古文書の場合は数多く読んで覚えていくのがよい。例えば

島：寫 虎：席 野：埜 秋：穠、秌 出：岌

こうした字も異体字で、現在当用漢字には無い字も先祖から代々使われてきた苗字では使用を許されている。当研究会の星埜代表理事の埜も異体字である。また角力の興行の幟りに「千穠楽」：千秋楽：と書くこともある。また意外に人名では使われている。

この一文は「札記」の中、学記^{がくき}第十八章にある。学記の題意は学問の目的、教育の法、教師の責務をのべ、大学篇と共に儒教の学問論の基礎をなしているといわれる。

○雖^レ有^レ至道、弗^レ学不^レ知^二其善^一也。 *弗^レ：ず (不と同じ否定)

(至道^{しどう}有りとも雖も、学ばざれば、その善きを知らざるなり。)

*至道 (人の守るべき最高の道徳)

○是故学然後知^レ不足、教然後知^レ困。

(この故に学びて然る後に足らざるを知り、教えて然る後に困^くしむを知る。)

前後文略

この文言は、宗教や文化、国境を越えて人々が学問する時、また人に学問を教える時、経験するものではなからうか。

明治十七年一月、武揚は井上外務郷に召喚され一時帰国したことがあつた。当時井上は四国の道後温泉に逗留中で、武揚は北京から四国へかけつけた。数日滞在するうち、武揚のことを聞きつけて、書を乞う者が続々と来て閉口したと、妻宛ての手紙に出ている。少年の頃から、昌平坂学問所(昌平寮)で漢学に鍛えられた武揚である。揮毫の場合は、こうした研鑽^{けんさん}が直ちにものを言う。おそらく他にも人々に書き与えた機会があつたであろうから、何時の日、何処からか、埋もれた書が発見されることを期待したい。

榎本隆光氏

榎本武揚が受けた子爵の位は子から孫へ、この後昭和16年11月御父君の隠居により、曾孫の隆充氏が6才で公爵を襲爵された。戦時中は、学習院で一学年上に居られた今の天皇陛下と御一緒に初等科の生徒は日光に疎開をした。その後戦災で西新宿の自宅は焼失し、戦後は華族の制度も廃止された。旧子爵家にとつても苦難は厳しかったであろう。その後、隆充氏は曾祖父の実像に迫りたい思いから、武揚研究に取



1935年(昭和10)東京生まれ。榎本光武
学研究所代表取締役。東京農大客員教授。
梁川会会長。著書に「榎本武揚未公開書簡集」など。

り組まれて30余年になる。隆充氏の果たされた武揚研究の中の「榎本武揚未公開書簡集」は、五稜郭、獄中、ロシア公使時代に家族に宛てた120通の書簡を編集されたもので、読む程に彼の生き様が伝わってくる。妻を愛し家族を思い、肉親の絆を常に大切にしている節度を以って役職に励んだ。書簡であるから嘘もてらいもない。有りのままの人間武揚を知る上で貴重である。

晩年までの武揚

明治二十五年九月、日本気象学会会頭になったあとも武揚は頭の中に事業をいくつか描いていた。政界ではそれなりの功を遂げ、薩長の中にあっても彼の力は認められてきた。しかし、すべてが成功したわけではない。枢密顧問官となった頃計画し、政界の外で有志と立ちあげたメキシコ移民の計画は、現地調査の不足と資金の問題で行きつまずり、成果は得られなかった。現地には後にその思想は受け継がれ、榎

本殖民地跡の碑として残されている。

榎本殖民の前年、ハンブルク出身のギーゼマンがメキシコのチアパスの土地を購入していた。彼はメキシコへ入る前に国境のグアテマラでコーヒー栽培を十分に経験していた。そのコーヒーの成功をメキシコで再現するために、土地を手に入れ大地主となる。これを見た多くのドイツ商社がメキシコでコーヒーを栽培する。ちなみにドイツは一大コーヒー消費国であり、バルト海沿岸諸国もドイツに劣らぬコーヒー好きの国々で、メキシコは今や世界第四のコーヒー生産国となった。少なくとも武揚の目論見は的外れではなかった。彼の着眼点は他の日本人の及ばない所にあつた。また北海道で達せられなかった夢もあり、メキシコではコーヒー、砂糖の栽培を考えていたという。

武揚はロシアからの帰途でも、シベリアのトムスク県で、中国商人が活躍し、中国からの茶の隊商を多く見かけたことから、日本の静岡茶の生産を輸出品目として考えている。ロシアは喫茶国として名高い。ロシアの小説によく出てくるサモワールという湯沸し器を使い彼らは茶を飲んだ。前号で述べた毛皮のことも、未だ貧しかった日本の産業を興す一助として、殖産の二字は常に武揚の脳裏にあった。

明治二十七年一月、総理大臣伊藤博文の下に、武揚は再び農商務大臣に任ぜられた。次いで黒田、松方の二代の内閣の閣僚として務めることになる。二十一年農商務大臣になった時は、通信大臣が本官で兼任であったが、今度は農商務大臣が本官であった。二十七年といえ、維新以来最初の危機である日清戦争が勃発した。この戦時中の内閣では薩長の人物が重要なポストに当たり、しかも戦争に伴い大臣といえども更迭はしばしばあったが、武揚は最後まで農商務大臣の地位にとどまった。彼はその職責をよく果たしたのである。

そのころ、栃木県足尾町にある古来有数の銅山が、明治になって幕府直轄の鉱山から古河市兵衛（鉱業王、古河財閥の祖）の手に移った。

明治十年のことである。古河市兵衛と武揚は前から鉱物の研究について、私信を交わした仲であった。彼の経営する足尾銅山から流出する鉱毒が、渡良瀬川に流れこみ、明治十三年（一八八〇）ごろから魚類の死滅、農作物の不作、農民の健康への害などが、利根川流域の諸県の農村にまで大被害を与えた。明治二十七年から農商務大臣であった榎本は、閣僚として初めて現地を訪問し自ら調査をした。のち内閣を動かして足尾銅山鉱毒事件調査委員会を設置したのは榎本である。

この事件を地元の代議士、田中正造が明治二十四年以後議會で問題にし、被害者の農民も鉱業停止をにかけて立ち上ったが、政府はこれを憲兵や警察の力でおさえつけた。いっぽう鉱毒防御命令を急遽出したが十分な対策とはいえなかった。たまたまこうした社会状況の中、武揚は大臣の席にあったが、明治三十年三月二十九日足尾銅毒事件の引責により辞任する。時に62才、農商務大臣となつて、三ヶ年余の在職であった。これ以後、彼は官界からは事実上引退した。

武揚の研究の中でも「流星刀」のことは余り知られていない。流星刀の研究も武揚は自ら広めようとはしなかった。北海道開拓出仕以来砂鉄の研究は一生を通じて続けられ、オランダ留学時代は特に化学の勉強をしてきた。それを日本の産業に役立てれば国の富を増大させることになる。国費で外国に在るということは、常に国家を意識したに違いない。石鹼製造についても、オランダ語の原書を苦心して翻訳している。中でも彼がとくに興味を持ったのは、鉱物研究と製鉄技術であった。砂金、その他の金属と同時に隕石も合せて研究した。かつて駐露時代、ペテルブルグでロシア皇帝アレキサンドル一世が珍藏して

いた流星刀を見て以来この製作を考えていた。しかしこの研究論文は武揚の死後やっと発見された。個人的な研究を彼は世間に余り発表しなかった。後に彼の所有の隕石で作った刀剣の一振を、皇太子（大正天皇）の丁子^{ていし}の祝いに献上した。現在宮中に所蔵されているという。

＊流星刀 （隕石によって作られた刀剣）

＊丁子の祝い（一般の人の成人「二十才」の祝い）

妻の死去した後、観月院が家をおもに取りしきっていたが、晩年の武揚は主として向島の別荘に居て過したという。彼の次男、榎本春之助氏の対談を読むと、その頃の様子がよく分かる。武揚は官界を離れてからは、数多ある会の会長などをして、殆ど毎日出かけていた。家にいるのは夜くらいのもので、それ程、彼は名誉職や肩書きを持っていたのである。肩書きを持っていたとしても、その名に甘んじないで、会合には必ず顔を出し、こまめに役職をこなしていたのも武揚らしい。

また在任中でも交際が広く、黒田清隆は朋友で、後に彼の長女と武揚の長男が結婚し、親戚となったから言うまでもなく、伊藤博文、後藤象次郎、井上馨、土佐の土方伯爵等がよく別荘に見え酒を飲みかわしたという。当時の向島には名士の邸宅がかなりあった。

面白いのは、時々土曜の晩に、五稜郭のころの連中（武揚は脱走連と呼んでいた）数十名が向島の別荘に集つて、揃いの浴衣を着てどんな騒ぎをして楽しんだという。若い頃生死を共にした仲間の脱走連とは一生を通しての交わりがあり、生活に困った者へは常に手を差しのべていたといわれる。

また徳川慶喜のために、命を張って何度か尽した浅草十番組町火消の頭、新門辰五郎が亡くなって、孤児となったその子を自宅に引き取り、孫の近松虎蔵には旧制の中学教育を受けさせている。彼はのちに

子爵榎本家の家令（明治以後宮家や華族の家務を管理し、使用人を監督する職）となった。そのころ武揚は徳川育英会の会長もつとめていた。これは旧幕臣の子弟の教育として、奨学金の支給を目的としていたが、明治24年一步進んで学校を創設し、旧幕臣に限らず広く一般人の教育に乗り出すことになった。育英堂を設立し養主となる。この育英堂農業科が現在の東京農業大学の前身である。こうして武揚は最後まで幕臣としての気骨を失わなかった。明治四十一年七月、病を得て床に伏す日が多くなった。病が重篤の報が天聰に達した時、特旨を以て正二位勲一等に叙せられた。同年十月二十七日73才で他界し、葬儀は駒込の吉祥寺で海軍葬として取り行われた。彼を高く評価していた伊藤博文は、この翌年満洲のハルビンで安重根に暗殺される。この激動の時代を懸命に生きた榎本武揚を民衆は忘れていなかった。彼の葬列が寺に着いた時、後尾はまだ向島にあつたといわれる。多くの人が彼の死を悼んだ。

(完)

おわりに

榎本武揚を書き始めて、ここまで長くなるとは思わなかった。武揚という人は、調べる程に面白く、人間的にもすばらしい。すっかり彼の人の虜となつてしまった。彼の生きた薩長主導の明治政権の中をよくぞ勤め抜いたとおもう。武揚の父良助について書いていた頃、伊能陽子さんから参考の為に「榎本武揚未公開書簡集」を送って頂いた。この本により人間武揚は益々輝いて見えた。その後、榎本隆充氏から資料や参考文献について御教示を頂き、回を重ねてきた。その折り榎本氏から武揚の明治期の文書が多数あるとのこと、その解説の御依頼を受けた。私も既に若くはない。尊敬する武揚の文書解説は、私にとつて人生最後の大事な仕事となるであろう。その意味で健康の許す限り取りくみたいと考えている。また今までに書き洩らした記事もあった。この会報42号で記した武揚の文中に、慶応三年二月、開陽丸で武揚らと一緒にオランダから帰国した職方に、大砲師の中島兼吉という人がいる。彼の名前の一字を貰い名付けられた孫の兼子^{かねこ}は、声楽家で、のちに民芸運動家柳宗悦氏の夫人となった。私の友人小池静子さんは国立音大で柳兼子夫人に師事し、夫人の生涯のちに出版した。彼女から得た情報である。御世話になった方々に心からの感謝を捧げたい。

- 参考文献
- * 榎本武揚 加茂義一著 (中央公論社)
 - * 幕末オランダ留学生の研究 宮永孝著 (日本経済評論社)
 - * 榎本武揚未公開書簡集 榎本隆充編 (新人物往来社)
 - * 榎本武揚 井黒弥太郎著 (新人物往来社)
 - * 榎本武揚から世界史が見える 臼井隆一郎著 (PHP新書)
 - * 新釈漢文大系 (礼記) (明治書院)
 - * 北方領土 (北方領土問題調査会編)
 - * 華族 明治百年の側面史 (北洋選書)
 - * 華族誕生 浅見雅男著 (K・K リポート)

(いとう えいこ・古文書研究家)

伊能測量隊 子午線一度の長さの測定 (二)

佐久間 達夫

伊能忠敬は、享和二年の第三次羽越測量で、江戸深川の忠敬宅から白川（白河）までの各宿駅で、地上南北一度の里数を求め、その値を二十八里二分と決定した。（享和二年戊 東都至白川南北直線）

資料三 享和二年東都至白川南北直線

伊能忠敬記念館所蔵

※子午線一度の長さの計算値の確認は筆者が行なう。

例 自深川至白川

深川の伊能忠敬宅 北極高度 三五度四〇分三〇秒
白川 北極高度 三七度 七分

（寛政二年測量小図の余白記載）

深川の忠敬宅と白川の距度（緯度差） 一度二六分三〇秒
伊能大図の縮尺 三六〇〇分の一 （一里が三寸六分）
大図上の深川と白川の南北の長さ 一丈四尺六寸二分
深川から白川までの距離 一丈四尺六寸二分÷三寸六分

＝四〇里六一一（忠敬四〇里六一一）

・子午線一度の長さ

一率 二率 三率 四率

一度二六分三〇秒（対）四〇里六一一＝一度（対）X里

五一九〇秒 対 四〇・六一一里＝三六〇〇秒対X里

五一九〇X＝四〇・六一一×三六〇〇

X＝一四六一九九・九六÷五一九〇
X＝二八・一六九五四九（忠敬二八里一七）
と、なる。

このほか、伊能忠敬記念館には、「自東都深川距奥州南部領野辺地北極出地度推算」に、江戸深川から陸奥国野辺地までの各宿駅間で算出した緯度一度の長さが、次のように記されている。

資料四 自東都深川距奥州南部領野辺地北極出地度推算

伊能忠敬記念館所蔵

地上南北一度の里数

深川 距 雀宮	二八里一一	雀宮 距 喜連川	二八里二〇
喜連川 距 白川	二八里一一	白川 距 本宮	二八里〇七
本宮 距 福島	二八里三二	福島 距 越河	二七里二六
越河 距 大河原	二七里八八	大河原 距 仙台	二八里三三
仙台 距 築館	二八里三三	築館 距 一ノ関	二八里六五
一ノ関 距 水沢	二八里五二	水沢 距 盛岡	二七里九三
盛岡 距 沼宮内	二八里一三	沼宮内 距 一ノ戸	二八里五五
一ノ戸 距 三ノ戸	二七里九一	三ノ戸 距 七ノ戸	二七里五八
七ノ戸 距 野辺地	二七里六三		

・平均値（四捨五入による分単位迄） 二八里一分

・最頻値 二八里一分

※子午線一度の長さの計算値の確認は、筆者が行う。

・深川距喜連川

深川の北極高度 三五度四〇分三〇秒

喜連川の北極高度 三六度四三分（享和元年測量）

深川と喜連川の緯度差 一度二分三〇秒

伊能大図の縮尺 三六〇〇〇分の一 一里が三寸六分

大図上の深川と喜連川の南北の長さ 一丈二寸九分七厘

深川から喜連川迄の距離 一〇二九七厘÷三六〇里

|| 二八里六〇二八 (忠敬二八里六〇二五)

一度の長さ

一度二分三〇秒対二八里六〇三||三六〇〇秒対X里

X || 二八・六〇三×三六〇〇÷三七五〇

X || 二七・四五八 (忠敬 二八里一〇)

※伊能隊、測定値修正箇所ある。

・自喜連川距仙台

喜連川の北極高度 三六度四三分 (享和元年測量)

仙台的北極高度 三八度一六分一五秒 (享和元年測量)

喜連川と仙台的緯度差 一度三三分一五秒

伊能大図の縮尺 一里が三寸六分

大図上の喜連川と仙台的南北の長さ 一丈五尺六寸九分六厘

喜連川から仙台迄の距離 一五六九六厘÷三六〇里

|| 四三里六 (忠敬 四三里五九七)

一度の長さ

一度三三分一五秒対四三里六||三六〇〇秒対X里

X || 四三・六×三六〇〇÷五五九五

X || 二八・〇五三 (忠敬 二八里〇五)

※伊能隊、測定値修正箇所ある。

・自仙台距南部

仙台的北極高度 三八度一六分一五秒 (享和元年測量)

南部の北極高度 三九度四三分 (享和元年測量)

仙台と南部の緯度差 一度二六分四五秒

大図上の仙台と南部の南北の長さ 一丈四尺七寸〇〇一

仙台から南部迄の距離 一四七〇〇一毛÷三六〇〇毛

|| 四〇里八三三六 (忠敬 四〇里八三三六)

一度の長さ

一度二六分四五秒対四〇里八三三六||三六〇〇秒対X里

X || 四〇・八三三六×三六〇〇÷五二〇五

X || 二八・二四二 (忠敬 二八里二四)

・自南部距野辺地

南部の北極高度 三九度四三分 (享和元年測量)

野辺地の北極高度 四〇度五二分三〇秒 (享和元年測量)

南部と野辺地の緯度差 一度九分三〇秒

大図上の南部と野辺地南北の長さ 一丈一尺六寸六分八厘

南部から野辺地迄の距離 一一六六八厘÷三六〇厘

|| 三二・四一一 (忠敬 三二里三九一)

一度の長さ

一度九分三〇秒対三二里四||三六〇〇秒対X里

X || 三二・四×三六〇〇÷四一七〇

X || 二七・九七一 (忠敬 二七里九六三)

※伊能隊、測定値修正箇所ある

・自喜連川距野辺地

喜連川の北極高度 三六度四三分 (享和元年測量)

野辺地の北極高度 四〇度五二分三〇秒 (享和元年測量)

喜連川と野辺地の緯度差 四度九分三〇秒

大図上の喜連川と野辺地南北の長さ 四丈二尺五分七厘

喜連川から野辺地迄の距離 四二〇五七厘÷三六〇厘

|| 一一六里八二五 (忠敬 一一六里八二五)

一度の長さ

四度九分三〇秒対一一六里八二五〇三六〇〇秒対X里

X \parallel 一一六・八二五×三六〇〇÷一四九七〇

X \parallel 二八・〇九四(忠敬 二八里〇九四↓修正二八里二四)

※伊能隊、測定値修正箇所ある。

・自深川距野辺地

深川の北極高度 三五度四〇分三〇秒

野辺地の北極高度 四〇度五二分三〇秒(享和元年測量)

深川と野辺地の緯度差 五度一二分

大図上の深川と野辺地南北の長さ 五丈二尺七寸八分五厘九毛

深川から野辺地迄の距離 五二七八五九毛÷三六〇〇毛

\parallel 一四六里六二七五 (忠敬 一四六里六二七五)

一度の長さ 五度一二分対一四六里六二七五 \parallel 六〇分対X里

X \parallel 一四六・六二七五×六〇÷三一二

X \parallel 二八・一九七五九(忠敬 二八里一九七六)

第一次蝦夷地測量で、緯度一度の里数が、二七里余であることを把握した忠敬は、第二次伊豆以北太平洋岸の測量と、第三次の江戸から白河までの測量で精測した結果、地上南北一度の里数が二八里七町一二間(一一〇・七五km)であることの確証を得た。しかし、師の高橋至時は、西洋では、南北一度の里数を「一五里」とか、「六〇里」とかいつて不確定であつたので、慎重な態度をとっていた。これについて忠敬は「私が測定した一度の長さを、それほどまでに信用できないのなら、以後の測量は止めるべしと、憤然とした」と、「伊能翁言行録」に記されている。

しかし、緯度一度の問題も、享和三年春、若年寄堀田摂津守から高

橋至時に貸与された『ラランデ曆書』によって解決された。『ラランデ曆書』は、フランス人ラランデの著書をオランダのストラッパが蘭訳したもので、成瀬という旗本が所持していた本で、幕府がそれを買上げるのに八〇両という高値を吹きかけられたことから、当時の天文曆学書としては最高のものであつたことが窺われる(『高橋景保の研究』一九七七年)。

至時は、享和三年二月から『ラランデ曆書』四冊と「付表」一冊の翻訳を始め、翌年一月五日、四一歳で病死するまでに『ラランデ曆書管見』八冊を書きあげた。至時が翻訳し、忠敬が書き写した『ラランデ曆書管見』は、香取市の伊能忠敬記念館に保管されている。

高橋至時の死後、至時の長男景保、二男洪川景佑、足立信頭などによって『ラランデ曆書』の未翻訳部分の翻訳と補稿がなされ、文政九年四月に『新巧曆書』という表題で纏められた。

『ラランデ曆書管見』の第三冊三八三丁・二六八六章に、

地球は真円にあらずして、楕円形なり。その形東西長く、南北短し。東西三二八一〇一二トアズ(六三九四・六九二三km)、南北三二六二六八トアズ(六三三八・九七八九km)、地上最大一度の長さは、五七二六四・五トアズ(一一一・六〇八五km)、最小一度の長さは、五六九四四・七トアズ(一一〇・九八五二km)、あり、緯度の高低によって里数も違ってくる。

また、第三冊三八八丁には、最も小なるもの五六七五トアズ(一一〇・六一km)、最大なるもの五七四二トアズ(一一一・九二km)なり。今、得る地上一度の数に近し故に、此数地上一度の数なることを知るなり。

と、記述されている。これによって、忠敬の南北一度の里数が、天文学者に認められることになった（『ラランデ暦書管見』『日本東半部沿海全図』の高橋景保の序文）。

保柳睦美氏は、『ラランデ暦書管見』にある地球の南北および東西の長さには単位がないが、これはフランスの長さの単位「トアズ」であるとの見当がつく、と述べている（『伊能忠敬の科学的業績』）。

単位「トアズ」について記述されている伊能忠敬関係の図書には、文化元年八月に幕府に上呈した「日本東半部沿海全図」の高橋景保の序文の中の「フランス国では、二二八三竿（竿は、トイスの訳）を以て一里とす。一竿は、本邦の曲尺六尺四寸二分に当る。」を依拠に、

一トアズ＝六尺四寸二分 一尺＝〇・三〇三〇三m（折衷尺）
 一トアズ＝〇・三〇三〇三×六・四二
 ≒一・九四五四五二六

したがって、一トアズは、約一・九四五四mと、述べているものと、依拠したものは記していないが、フランスで常用されていた長さの単位の一トアズを一・九四九mとすれば、メートル単位に換算しているものがある。

押田勇雄編『単位の辞典』では、「トアーズ」について、トアーズは、フランスのメートル法以前の単位。一トアーズは、六ピエで、一・九四九mに相当する。メートル法の設定に当たり、地球子午線の測量に用いられた。フランスの一ピエは、〇・三二四八mである。と述べている。

筆者は、地球の南北の長さなどについては、一トアズを一・九四九mとして換算した。

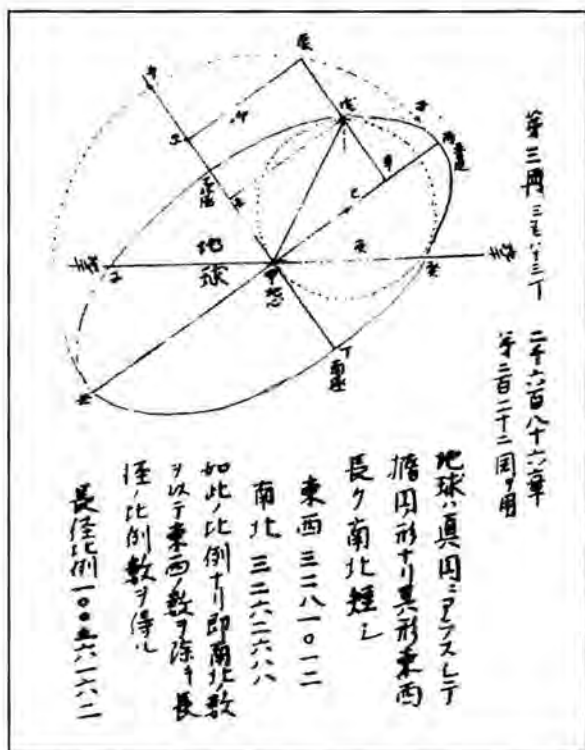
伊能忠敬が、前述したような測定値をもとにして、子午線一度の長さを二十八里二分（二分は、七町二二間）と確定したのは、最頻値か、平均値によるか、あるいは、その他の処理の方法を用いたかは、筆者は現在まで、その記録を見たことがない。

（了）

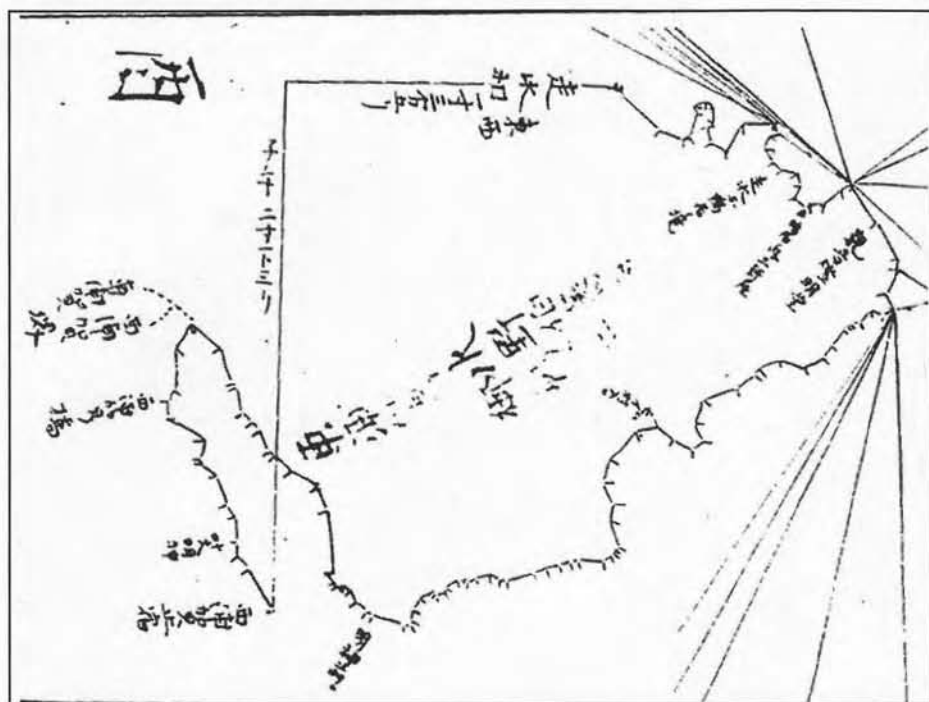
○ 地球図（ラランデ暦書管見）

伊能忠敬記念館所蔵

（さくま たつお・伊能忠敬研究家）

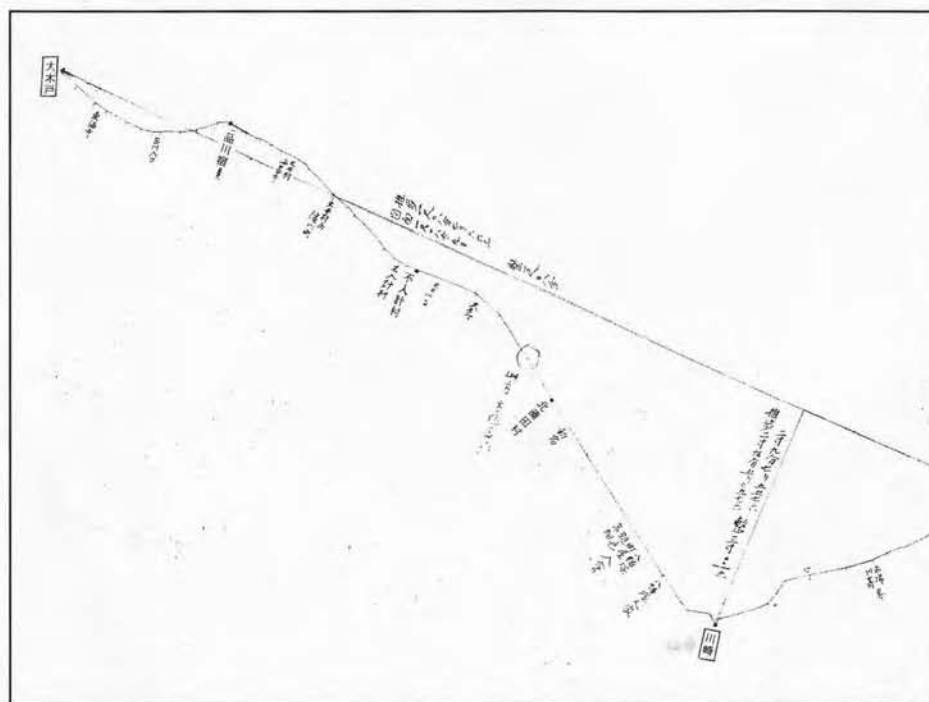


○ 浦賀付近の下絵図



伊能忠敬記念館所蔵

○ 芝大木戸・川崎宿付近の下絵図



伊能忠敬記念館所蔵

忠敬談話室だより

近世事典と大計測 山本 公之

ささやかに本文組方見本それも中央見開きに忠敬画像活きる!

吉川弘文館「日本近世人名辞典」本文組方見本折込みの見開きは、左端は徳川家光花押・印と画像。中央は伊能忠敬画像で飾られ、その記述ならびに編著の参考文献は『伊能忠敬測量日記』大谷亮吉『伊能忠敬』にてなんとも言えない光芒を放っている。

「緯度一度の長さを知らうとして、江戸の測量を企てたが、その距離が短かすぎるので、至時のために従い、蝦夷地の測量を考え、幕府に願ひ出て、自費による測量の許可を得た。寛政十二年閏四月江戸を出発、十月まで蝦夷東南海岸および奥州街道を略測、十二月その地図を幕府に献上した。享和元年(1801)伊豆より陸奥に至る海岸、同二年陸奥より越後に至る海岸、以下省略。一度はお目を通されよ。その他にはいずれも部分的だが、伊能穎則・猪熊教利・根岸鎮衛・根来東叔・鼠小僧次郎吉・徳川家光(画像・花押・印)・徳川家茂(印)。左縦端が画像・写真で徳川吉宗・清水次郎長・松尾芭蕉・新井白石・シーボルト・沢庵宗彭・吉田松蔭。豊臣秀吉から幕末維新まで三六五七人を網羅!

◆ ◆ ◆ 今日は何の日

いわゆる普通の暦を見ていたら4月11日は「メートル法公布記念日」。そんな折しも折り、次ぎなる本を読む気になった。

ケン・オールダー著 吉田三知世訳
万物の尺度を求めて 早川書房
メートル法を定めた子午線大計測

以下は大阪府立大学金子務名誉教授が4月23日、日本経済新聞の書評欄で伊能忠敬に触れて居る部分を紹介いたします。

なぜ1分は、地球の子午線の4分の1の1000万分の1とされたのか?

1792年6月フランス王政末期、二人の天文学者が、途方もない使命を帯びて正反対の方向へと旅立った。彼らの使命は世界の大きさを測ること、少なくともダンケルクからパリを通りバルセロナに至る範囲の子午線の長さを測定することであった。

《メートル法制定の大事業史を記録した本書を読みながら、二人を追うように八年後、ユーラシア大陸の反対側の日本で子午線の長さの決定や日本全土の測量を始めた伊能忠敬の人生を考えていた。十八世紀末の天文学の盛り上がり、洋の東西で地球を計る大事業に英才たちを駆り立てたのである》

(やまもと きみゆき・小平市)

東海道の伊能下図 加藤 忠三

昨年私が出た新聞の記事を伊能家に送ったところ、伊能陽子さんから電話をいただき、古文書を佐原市に寄付する準備をしていると伺いました。

この何年か図書館に通い、インターネットを使い、伊能図についてこつこつと勉強を重ねています。勉強をやっていくうちに、どこにどんな資料があるかを知ることが大変大切であることを痛感しています。又其の資料の目録を作ることには大変な作業であるということもこのごろやっと理解できるようになりました。さぞ大変だったと思います。

現在第五次測量で作成の伊能下図の由比から江尻までを検証しています。江戸時代の東海道を紹介する本がたくさん出ていますが、其の本を読み漁っているうちに伊能図による検証がまったくできていないことに気づきました。これだけ伊能図がもてはやされ、大変正確なものだといわれながら、当時の東海道がどうなっているかを検証するのに使われないのはなぜでしょうか。

昨日下図をコンピュータで処理したものを由比からサツタ峠を経て興津までを歩きました。サツタ峠付近には多くの「サツタ峠」の標識があります。しかし下図にサツタ峠と印されている標識がありません。

当時伊能忠敬は地元の案内人をつけ、測量

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどこでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

ー予定ー

発表誌 原則として年四回 64頁

第46号 締切 9月末 発行 11月

②例会・見学会の開催

第47号 締切 12月末 発行 2月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第48号 締切 3月末 発行 5月

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万元を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをお送りします。

⑤（04年8月事務所は新宿区下宮比町から移転）

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel・Fax 03-3466-9752

事務局メール fuku-inh@gj9.so-net.ne.jp

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、FD、CDなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行（400字詰用紙4枚分）、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等（返却します）添付可。

話題、各種情報、近況などお便りをお待ちしています。

伊能忠敬研究会のホームページ 蒸気船の汽笛？

ホームページは秋葉武晃さんが担当しています。

<http://iroh-tadataka.org>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事です。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図、会報の話題など御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.ttrm.or.jp/~koko>

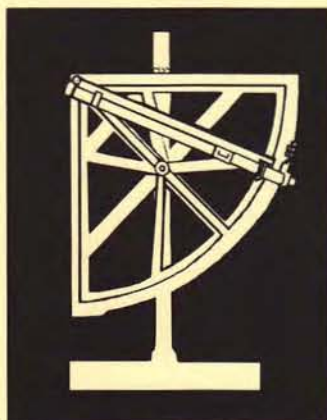
編集後記

「この街（長崎）の水は汲めども尽きぬ深い和・華・蘭の味がする」は前号で河島さん。「尽きぬの味」は紫の夜のしっぽく料理かと思いましたがノーセンスでした。「週間子供ニュースの解説コーナー・今週のわかん」◇出島でガラス瓶に水銀が展示されていました。どこから集められ何に使われたのか、わからん◇江戸しぐさ語りべの会主宰越川禮子さんです。「よく働きよく遊びストレスをためないというのが江戸の暮らし方だったようです。しかも人の評価は、『はた（傍）を楽にする』働きの多い少ないで決まったそうです。地位や財産でなく、自分以外の人や世間のために働くことに人間の価値をみる。『自己中』なんて言葉は、江戸にはなかったでしょうね」江戸住まいの忠敬さんや忠敬さんが吸った空気ですね◇ラジオ番組で永六輔さん。永さんは名代の機械オナチ。忙しい人なのに携帯電話が持てない、使えない。「急用はもちろん電話。メール、FAXも重宝。だがハガキや手紙は捨てがたい。話ことばと違う独特で貴重な表現。人の気持ちの文化である」◇日本はいいいな四季の花時計：影法師◇残暑、いとうて下さい（F）

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.45 2006



TOPICS

My Revisit to Yakushima		
: The Pine Tree has Grown over my Height	Inoh Hiroshi	1
"The List of Documents about Tadataka owned by the Inoh Family in Setagaya" has been Published		
Historical Evidences by Asano Tasuku and Kojima Kazuhito	Editorial Department	2
New Signboard for Sakabe Teibe's Sights has Set up	Inoh Yoko	4
Irrigation Canals and Water Pipes in Sawara Village	Sakuma Tatsuo	5
Walking along the Bungo Highway and the Taikoh's Road	Baba Ryohei	22
A Topic of "Retrospections and Reflections about Inoh Studies"	Editorial Department	53
FEATURE ARTICLES : STUDY TRIP TO NAGASAKI		
Hirado and Nagasaki : Places Rich in Memories for Tadataka	Maeda Koko	8
Snapshots of our Study Trip : "Hirado Nagasaki Saruku"	Fukuda Hiroyuki	14
Yamaga Sokoh and the Fief of Hirado	Sugiura Morikuni	18
NEW MATERIALS		
Inoh Tadataka as a Pioneer of Culture(2)	Miyauchi Satoshi	24
Shibayama Denzaemon : Member of Inoh's Survey Team(2)	Yasunaga Junko	29
Korean Mountains on Inoh Maps — part II —	Tsujimoto Motohiro	38
REGIONAL MATERIAL		
Inoh's Survey in Echigo Iwafune "Yosoemon's Memorandum"(3)	Kazama Hirokichi	46
ARTICLES		
Walk along Tadataka's Route in Miura Peninsula(3)	Shirane Sadao	54
Hakoda Ryosuke's Second Son: Enomoto Takeaki(4)	Itoh Eiko	59
Distances of one degree of the Meridian by Inoh's Survey (2)	Sakuma Tatsuo	66
MEETING ROOM		
Early Modern Dictionaries and The Great Measurements	Yamamoto Kimiyuki	71
Cartoons for Inoh Maps of Tokaido Highway	Kato Chuzou	71
I Met Inoh Maps Again!	Okunaga Nagisa	72
Daily Topics and Informations	Editorial Department	72

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY